

グレモリー家の野良犬

ケツアゴ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

恩には報いましょう。与えられた仕事はこなしてみせる。私を助けた事に見込み違いはなかったと周囲に知らしめる為に……。だが、其処までだ。それ以上は求めるな。野良犬を飼う犬に、家族に出来るなど決して考えるな。野良犬は決して誇りを捨てはしないのだから……。

挿絵を車椅子ニートさんから頂きました。感謝です

メルギス 火傷無し

スカー

目次

野良犬の始まり | 1

野良犬の顔合わせ | 8

野良犬のお仕事 | 17

野良犬の弟子 上 | 24

野良犬の弟子 下 | 32

野良犬と負け犬 | 39

野良犬の休日 | 46

野良犬とサキユバス | 53

野良犬と眼鏡 | 60

野良犬と少(幼)女 | 67

野良犬と魅了 | 77

少女剣士と聖剣 | 87

野良犬と苦手な相手 | 95

野良犬と相談 | 103

吸血鬼と悪魔被い | 112

野良犬と教授 | 120

サキユバスと苦手な物 | 129

猫と不死鳥 | 137

野良犬と魔王少女 | 147

剣士と疑問 | 154

野良犬の教え子達 | 160

野良犬とストレスマツハ | 171

サキユバスとコカビエル | 180

騎士と聖剣 | 189

少女剣士と妖刀 | 196

野良犬と後始末	205
サキュバスと龍神	212
猫と再会	219
野良犬と屋敷での休日	227
龍劍士?と幸福	237
龍劍士?と龍殺し	245
野良犬と襲撃者	253
野良犬と復讐	260
挿し絵有り	

野良犬の始まり

……夢を見た。薄汚れた貧民街で隙間風が入り込み雨漏りなど日常茶飯事だった小屋で母と身を寄せ合って暮らしていた頃の夢。時に酷い臭いのするゴミを漁った事もある。見回りの兵士の暇潰しで殴られた事も、汚いと普通の町の住民に石を投げられた事もあった。

でも、きっと幸せだったと思う。父の顔は知っている。でも、会いたいと思わない。親は母だけで十分だと、愛する母が亡くなった後も思っている。

貴族の屋敷で奉公する程だったのだからきつと良家の出だったのだろうが、その母がスラム等で暮らしていたのは自分のせいなのだ。母への侮辱になるし、一度口にした時に初めて打たれたのだが、それでも思ってしまう。自分が宿らなければ母の人生はもつと幸せだったのだろうと……。

「……信じられないだろうが私は君の父親だ。その魔力と顔からして間違い無い」

十一の時、暮らしていたスラムが焼き討ちにあった。世間には住民の失火による火災。要するに目障りな貧民を追い出し、更地にして開発を行いたかったのだろう。戦えたのは自分の他に数人だったが、戦いにならなかつた。こつちが負けたという意味ではなく、相手が弱すぎたのだ。次期当主とやらも貧民狩りを目的に眷属と共にやって来たが半殺しにしてやったのだが、流星に不味いと思つたので後詰めを引き受けて皆を逃がした。

その後、当主に依頼された皇帝カイザーの異名を持つ男に捕縛され、貧民の餓鬼に次期当主が負けたという汚点を闇に葬る為に自分も消されると思つていたのだが、何処かの貴族が眷属として引き取りたいと言ひ出したらしい。代償は安くないだろうに物好きな奴だと思つていたが……血縁上の父親だつた。

……母が姿を消した後、妻の実家の圧力もあつて探せなかつた。今は無理でも何時か正式に息子として迎え入れたい。恐らく本心なのだろうが至極どうでも良い。いや、吐き気がする程に不愉快だ。

「……眷属にはなる。分譲された領地で仲間を養う為の何かが出来るからな。だが、貴

族になるのは嫌だ。死んだ方がマシな位にな」

そう言うなり自分の顔に手を当て、全力の火の魔力で焼く。優れた悪魔の医療技術や秘薬でも素顔の判別が出来ないように。これは過去との決別だ。ああ、仕えてやろうじゃないか。それで仲間を救えるなら安いものだ。だが、譲歩はそれまで。スラム街で暮らしてきたから知ることが出来た貴族社会の闇。それを變えてやろうなど三流演劇でお決まりの言葉など吐きはしない。

欲望に忠実なのを良しとし、既得権を絶対に手放そうとしない奴らが強い力を持つ社会で青臭い理想論は犬のクソにも劣る。だから、救える物だけ、救いたい物だけ救おう。怒りなど飲み込んでやろうじゃないか！

……それともう一つ。母の死の真相は絶対に話す気はない。浮かべる顔が思い浮かび、不愉快になるだけと分かっているからな。それと……この復讐は俺の物だ。

「……さて、仕事に入りましょう」

予定より早く起床するも二度寝するほどでもない。そんな時間なので俺は……いや、

私はベッドから起き上がると鏡の前で身嗜みを整える。母譲りの金髪の癖毛を直し、火傷痕で元の顔の判別が難しい顔に仮面を付ける。マジマジと観察すれば分かる者には分かるが、高貴なお方に見せるべきではない、そう言つて仮面を着ける理由には充分なるし、公爵の眷属の傷痕をわざわざ見たがる者は少ない。顔の一部を隠す物を装着している者も探せば居るといふのも大きいだろう。

「メルギス様、お早う御座います」

「ああ、お早う」

廊下に出れば今の私より使用人としての身分が低い者達が挨拶をしてくるので此方も挨拶を返す。当主の眷属とは家臣の中でもそれなりの地位ですからね。……言葉遣いやマナーを覚えてくれた人達には未だに頭が上がりません。さて、朝食前に報告書のチェックにしましょうか。

「今期の収穫量と相場はこの数値となります。それと魔猪の討伐隊ですが……」

分譲された領地で経営する農園の報告を受ける。開発の為、不当に土地を追われた農家出身の人の助けを借り、此処数年で漸く軌道に乗り始めた。所詮個人に出来ることなどたかが知れると思ひ知らされる数年でしたよ。人材の選出は兎も角、給与は私の資産から払っている補佐官が取り出したのは本日の任務。たった数年で政務などこなせる

わけもなく、私の主な仕事は荒事だ。

「……異常繁殖したヒュドラの群れの殲滅。朝飯後の運動にはちょうど良いですね」

不死と呼ばれる程の再生力に凶悪な毒を持つ獰猛な大蛇のヒュドラ。何処が私に話を持つてきたのかは容易に想像がつく。たとえ依頼者の名が違っても、悩む必要がない程に。

『キュルルルルルッ！』

異臭漂う湿地帯。ヒュドラから溢れ出した毒が水だけでなく土壌さえも汚染して周囲の木が朽ち果て、呼吸すれば肺が腐る毒霧が漂う。そんな場所にやって来た私ですが、風の魔力を球状にして展開し自らを包んで霧を晴らしながらヒュドラの群れの中央に降り立ちました。

事前に空中から撒いていた餌に引かれて集まったヒュドラは新たな獲物に私を定め、風の防壁を突破しようと密集する。私が拳を開いた右腕を天に掲げれば汚染された水が波打ち、天に向かって滝のように昇っていきます。無論、ヒュドラ達も同様に水に包まれた状態で水流に逆らい切れずに昇っていくだけしかできない。私の水の魔力を混ぜているので泳ぎが得意であったとしても脱出出来るものではありません。

「では、さようなら」

右手の拳を握り締めれば周囲を囲む水の壁は水壁に変わり、音を立てて砕け散る。芯まで凍った後に粉々に砕かれては流石のヒュドラも再生できないでしょう。

「さつさと終わらせてしまわないと……」

異常繁殖したヒュドラ達は幾つかの群れに別れて生息しているとの事。報告されていないだけで異常に強い個体も存在すると仮定しつつ、次の群れの縄張りへと向かうのでした。

「……そうか。ご苦労であったな。ああ、所でこれからお茶でもしないか？」

「いえ、私は公爵家に仕える身でしかありません。当主様とお茶など恐れ多い」

報告後、私は即座に公爵の部屋を出る。後ろから溜め息が聞こえたが気にする必要はないでしょう。貴族社会では分を弁えた忠義者と評価されているのですし、問題はないはずです。

命を助けられた。衣食住を保証され、仲間も養っている。それは認め、仕事はこなそう。だが、それだけだ。私は……俺はあくまで眷属のメルギス、スラム育ちの野良犬だ。それを譲る気は一切ない。飼_家い犬_族になる気は一切ない。

野良犬の顔合わせ

「お嬢様の婚約が早まった？ ……ああ、政争ですね」

ある日の事、食堂で同僚であるメイドから聞いた話に僅かに眉を顰める。掃除中に旦那様が話していたのを聞いたらしいですが、大学卒業後の話であったフェニックス家との婚約が今の時期になったのか、その理由は分からない様子。私も睡眠時間を一時間にして勉強をしていなければ分らなかったでしょう。

短すぎる？ 悪魔は昼に起きて活動していても夜中に契約等の仕事があるように睡眠は短時間で構わないのです。睡眠欲求はありますし、一時間は充分とはいえ頭がおかしいと言われるレベルなのですが。……ですが私は証明しなければならぬのですよ、自らの価値を。能力だけで対価を払ってまで眷属にする価値があったと。

「政争？ フェニックス家との繋がりを強める為つてのは分かりましたが、たかが数年早まっただけですよね？」

「最近お嬢様は失態が続いたでしょう？ 二度の侵入を許し、犠牲者も出した。……ミリキヤス様を次期魔王候補から外したい輩がお嬢様の当主としての資質を問題視して騒いでいるのですよ。ミリキヤス様が公爵家を継ぐのを確実にする為にね」

長命な悪魔からすれば僅かな歳の差であるお二人が次期当主と次期次期当主であるのはミリキヤス様が有力な魔王候補だから。魔王に選出されなければ公爵を引き継ぐ予定でしたが、旦那様達は欲を出した様子。まあ、貴族とは大の為に小を切り捨てる。切り捨てられる側からすれば憤慨物ですが、お嬢様には我慢して頂きましょう。地位も豪華な生活も、その対価ですから

「へえ。メルギスさんは色々分かってるんですね」

「分かるようになりたいと、そう願っているだけです。では、私は仕事がありますので」

「……このまま物事が上手く行く、なんて楽観視はしていない。あの我が儘姫の事だ。何かしら問題^ごとは……」

「……ああ、糞面倒臭え」

おっと、地が出てしまいました。ちゃんと抑えねば甘えと見なされますからね。一切血に頼らず立場を守るのであれば能力だけでなく立ち振る舞いも正さねば。

「部長の実家の部下の人が来る？ ……まさかイケメンじゃないよな？」

最近部長の様子が妙だ。上の空って感じだし、考え事をしてている事が多い。そんな時、小猫ちゃんが言うには部長のお父さんの眷属が俺とアーシアの顔を見に来るって話だ。まさかと思うけどアーシアに先輩面して近寄って変な事をしようってんじゃないだろうな。

「……イツセー先輩が心配しているような変な事はないですよ。あの人、新人に優しいだけですから。私も武器の扱いを習っていますから」

そんな考えが顔に出ていたのか少し不機嫌そうな小猫ちゃん。ってか、あの武器の扱いを教えたのかよっ!? 何でも、“体格や元の種族、これらの理由から別の駒は兎も角、元からパワー型の戦車には力負けして、素早さも騎士には及ばない。だから他で補おう”、って理由で二種類の武器を扱う様に提案したって聞いてるぞ。レイナーレの時は目立つからって部屋に置いて来たけどさ。

「えっと、怖い人じゃないんですね？」

「大丈夫だよ、アーシアさん。ちょっと初見は驚くかも知れないけど、物静かで親切な人

だから。……あく、でも」

アーシアの問いに笑顔で答える木場。小猫ちゃんもそうだけど随分と信頼してるっぼい。だけど、最後に言葉を濁した時の顔は気まずそうだった。

「実は彼の忠義のあり方から来る態度のせいで部長は彼が苦手みたいなんだ。旦那様や部長のお兄様は信頼して慕っているんだけどね」

部長が苦手視しているとかどんな奴なんだろ？ うーん。ちよつと不安だぜ。

「やあ、初めまして。リアスお嬢様のお父上であらせられるジオテイクス様の眷属のメルギスです。お見知り置きを。ああ、兵藤君。駒は君と同じ兵士が八個だ。同じ家に住んでいる事だし仲良くしましょう。アルジェントさんも宜しくお願いします」

「は、はい。どうも……」

「よ、宜しくお願いします」

当日、やって来たのは仮面の男だった。無地の白い仮面で顔の上半分を隠している目

の涼しい奴で、温厚そうな笑みを浮かべて差し出された手を思わず取つてしまう。俺達の視線に気が付いたのかメルギスさんは苦笑しながら仮面に手を当てた。

「これが気になるのですか？　生憎面白い物はありませんよ。これで美形過ぎて顔を隠してる等ならゲームや漫画でありがちですが、酷い火傷痕が残つていましてね。……つと、忘れる前に渡しておきましょう」

俺達が触れた駄目な部分に触れちゃったかと気拙い顔をした時、メルギスさんは話を變えて空中から本を数冊取り出す。漫画と絵本？

「君達は貴族社会に疎いでしょう？　私も苦労しましたし、これで楽しく学んで貰おうと……つと言うのは建て前で好きなサブカルチャーを布教して同土を増やしたいだけですよ。アルジエントさんには日本語を学ぶために絵本の英語版と日本語版の二冊を用意しました。私は休み以外に読む時間はありませんし暫くお貸ししますよ」

あつ、うん。この人、良い人だ。親切だし、真面目なだけじゃなくって茶目つ気もあるし。漫画も俺には青年向け、アジアには少女漫画を用意してくれてるし気遣いも出来る。部長が苦手視してると聞いていたけど大袈裟に言っただけだよな。

俺はそう思っただけで、次に部長の方を向いて頭を下げたメルギスさんの顔を見て声を失った。まるで別人みたいに感情が抜け落ちていたからだ。

「お嬢様、誠に勝手な真似をして申し訳御座いません。出過ぎた行いに対する罰は如何

様にも……」

さつきまでの仮面の上からでも分かる柔らかい笑みは消え去って、仮面を更に被った様な姿に俺とアーシアは戸惑うばかり。これが部長が苦手視する理由か。まるで別人みたいだぜ。

「べ、別に構わないわ。それよりギヤスパーとの約束が有ったのでしよう？ 早く行つてあげて」

「はっ！ 寛大なお心に感謝致します。……じゃあ、行きましようか、小猫さん。ああ、そうだ。兵藤君、アルジエントさん。今度の日曜日は予定が空いていますか？ 先輩として歓迎も兼ねて何かご馳走させて下さい」

……後から聞いた話だけどメルギスさんは徹底的な滅私奉公を良しとしていて、部長達公爵家や貴族の人には一切の感情を見せないんだそうだ。それを他人に強制しないし、他の人にはフレンドリーに接するらしいけど。

「それではギヤスパー君。試験お疲れさまでした。結果は来月発表ですが大丈夫でしょ

う」

「は、はいはい」

……此処は旧校舎の封印された教室。視界に収めた範囲の時間を止める神器が制御できなくて封印されているギャー君ことギヤスパーク・ウラデイが住んでいる場所で、テーブルの上に特上寿司やピザ、ケーキ等が並んでいます。

高まり続ける魔力でコントロールが難しくなるから部長が成長するまで封印という決定でしたが、メルギスさんがその際の一助になればと魔眼系の能力者を頼って訓練法を聞き出し、ギャー君が人見知りだからとメールで信頼を得て封印が解けて校舎内を歩ける時間を使って指導を行いました。

その結果、今後の封印をどうするかを決める試験を受けさせて貰えるまでになって、今日は試験後のお疲れ会。私も指導を受ける合間に手伝ったので参加しています。

「あ、あの、メルギスさん。時間は大丈夫なのですか？」

「ええ、今日は休日、体を休める日ですので。ちゃんと休まないとい体痛めますから。……体を痛めると言えば兵藤君は大丈夫でしょうか？ 本来の数数十数百倍の力を出すなど、悪魔が頑丈でも数百年後には体がポロポロという事も有り得ますし」

……体を休めない、という言葉に目を逸らす。昔、焦りからオーバーワークになっ

て叱られましたから。それはそうと確かに言われてみればスポーツ選手が無茶から体を故障して日常にも支障が出続けるというケースも有りますし、大丈夫なのでしょう？

「まあ、譲渡が使えるようになればサポーターとして活躍できますし、肉体はそのままで強力な武器を更に強化して使うという手もあります。ギヤスパーク君。学年では貴方が後輩ですが、眷属としては先輩なのですから頑張ってください。軍では年齢より階級と入隊日が重要ですからね」

「む、無理ですううううううっ！」

「……へタレ」

才能はあるのに勿体ないと思う。……本当にメルギスさんには感謝しています。あの力を使わなくて良いと言ってくれて、別の力をくれましたから。

『え？ 仙術を使わなくて良いのか、ですか？ リスキーな術ですし、構え方も狙い方も整備の方法も知らない素人が拳銃を使うみたいで危ないですから使わない方が良いのでは？ まあ、使わないにしても最低限のコントロールは必要でしょうが、ちゃんとした指導者が居ませんし保留の方向で』

ただ使わなくて良い、と言うのではなく、何故使わないのかの理由を用意してくれま

した。絶対に使いたくない力ですが、制御方法を全く学ばないのは危険だから誤って使わないための制御方法は学ぼうと思います。……まだ指導者は探している最中ですが、メルギスさんが教えることが出来たら良かったのにと、そう思います。

野良犬のお仕事

「私がどの様な鍛錬を行っているかですか？ 私如きが力を高めた程度で崇高なる純血貴族の皆様方の足元にさえ及ぶはずも御座いませませんが、暇潰しになるのであれば語る榮譽を享受させて頂きます」

眷属の仕事は主君の手足となつて戦う以外にもパーティーのお供等も行ふ。この日、ジオテイクスに連れられ宴の席にやつて来たメルギスは肅々と黙々と彼の背後に控え指示を待つばかり。出自不明の中級悪魔である彼に話を振るなど自尊心と身に流れる血への誇りで膨れ上がった貴族は基本行わない。公爵が重宝しているのであからさまに態度には出さないが、その他の使用人同様に居ないものとして扱うのが基本なのだ。だが、酔つた勢いで話し掛ける者も中には存在する。伝わっているだけでもSS級はぐれ悪魔の討伐や野良ドラゴンの捕縛、少なくとも最上級悪魔に匹敵するであろう彼が普段から鍛錬を積んでいるというので内容を訊ねて来たのだ。無表情を一切崩さずジオテイクスに視線を向ければ軽く頷いたので上記の内容を述べた後、淡々と話し出した。

「まず、睡眠時間が一時間で足りるように体を慣らして時間を確保致します。戦闘以外

の仕事に五時間使用し、休憩や入浴食事に一時間半程を使った残りを戦闘や鍛錬、知識の会得に当てていまして、例えば常に周囲に影響を及ぼさぬ微量の魔力を放出し続け操作と量の鍛錬とする他、筋力トレーニングや目前に敵が居ると仮定しての……おや、もう宜しいのですか？ お耳を汚してしまい申し訳御座いません」

一切おどけた様子を見せず述べる姿に誰もが真実だと悟り、狂人に向ける視線を彼に向ける。十六時間半、それだけの時間を己を鍛える事に使うなど、努力を基本しない悪魔で無くとも異常だと感じる内容だ。ある者が訊ねた。どうして其処まで努力をするのだと。

「私には己の価値を証明する必要があります。私が受けている恩恵は私の能力を評価した結果の妥当なものであり、それ以外は一切介入しないと、それを誰にも否定させない。それだけで御座いますよ」

相変わらず一切残らず己を切り捨てていると思わせる口調でメルギスは述べる。仮面にあいた穴から覗く目からも感情は読み取れなかった。

（おや、何処の家……かは詮索無用ですね）

その最中、複数の貴族に連れられて歩いていた従者の一人がすれ違いざまに書状を手渡す。公に出来ない依頼である。依頼の理由でさえ公式記録に絶対に残せない事柄の

場合、何処の誰からかかも伏せられ、何かしらの依頼を行ったという痕跡すら残さないのが常套だ。メルギスも連れて歩く貴族達の顔を確かめもせず懐に書状を忍ばせた。

「彼処ですね。……はあ」

宴が終わって深夜の時間帯、夜型である悪魔でさえも寝静まる頃にメルギスは冥界の辺境に転移、そこから獣道を進んで目的の屋敷の近くまでやって来た。此処に住むのは現政権が王座を奪取した内乱時に最後まで前政権に傾倒した者達が住む場所。本来、彼らはこの様な場所に住むべき者ではない。魔王ルシファアの側近であるルキフグス家に関わる家柄の者達だったからだ。

そんな者達が何やら怪しい様子を見せていると、内通する者から報告があった。現在地から少し進めば侵入を探知する結果があると報告を受けており、これ以上は近付けない。既に燃やした書状によれば子供程度の魔力にも反応するとの事だ。同情から気が進まないのか、それともただ単純に面倒なのかメルギスは溜息を一度吐くと魔力を放出する。風が吹けば霧散するほどに微量で結果が探知できない極僅かの魔力は静かに霧のように広がっていった。

「……待つていろ。もう直ぐあの阿婆擦れの売女を其方に送つてやるぞ」

屋敷の中で死んだ息子の肖像画が入ったペンダントを握り締める老紳士が居た。内乱時、彼らはルキフグスの直属の部下として戦場で戦い、皆戦死した。息子はサーゼクスに挑んで消滅し、妻はそれを嘆いて自害した。噂で耳にした話では息子の婚約者だった女も辺境で苦勞しているらしい。彼が睨む先、ナイフを突き刺されたのは演劇のチラシ。サーゼクスとルキフグス家の長女の恋物語を描いた人気作品だ。

忠義の為、家の誇りの為に大勢が殺し合った。負けたのだから死ぬのも苦しい生活も納得しよう。だが、敵の英雄と恋に落ちて寝返った女はメイドの真似事をしながら幸せに暮らしているという。彼はそれが許せず拳を握りしめる。既に協力者によつて彼女の外出の予定は把握しており、命は取れなくとも腕の一本は奪い、大勢を巻き込んで名に傷を付けてやろうと強く決心する。

「な……」

結果が反応し、警報音が鳴り響く。屋敷が騒然となる中、警報音の鳴り始めを耳にして、何だ、そう言いきる前に彼の生涯は終わりを告げる。正面の壁と額には小石ほどの大きさの穴が空いていた……。

「……終わりましたね」

屋敷の内部まで入り込んだ魔力によって内部の様子を把握しているメルギスはターゲットの死亡を確認すると、小石ほどの大きさの魔力を放った右手の指先を下ろす。男の死体の発見で屋敷内はパニックに陥り、警報が鳴った時間から屋敷内での犯人探しが始まるまでに後少しだろう。だが、それよりも前にメルギスは姿を消す。

かくして旧政権に忠義を誓う者によって事件が引き起こされるのは未然に防がれ、魔王や貴族の威信は揺らぐことなく全てが終わった。

「お仕事お疲れさまね、メルギス」

屋敷に戻り、一時間の睡眠を取る前に水を飲み、食堂に向かったメルギスの前に銀髪の女性、グレイフィアが現れる。本日はオフらしくメイドとしてではなく魔王の妻として振る舞っているが、メルギスには関係ない。何時如何なる時も無表情で対応するのみだ。

「辛いのお言葉、有り難く頂戴いたします」

「……別に態度を崩しても構わないと言っているでしょう？　メイドの時までそうなのだから、全く」

「払わなくとも構わないと言われても払うべきなのが礼儀であり、貴女様が魔王陛下の妻であらせられる事実に変わりは御座いませぬので」

何を言っても頭を下げたまま淡々と述べるメルギスにグレイフィアは溜息を吐く。夫であるサーゼクスは腹違いの弟である彼と打ち解けたいと思っているが、彼は常に礼儀を払った態度で壁を作り一步も近寄せないのだ。

「それを言うならば貴方だってグレモリー家の次な……」

「それ以上はお言葉を慎み下さい」

次男でしようと、言おうとした時、メルギスは言葉を被せて遮る。顔も声も一切の感情が籠もっていないのは変わらないが、行動には怒りが感じられた。

「現在、次期当主であらせられるお嬢様、魔王候補筆頭であらせられるミリキャス様の存在によってグレモリー家は安泰となっておりませぬ。……個人的な感情で政敵にお家騒動の材料をお与えにならぬよう、過ぎた行いではありますが進言させて頂きます」

政治とは同じ派閥内部でも更に分かれる。グレモリー家の味方同士であつてもリアスの婚約者の実家であるフェニックス家と懇意でない家も存在し、彼らからすればミリ

キヤスが魔王になってリアスが正式に家を継ぐのは面白くない。今回、婚約が早まったのもそんな家の動きも関わっていた。だが、そんな中にもミリキヤスを魔王に推薦する者も幾らか存在する。

「私は担ぎ上げられる気などありませんが、動かれれば民衆に影響が出ます。……内戦で大勢の命を奪ったのですから感情程度はお殺し下さい。では、私はこれで」

最後にもう一度頭を下げ、メルギスは去っていく。この数日後、リアスが婚約に反発して婚約破棄を賭けたレーティングゲームが行われると発表された。

野良犬の弟子 上

「……は？ レーティングゲームで婚約を決める？ そんな我が儘許した時点で借りを作ってたて分らないのか、あの我が儘姫は」

戦闘後、高ぶっている時に受けた報告に地が出てしまう。貴族同士の婚約とは同盟締結の一種であり、どちらの家に入るにしても権限の一部を他の家に明け渡し、何かあった時に否が応でも連携せねばなりません。今回の場合、家柄が上のグレモリー家が有利な関係を結べる筈だったのですが、貴族内での評価の低下と同時に力関係への影響を及ぼす。

「それで旦那様は何と？ ああ、小猫さんへの指導はゲーム終了後まで延期ですね」

当然ですが、私はグレモリー家の家臣として家の実益のために動く義務がある。彼女への教育もその一環であり、当主である旦那様の意志に反して行う試合の為の訓練中に指導を行うのはその義務に反する。好きにしろとの事なのでそうさせていただきます。

「ぐっ……」

「いの……」

足元で呻く少女達に目を向ける。青髪と栗毛の悪魔祓いのコンビで、はぐれ悪魔の討伐任務後に遭遇、私を人を襲っていた件の悪魔と勘違いして襲ってきたので叩き伏せた所だ。青い髪の方は切り札らしき聖剣を出して来ましたが手刀に魔力を纏って刃を切り落として差し上げましたよ。彼女、この聖剣を使うことは出来ても使いこなせはしてませんでしたね。オーラが無駄に拡散していました。

「さて貴重な聖剣使いを殺せば厄介な事になりますね。小競り合いでは済みませんし……見逃して差し上げます」

腕の骨はへし折りましたが立ち上がって病院に行く程度は出来るでしょうし、放置の方向で。……これで何の価値もない有象無象の一人ならサクツと殺しておく所なのですが……。

「勝つてしまわないと良いのですが……」

どうも最近ついていない気がする。この前もアルビオンを宿した戦闘狂いと遭遇して周囲の仲間を巻き込まない為に相手をさせられた。禁手化は大抵が叫んで発動のコントロールを行うので顎の骨を先ず砕き、触られないように両手首を掴んでゼロ距離爆破しましたが結局墮天使幹部の介入で帰すしかなかったのが残念です。災いと呼び寄せる道具など所有者を殺して別のに移るよりも抜き取って封印すれば良い物を……。

「いよいよ時間ね。小猫、そう言えばメルギスがライザーのお兄様と余興で戦って勝ったって聞いたのを思い出したけど、どうやって勝ったのか知らないかしら？ 何か参考になるかも知れないわ」

試合前、目を閉じてイメージトレーニングをしている最中に部長が訊いてくる。フェニックスの不死を破るには兎に角攻撃を繰り返すか特大の一撃で一気に吹き飛ばすのみ……だったのですがメルギスさんは別の方法で勝ちました。部長の期待する内容ではないのですが。

「風の魔力を利用して周囲の酸素を薄くして炎の勢いを衰えさせ、冷気の魔力を纏いながら気道と動脈を締め上げた、そう聞いています」

「……今の私達には無理ね」

フェニックスはあくまで傷が一瞬で癒えるだけで酸欠などでの気絶から一瞬で立ち直るわけでは有りません。まあ、水の魔力で顔を覆っても炎で蒸発するので簡単な話で

はないでしょうが。部長も軽く引いていますけど、同じ理由で内容は広まらなかったんですよ。

『旦那様には勝てと言われたし、フェニックス卿からは不死を過信し過ぎていたとお礼を言われましたが、普通の方法で勝った方が良かったですね。余興ですので変わった方法を選んだのですが』

あの人、言外に普通の方法で勝てるとも言っていますし、締め上げている間に炎を受け続けたのに大した怪我もしないとか相変わらず強いです。

「じゃあ、皆気合いを入れて行きましょう。特にイツセー。このゲーム、貴方が勝利の鍵よ」

部長の言う様に数でも経験でも劣る此方側にとってフェニックスを倒すには神滅具を持つ先輩が重要な鍵になってくる。……のは良いのですが譲渡も使えませんし、戦闘中に覚醒とか不確定要素を重要な策に盛り込む訳にも行きません。……だから、部長が立てた作戦に変更を進言させて貰いました。

「たった一人で乗り込んでくるとか……いや、もう一人居るわね」

ゲームの舞台は学園を横した空間で現在イツセー先輩と共に体育館に乗り込んだ所。私が合図したら後から出てきて下さいと言っています。予想通りバレた様子。

「小猫ちゃん、此処は……」

「いえ、貴重な倍加を無駄にしないで下さい。……此処は私が全滅させます」

両手には鉤爪の付いた手甲、両足には膝まで覆う金属製のブーツ。出てこようとするとイツセー先輩を手で制し、格下に舐められたと思つてか少し苛ついた四人に一気に駆け出します。先ず、チェンソーを持った体操服とブルマ姿の双子。

「バラバラですー」

「バラバラになっちゃえー」

起動したチェンソーの刃が床を削りながら私に迫り、振り上げようとした腕をすり抜ける瞬間に深く切り裂く。骨を爪の切っ先が削った感触が手に伝わり、鮮血が散ると同時にチェンソーが床に転がる。

武器を持った相手と戦う場合、それをどう無効化するか、手甲の扱い方を習っている最中に学んだ事です。腕を押さえ悲鳴を上げる味方に硬直する棍術使いとチャイナ服、ついでにイツセー先輩。さて、相手が冷静になるまで後数秒程度。

「……………」

床に落ちたチェンソーを足ですくい上げてチャイナ服に蹴り飛ばす。当然避けられませんが冷静になる前の回避行動は体勢を崩す。戦車は騎士のように速くはないですが強化された筋力で床を踏み込めば爆散すると同時に砲弾のように身体が押し出される。正面衝突する寸前、先程も使った猫妖怪の身軽さを活かして頭上を飛び越え頭を掴んで引き倒す。そのまま顔面を何度も踏み続けた。

『容赦する必要のない相手には徹底的に非道になりなさい。逃げられても恐怖を心の芯まで刻むのです』

少し物騒な気もしますが実際に残った一人と先程の双子の顔から戦意が消え始めた様子。侮った相手からの速攻で戦意を挫かれ完全に冷静さを失った状態。

「……………つまり攻めるなら今です」

真横の空間が歪み、手を突っ込めばジャラジャラと音を立てて鎖が引きずり出され棘だらけの鉄球（実際は別の金属）が姿を現す。鎖を持って跳躍、棍術使いの頭上に振落として床の底に沈め、着地と同時に真横に振り抜く。直撃した双子纏めて壁をぶち抜いて飛んでいった。

「さて、次に行きましょう」

体感時間にして十秒程。ゲームが終わったら映像を見せて貰って反省点の絞り出しです。何やら引いている様子のイツセー先輩ですが墮天使と戦った挙げ句に部長にとどめを刺すように言ったでしょう。……あの戦いで武器がない時の決定力不足を自覚して未熟だった空間への武器の収納を身に付けましたが本番で上手く取り出して良かったです。

「本当は体育館ごと吹き飛ばす予定だったけど結果オーライだなー」

先ずは一手先取。つまり、大抵は下調べが済んだ相手のみ任されているであろう未熟な若手が油断する瞬間。

「ふんっ!」

鉄球を上空に向かって放てば衝撃と共に熱波が伝わってくる。敵を倒して油断をした相手を狙うのは基本中の基本。空を睨めば爆炎の魔力を放った女王ユーベルーナが浮かんでいました。そして敵の撃破を知って本来の計画のように体育館を吹き飛ばす予定の副部長が相対しますが、私はイツセー先輩を置いて彼女の前に飛び出る。

「……すみません。彼女は私に任せて下さい。……ちよつと腹が立っています」

ゲームが決まった日、ライザーは言いました。女王以外に戦力になる眷属は居ない

と。つまり、私を強くしてくれたメルギスさんへの侮辱です。貴重な時間を割いて訓練に参加させて貰い、実戦稽古だと任務に有無を言わさず同行する羽目になりました。だから相手の最強の眷属を私が倒す。あの人は部長の勝利を望んでいないでしょうけど、それとこれとは別の話ですから……。

「殺す…殺す…殺す…っ！」

敵に対しては絶対的な憎悪と殺意を向け、口にも出す。鼓舞にも威圧にもなるからとメルギスさんに教わりました。手甲の爪を合わせて鳴らし、鉄球の鎖を振り回す。では、主が侮った戦士の力をその身で味わって下さい。

野良犬の弟子 下

これはちよつと前、メルギスさんにご指導頂いていた時の話です。

「さて、悪魔社会で格闘技術が軽視されている理由が分かりますか？」

肉体作りだけでなく座学も教えて貰っているのですが、この人は最初から答えは言わず私やギャー君に考えさせるようにしています。勉強で最も必要なのは知識を得ることではなく考えることに慣れる為という持論からだそうで、私も少し考えて答えます。

「魔力に対する絶対的な自信からでしょうか？」

残念な事にメルギスさんが言うように私の主な戦法である近接戦は悪魔社会において軽視されるしレーティング・ゲームの学校でも基本的な事しか教えないと聞いた事があります。魔力とは悪魔特有の臓器がオーラを変換して作り出す力。家特有の特性や上級悪魔故の生まれつきの量の多さ、主な敵が光の槍を扱う天使や墮天使である事を考えれば自尊心と戦略の面からも仕方ないのでしょうが、身体能力が同じなら人間の武術の嗜みがある人と悪魔が格闘戦を行えば圧勝するのは……という位に悪魔社会の格闘技のレベルは低いです。

「正解です。後は格闘技の多くが地上に足が着いているのを想定して磨き上げられた物

という事も含まれますね。空中では祿に本領を發揮できませんが、悪魔は飛べるのですから飛んで当たり前。寧ろ飛ばない理由が有りません。ルチャなど空中戦主体のもありますが、魅せる為の技の要素も大きいですから。……つまり対処法も祿に学ばれていないという事ですよ」

成る程、道理だと思う。接近戦より魔力を放った方が見栄えもしますし、上級悪魔なら魔力一発で山の一角を吹き飛ばせますが拳で山の一角を崩せる人が中々居ないように威力も下。ならば接近戦を軽視する傾向になっても変ではなく……付け入る隙になる。……訓練による疲労困憊で倒れているギャー君を眺めながらこの時の私は感心していました。

「いのっー」

……業腹だが認めましょう。目の前の敵、ユーベルナは私よりも強い。爆炎の魔力など無防備に受けければ頑丈さが特性の戦車の駒の力……だけが耐える手段の私では一撃です。頑丈な種族なら兎も角、私は身軽さと仙術が売りの猫妖怪。熱への耐性も頑丈な骨肉や鱗も無ければ、速度が落ちるので防具も着けていない。

……ですが、当たらなければ問題はなく、防具はなくても武器はある。放たれる魔力に正面から鉄球を叩き込めば空中で爆散して互いの耳と目を爆炎と爆音が阻害する。相手はベテランですので私の動きを読んでいるのでしようが未だ侮りがある様子。私が相手の位置を把握出来ていないと思っっているのが位置から丸分かります。

……驕りとは強者を殺す猛毒であり、私の嗅覚を侮ったのが貴女の敗因です。先程相殺された鉄球は衝撃で弾かれ、繋がった鎖から落下しているのが伝わってくる爆炎の衝撃と重量、その二つが合わさって猛烈な勢いが生まれ、私はそれを利用する。

「……せん」

無理に引き戻すのではなく、円の動きで向きを変え、遠心力を乗せてユーベルナさんに投げつけると同時に鉄球を盾にしながら突撃する。

「なっ!?」だが、この程度っ!」

当然のごとく魔力で撃墜される鉄球。ですが、此処まで接近すれば私の牙が届く。着弾の瞬間に眼帯で視野が狭まった方に回り込み、反応して此方に向けて来た腕に鉤爪を振り下ろす。魔力を放つ為には一瞬の溜めが必要で、今の距離ならば私の方が先に攻撃可能。斜め下に滑り込むようにして懐に潜り込み、腕を深く切り裂いた。

「ぐぎっ!？」

格下からの思わぬ痛撃に困惑と苦悶で顔が歪み動きが止まる。それでも手を向けてきました。が足を掴んで引つ張り体勢を崩し、魔力を見当違いの方向に撃たせると同時に腹を切り裂く。血飛沫が舞い散りますが未だリタイアの様子は無い。女王は戦車の特性も持っているからでしょう。

「でも、これで終わりです……」

武器とは鋭い爪も牙も持たない人間が獣に立ち向かうために作り出した物。実際、武器がなければ今頃一方的に食い散らかされて居たでしょう。……ですが、私は元猫妖怪。大型の肉食獣程でなくても猫も肉食動物としての武器は持っているのです。

相手が痛みに耐えながらの一撃を放つ前に、窮鼠所か獅子の反撃を受ける前に私はユーベルーナに抱きつき、首筋に八重歯を突き立てた。同時に全力で首に巻き付けた腕で締め上げれば……ほら、魔力を練り上げる余裕もなく、私同様に特性に任せただけの力を使い怪我を負った腕で懐の私めがけて慣れない拳打を空中で放つても……。

『ライザー・フェニックス様の『女王』一名リタイア』

……さて、部長の眷属という立場や義理から戦って手柄も上げましたけど勝つたら不

味いですよね？ 関わった家との関係も、活躍した私を指導したメルギスさんの立場も。……どうしましょう？

……この時、私は思い悩んでいました。ですが、それは観戦しているメルギスさんも同様で……。

「へえ、小猫君は大金星だね。君も先生として鼻が高いんじゃないのかい？」

「はっ！ では、僭越ながら意見を述べさせて頂きます。先ず、相手がいたぶる気なのか手を抜くなど慢心していたが故に虚を突けた事など幸運に恵まれた事が大きく、視野が狭まった方向から向かって来るといふ基本を相手が考慮している事を考慮した様子が無く、小刀の類を忍ばしていたなら首筋や、背中から心臓を刺されていたなど問題も多く……及第点ではないかと」

レーティング・ゲームの観覧席、当主の眷属である私も当然出席してゲームを眺めていましたが、小猫さんの活躍に会場が沸き上がり、最後の方で少々引きながらも評価は中々。サーゼクス様が話し掛けて来やがった……話し掛けて来られたのはそんな時でした。恐らくですがこの方はお嬢様の勝利を願っているのでしょうか。……自分が恋愛結婚とはいえ政治的な意図がなければ成立しなかったとも思っているのでしょうか

?

「あははは。厳しいね。君はどっちに勝って欲しいんだい？」

「……私はグレモリー家の家臣、それは永遠に永久に変わらぬ事。ならば自ずと応援すべき方がどちらなのかは決まっています。これ以上私ごときが魔王陛下のお時間を独占する榮譽を得るのは恐縮の極み。どうか榮譽はそれに相応しい方々に……」

要約すると、あつちに行け、ボケが。他の貴族と話しているや。実際、私の出自を知らない貴族は眷属ごときが魔王様と長く話を……といった顔をしていますしね。

そんな間にも戦況は進み、不味いことにお嬢様が優勢。朱乃さんが雷の魔力で一気に蹴散らす上に一誠君は譲渡の力を土壇場で使えるようになった様子。……ですが、体への負担を考えれば使用回数は片手の指で数えきれぬ程度。それを考慮していいいいのか、倍化の負担による使用回数制限を知りもしない……は戦術的に調べるべき事なので流石にあり得ないとして、ライザー様を相手にするには少々勝算が薄い。

前衛が動きを封じて後衛が強力な魔力を浴びせるなどすれば希望があるのでしようが、どうなる事やら。あつ、残った眷属は妹のレイヴェル様のみ。戦う気がないそうです。ですのでこのままでは……。

最悪の未来は婚約破棄からの領民への悪影響ですが、私が無理に出自を明らかにさせて正式に家に入れられる可能性もある。領地で養っている皆を想えば出奔も出来ませ

んし、さつきと昇級して何処かに婿養子に入るのも手かも知れないと思っていた時、駆けつけていた小猫さんがレイヴエル様を指差した。

「……絶対に負ける訳には行きません。ですから万が一を考え、後顧の憂いを断つ為に私が足止めをします」

……さて、これで勝ち確定ですね。どちらの……等と言うまでもなく、実際に大勢の希望と思惑通りにライザー様の勝利で幕を閉じる。お嬢様達は全体的に装甲の薄さが目立ちました。広範囲を焼き尽くす不死鳥の炎に対して防御の魔法陣を張れるのがお嬢様だけでは……ですね。

「さて、式に向けて仕事仕事。つつがなく終えれば良いのですが……」
少し嫌な予感がしますね……。

野良犬と負け犬

貴族が関った工場からの排煙で覆われた空と廃棄されたゴミ山の悪臭、隙間風だらけの廃墟同然の建物が日常の風景だった。

「……毒だな。それも数年前に摂取した物が身体を蝕んでいる」

貧しく身分の低い民、貴族からすればゴミ同然の存在が住む場所。そんな場所に好んで住んでいた変わり者の医者は倒れた母さんを診察して告げた。もう長くないと。

誰が母さんに毒を飲ませたかは分からない。でも、何の為に飲ませたかは分かっている。俺を宿した母さんが邪魔だったから殺そうとして、俺を守るために母さんはこの貧民街に身を隠した。

何処の誰かかは知らないけど、俺には自分の素性を知る権利があるとして母さんが父親が貴族であるとは教えて貰っている。

「……私のせいでごめんさい」

母さんの最後の言葉は涙を流しながらの謝罪で、俺の手を握り締めた母さんの手から力が無くなっても暫くは泣けなかった。謝る事なんて何一つ無い。俺の今までの人生

は幸せだった、そう言いたかったからだ。

……掃き溜めのような場所でも住民の結束は強く、俺は大人達の世話になって過ごし、恩を返すため、俺も大人になって子供達を守るためにと力を付け……ある日、父親と出会った。

「悪魔社会において力は重視される。人間を見下すのも極僅かを除いて悪魔に大きく劣るからであり、下級悪魔に対しても然り。……なら、負け犬は負け犬らしく勝者に従うべきでは？」

私の目前には死屍累々（辛うじて死んではいませんが）、立っているのは極僅か。本日はリアスお嬢様の結婚式当日であり、本来ならば旦那様の眷属である私も警備として参加するべきなのですが横槍が入ったのです。貴族の中で最も貴い血筋であり私に元次期当主の初陣を台無しにされた家の依頼で不審な行動を見せている一派を調査、同行した連中が派手に騒いだあげくに逃げ出したので単独で撃破したという訳です。

目の前に転がっているのは誰も彼も本来ならば貴族社会で活躍していてもおかしくない血筋ですが、クーデターの際に前政権に味方して政治中枢から締め出された方々。

それが野良犬同然の私に敗れ、骨のある方は睨んでいますが最早抵抗する余力もなし。ええ、殺すのが一番楽ですが、目減りした純血悪魔を減らすのは公爵家の使用人としては憚られます。なので生け捕りにしたのですが、手加減をしすぎたのか戦闘を続行する余裕のある方がお一人。

「おのれっ！ 私は先代レヴィアタンの末裔なのですよ！ それを中級悪魔如きが……」

「はあ……」

私が投げかけた言葉など馬耳東風とばかりに返事をしない女性こそサーゼクス様達を中心となつて転覆した政権の次期トップを担った筈のカテレア・レヴィアタン様。辺境に追いやられ憎悪をたぎらせた彼女を見て思ったのは……漫画の理事長のテンプレな見た目だな、と、我ながら呆れる呑気な内容でした。

「貴方、それだけの力があるのなら此方に付きなさい！ 下僕としてですが相応の地位を約束しましょう」

「いえ、ですから大戦後の混乱があつたとはいえ政権側として体制が整つていた段階で負けたのに、落ち着いてきた現政権側を裏切つてまで味方するメリットを提示して下さらないと断るにしても考える素振りも出来ないと言うか……」

「気まぐれで慰み物となった売女の子の分際で私を愚弄するか！ 良いだろう。ならば私の力、その身で理解させてやるっ!!」

……いえ、別に怒ってはいませんよ？ 此方が挑発した結果、怒り狂ったカテレアが何故か私の出生に關してのことを知っている口振りで母を侮辱しましたけど、安い挑発で怒っては認めるような物。負け犬の遠吠えなど無視してしましましょう。

何やら小瓶の中身を飲んで力を増大させるカテレア様を見ながら私は落ち着き払って警告をする。辺境に追いやられた方がどうやって武装発起の準備を整えられたのか、私の母について誰から聞いたのかそれは純血悪魔と何一つ関わりのない私を知るべき事でもなく、単に職務を全うするだけです。

「カテレア様。貴女方は力が劣っていたから魔王の座を奪われた。ですが本当の忠義があつたからこそ相応しくない者が魔王の名を継ぐのを阻止したのでは？」

「死ねええええええ!!」

「……魔王クラスにまで上がっていますが、矢張り貴女は魔王の座を引き継ぐに値しないようだ」

放たれた魔力に正面から魔力を放ち、放出を続ける魔力は二人の間で拮抗する。道具を使ってパワーアップするのは別に構わないのですが、戦力分析は出来ていない様子。だから私は評価を下した。

サーゼクス様は滅びの魔力を持った上で魔王クラスの十倍の魔力を持ち、アジユカ様も同格だとか。それに魔王クラス程度で挑むと言うことは力を把握していないという事になる。三大勢力の大戦の際は有力な味方で、クーデターの時は最も危険な敵だった筈なのにだ。意図して情報を伏せられていたとしても、信じられなかったのだとしても、双方ともに王としての資質に問題が有つての結果だ。

「馬鹿なっ!?! 今の私は先代を超えているのに互角なんて……」

「いいえ、互角ではありません」

このタイミングで横槍が入らないという事は彼女は捨て駒か伏兵が居ないという事になる。魔力が拮抗したことが信じられないという顔の彼女の手元の魔力から内部を突き進んでいた魔力の先端が飛び出し、二カ所ほどを貫く。途端に上昇した魔力が元に戻り、血を吐きながらカテレア様は倒れ込んだ。

「き、貴様、何をした……」

「先程飲み込んだ物体と、魔力を生成する臓器を貫かせて頂きました。ええ、ご安心ください。私としても純血悪魔が絶えるのは心苦しいので」

火種になると分かっているも処刑されなかったのはそんな理由でしょう。だから力を奪うだけに留める。結構深刻なダメージを与えたので今後は以前のように戦えない

でしょうけど……子宮には問題がありませんし、相応しい方と結婚して下されば正当な魔王の血筋を次期魔王の座につけて現政権にくすぶる前政権支持者へのアピールにもなる。ああ、アジユカ様やフィールビウム様は独身でしたね。

取りあえず舌を嚙んで自害を計られても厄介なので猿轡をすることで……言い過ぎた気もするのでフオローをしておきましょう。

「あの、現レヴィアタン様が貴女より魔王に相応しいとは思っていませんよ？」

別に録音をされた様子もないですし、この程度は構わないでしょう。実際、あの痛々しい人は敵だらけの悪魔が攻め込まれていないなど外交手腕が良いですが治世者としてはカテレア様と五十歩百歩です。早速連絡を入れて回収を頼もうと思った時、携帯に小猫から重要性の高い時用のメールアドレスに連絡が入っていました。

「……成る程、そう言う事ですか」

一誠君が結婚式に乱入、手引きしたサーゼクス様の提案でライザー様と決闘し、勝利して破談に持ち込んだとの連絡にミリキャス様を魔王の座に推挙する方々の反応や世間からのグレモリー家の信頼の失墜、経済への影響など悩みは多いですが、サーゼクス

が何故其処までしたのか推測が出来ました。

妹の為？ いやいや、これで息子の将来に影響が出るのにそれだけでは無いでしょう。魔王としての思惑もある、そうだろうと思います。

「……貴族社会に染まつておらず、赤龍帝という分かりやすく強力なネームバリューの転生悪魔。……改革のための旗印、生け贄、御輿、色々と言い方はありますが……」

同情はしますが現在の社会状況を考えれば改革は必須。なら、多少の犠牲は黙認いたしましょう。正義ぶって青い理想を語れるお綺麗な存在では有りませんしね。

母を毒殺した者だけは何があっても絶対に探し出して始末しますけど……。情報漏れを悟らせない為に口封じでカテレア様を殺せたなら情報を詳しく聞き出したのですかね……。

野良犬の休日

今、俺の目の前には絶世の美女が居る。カラスの濡れ羽色の髪を夜会巻きにして、普段は落ち着き払った態度でスーツを着こなした知的で有能な美人秘書。だが、今は夜会巻きを解いてスーツを床に脱ぎ捨てて下着が見えていても気にせず着崩した格好のまま酒を飲んでツマミのイカゲソを啜っていた。

「何って言うか……普段とは別人だな、テメー」

「あら、それはアンタもでしょ？　って言うかアンタに合わせて上品ぶってるんだから感謝しなさいよ。その感謝は是非お金で表して欲しいわね」

ワイシャツの胸元のボタンを外し、床に置いたクッションに座り込んでいるから黒い下着が見えているが互いに気にしねえ。

「アホか。給料は俺のポケットマネーから出てるんだろが、相応な額をよ。餓鬼の頃から業突く張りは変わらずつてか？」

この女の名はルーリア、俺と同じスラム出身の腐れ縁で昔から頭の回転が早かった。それが俺が公爵の眷属になってスラムの皆を呼んだ際に、こう言つて来たんだ。

「いや、一から十までアンタの世話になるのは癪だしお金貸して。娼館でも始めて三倍

にして返すから」

別に仲が悪い訳ではなく、昔から自立心が強いんだ、この女は。俺は安心して住める場所と職業訓練の機会を皆に提供する気だったが、どうしても内容は絞られる。自分の進む道を他人に制限されるのは嫌だから自らの悪魔としての種族でも特に色に特化したサキュバスとしての能力と持ち前の知能を活かして成り上がろうって魂胆だ。

「そうか。ルーリアには補佐官をやって貰おうって思っただけだな。頭良いし、俺よりも世渡りが上手いからな」

この頃、切磋琢磨の結果から評価と仕事量が上昇していた俺は補佐官を雇うことを提案されていた。だが、公爵家の伝手を使って決めた相手にスケジュールを管理されたくない。だが、此奴ならスラムにいた頃から仲間の行動計画を作って管理したりと能力は信用できる。

「……給料次第ね。ああ、やるとしても通常の業務までだから。手を出そうとしたらアタの引きちぎって犬の餌にするからね」

「ははっ！　なんで俺がテメーに手を出すんだよ？　意味不明過ぎて笑えてくる」

軽口には軽口を。昔からそれが俺達の関係だった。今回も有り得ねえ事を言っただからお返ししてやったんだが、真剣な顔で数秒何やら考えた後で肩を竦めたため息を吐きやがった。

「……あー、うん。私を口説こうとするアンタを想像したら吐き気がして来たわ、マジで。気分転換に酒でも奢りなさいよ」

「水でも飲んで、ボケ」

互いに冗談の様で本気も混じっている。この女はやると言ったら本当にやるし、俺も美人と認識しているが異性として意識出来ない。そんな自分が想像できない。

こうして俺の補佐官になったルーリアは短期間で仕事を熟練者以上にこなし、完璧に猫を被っていた。どうも馬鹿な男を手玉に取るためと幼い頃から母親が仕込んだらしい。そのお陰もあつて人前では本性をさらさず、俺に縁談が来にくい様に影ではそんな関係で有るかのように表向きは振る舞っている。……因みに業務外として特別ボーナスを要求しやがった。

まあ、昔からの仲間だけの時は今のように口調が崩れるんだ、俺は。仲間達は普段の俺を笑い話の種にしやがるし、禄なのがいやしねえ。

「……にしてもお嬢様は今後どうするのかしら？　ちやーんと情愛の名に相応しい所を見せて欲しいわ。まっ、無理だろうけど」

此奴が言っているのは一誠の事だろう。あの我が儘姫の願いで婿に選ばれたんだ……本人の意思や両親の合意も関係なくな。やっぱ、息子の思惑に手を貸す気だろう

な。グレモリー家の本格的な後押しで転生悪魔の希望の星にな。

……セールスポイントが神器による戦闘力な以上は今後も戦闘での活躍を望まれるだろうよ。倍加の段階や回数が限界を超えればぶつ倒れちまう程に身体の負担が大きいつてリスクがあつてもな。まあ、改革を押し進めるのを早めれば悪魔の頑丈さと医療技術で間に合うか？ 数百年後にや杖や車椅子が必要なくらいにガタが来てるだろうけどな。本来の数万数十万倍の力を出すんだ、リターンと比べりゃ軽いリスクだ。

あのお嬢様もその辺は分かつてんのか分かつてねえのか。信じるのと問題を直視しないのは別なんだが……。取り敢えず小猫を通してサポーターとして活躍する様に進言してみるか。ただ、俺がやるのはそれだけだ。

「分かつてると思うけど余計なこととは止めときなさいよ？ アンタが余計な物を背負う事になるんだからね？ 只でさえ今後は面倒だつてのに」

「……分かつてる」

……悪いな。今の社会において純血貴族以外の扱いはマジで酷い。切っ掛けさえあれば非常時でも反乱が起きるだろうって程にな。人間の血が混じったら七十二柱の末裔でも家の復興は無理なんだ。昇格して貴族になつても、上り詰めた力に期待して、でも言つて有事の捨て駒なのが目に浮かぶ。

俺の内心を察してか目を細めながらの忠告を飛ばして来たルーリアが投げ寄越した

缶ビールを喉に流し込む。今日は久々の休日であり、心と体を休める日だ。先日の一件もあつて今後は大変そうだが忘れるとしよう。

「当然お前にも苦勞して貰うぞ。他の奴らにもな」

「上等！ 皆揃つて冥府の底まで一緒に落ちてやるわよ」

只一方的に守られるのは俺達の関係ではない。一切迷い無く言い切る仲間には本当に助けられるぜ。つつい口調が戻ちちまう程にな……。

「君の功績を評価して上級悪魔の昇進試験の受験資格を与えようつてなっているよ」

翌日、屋敷に顔を出したサーゼクス様の言葉に私は耳を疑った。

「……先日の一件は大王家家臣の皆様のご助力あつての事。私の働きなど微々たる物ですし、常日頃の働きは大恩ある主へのご恩返しという家臣としての当然の行為。余りに早すぎでは？」

先日の一件、監視中に騒いで存在を知らせて直ぐに逃げ出した方々と共に旧魔王派を捕縛したと報告してある。大王家の顔を立てるといふ当然の行為です。それが明らか

に故意に足を引つ張る行動であったとしても。なので二十程度の若造が中級悪魔になつていただけでなく、上級悪魔へ推挙されるなど有り得ない。

「……ああ、成る程」

リアス様の今後について根回しをした事でミリキヤス派を初めとした方々が騒ぎ出したのですね。次期魔王に推挙したいが公爵家の当主の子供が純血でないのは不愉快な上に威信に関わるとでも。母は一応公爵家に奉公に上られる程度の家の出身ですし、それを知らない別の一派も魔王の血族を倒した者が中級悪魔なのは色々都合が悪いと……。

私が察した事が正解だったのか、察した事を察したらしいサーゼクス様は苦笑している。本当にいい性格をなさつておいでだ。

「私としてはこれ以上の昇格は望まず、生涯を家臣として過ごしたいのですが……」
「うーん。君が昇格しないと他の下僕悪魔も昇格させ辛いんだよね」

大体、政務など重要で大勢の人生に関わる仕事を気軽に受け持つべきでないし、受け持つてはならない。スラムの仲間の生活基盤を守るには今の地位と領地で十分だが、昇格したならば背負うべき者が増えすぎる。当然、グレモリー家から支援を受ける事になり、縛られた結果どうなるかは目に見えているでしょう。

「君なら公爵の眷属として恥じない成績を出すと信じているよ」

「……精進いたします」

私は能力故に眷属になったのだと証明を続けると誓った。なので無様な結果は出せはしない。……それを分かつてか。

「所で一誠君に聞してどう思いで？」

「リアスも彼に夢中だし、働きには期待しているかな？ 色々と大変だと思うけど、働きには報いるつもりだよ。まあ、新しい家族だしね。……血は繋がっていないけど」

……ああ、正しく貴方は悪魔の王だ。実に合理的でいらつしやる。この時、私は彼の厄介さを再認識するのであった。

野良犬とサキユバス

「ほら、眠る時間ですよ。一旦手を止めなさい」

只今の時刻は二十時三十分、目の前の馬鹿が一時間だけ眠る時間。丁寧な言葉遣いなんてむず痒いけど、此奴がやれている事を出来ないのは腹立たしいから我慢している。仲間内ではどちらが先にボ口を出すかで賭けていて、何故か私に賭ける奴らが多い。

……え？ 地の文の口調が本性？ この働き詰めの馬鹿みたいに無駄な事はやってられないわ。人前で猫かぶつてりゃ良いだけじゃない。

「ああ、何時ものを頼む……」

ベッドに横になるメルギスに跨がるようにして顔をのぞき見ながらサキユバス……夢魔としての力を発揮する。別にエロい夢を見せてストレスを解消させる訳じゃなくて、睡眠の質を最適化してあげるの。だって二十三時間の殆どを仕事とその勉強、戦闘訓練に使っていたら人間にも居るショートスリーパーでも身体が保つはずがないもの。

「さてと……」

この状態の此奴は非常に無防備。だから誰かが側にいて守ってやる必要がある。……私達の為に無茶してるんだから、この馬鹿を守ってやることに文句なんて無いわ。

今の内に補佐官としての仕事を進めて起きた後の仕事の負担を減らし、厨房の彼奴に連絡して夜食の手配を進める。その後は……。

「……言つとくけど私が強く成る為だから」

誰に聞かせるわけでもなく呟いて……。

「それにしても立派な屋敷よね」

窓から屋敷の一部を眺めながらスラムの家を思い出す。ぶつちやけ廃墟よね。此処の主の一員になるんだから例の坊やも納得……出来るかしら？　メルギスが予測したサーゼクスの企みでは成功しても失敗してもお嬢様は意中の相手と結ばれ、坊やは将来的に身体がガタガタになる。

成功した場合、壊滅的な悪魔社会の将来を回避できて、チップは実家の社会的地位や影響力。純血の跡取りは両親か自分の新しい子か……メルギスを据えれば問題なし。成功時のリターンは他にも有るし、確実な代償が気に入っているとはいえ赤の他人なんだからそれほど惜しくはない。まあ、情愛つつつても過ぎた時間や血縁の有無で差が出るのは当然。最悪、全部妹に被せた上で隠居でもさせるって手もあるし、合理的と言えなくもない。

……実際、スラム育ちの私達だから分かるけど、今の社会って薄氷の上に有るのよね。
「つと、そろそろ起きる時間だわ」

時計を見れば起床予定三分前。口の周りを拭き取って風の魔力で臭いを逃がし、口の中の粘着きを水を飲んで流し込み、口臭をスプレーで消して後始末は完了。無茶のおかげかメルギスは短時間で少し力が伸びたみたいだ。一ヶ月でこれってどれだけ無茶したのかと俯せにして背中を見れば案の定……。

「前は七割、五割、八割って所だったのに……」

メルギスの背中には三重丸を描いた入れ墨のような模様が三角形の頂点に当たる様に計三つ有るんだけど、三つとも極僅かな部分が緑に発光しているだけで残りは黒く染まっている。最近の任務の数からして全部貯まったので使ったと言うことだ。

「……こんなんじゃ駄目ね。もつと頑張らなくちゃ。守って貰うだけのお姫様なんて性に合わないわ」

先程摂取したアレのお陰で力が漲って来るのを感じるが、目の前で眠る馬鹿との差は開いてしまえばかり。私の……いや、此奴と共に戦うって決めた皆の背中にも同じ物がある。適正のせいで大抵一個、私でも二個だけど。だから、もう少し修行をしようと思つた。だって仲間のあり方は色々だけど、私は並び立っていたいから。

「つて言うかアンタが私に惚れれば全部解決するんだけど？ そんな時は仕方ないから受

「入れてやっても良いくらいには評価してやってるのに、この仕事中毒の修行馬鹿」

「サキュバスの力を今以上に活用できれば力を一気に増せる。でも、その気じゃない奴に迫るのも悔しいし？ 私は仲間としか思っていないし？ 取り敢えず腹が立ったので仰向けに戻すと頬を掴んで引つ張って遊ぶ。時間まで何しても起きないってのは本当に便利だわ。」

「取り敢えず何時もの通りに仕事しながら食べられる物にしたから。……不本意だけど」

「オフの時には食事に集中させるわ。所で私の料理はピーマンを抜いてって頼みはどうなりました？」

「却下。大人なんだから我慢して食べて。……あと、君が敬語使うのって相変わらず違和感マックス」

「深夜前、夜食を届けにきたのは長身で黒髪オールバック、眼帯に傷だらけの身体っていう威圧感だらけの男、スカー。味わって食べて欲しいって態度を隠さないのは隠すよ」

うな間柄じゃないから。同じスラム出身で、人前に出なくて良いと思って厨房で働いている。褒める時とかに呼ばれるって私達も知らなかったけど……。

ハムとチーズのパニーニにマグカップに入ったポタージュスープのトレイをメルギスに渡すと私は一旦退室する。今日の労働は終わり。

「じゃ、夜更かしは美容に大敵だから寝るわ。夢魔の力も自分には使えないし」

「ええ、お休みなさい」

こんな時こそお母さんが生きてたらと思う。私も短時間睡眠で保つようにしたり、落とし方をもっと詳しく……は別に良いとして……。ああ、間抜けにもピロートークで重要事項を漏らした馬鹿貴族死ぬ！ って言うかスラムの焼き討ちの理由ってお母さんが居るかも知れないからじゃないの？ よし、何時か絶対殺す。

復讐を誓いながら部屋に戻った私はシャワールームで汗を流した後は下着姿でベッドにダイブする。このまま心地良い眠りに……と思った所で机の上に放置してた手紙の山が目に入った。炭酸ジュースこぼしちゃったから読まずに置いてたんだっけ、別に読みたくないけど読まない訳にはいかないってのが面倒だ。

「美しいって罪よね。……パツと読んで寝よ」

私はとても美しい。すれ違った通行人が思わず振り返って姿を目で追うレベルで。スタイルも抜群だし、男共が放置しておかないのよ、スラムの仲間とは別として。彼奴等、マジで金〇付いてるのかしら？

それは兎も角、補佐官としてメルギスの仕事に同行してれば私の美貌に心を奪われる奴は出て来るし、そういうのを避けるためにメルギスと裏でデキちゃってる風に装うんだけど、知らなかったり知った事じゃないって連中は一定数居て、会った時に感想聞かれて中身を把握してないんじゃないかと困る。だから流し読みをしているんだけど……。

「……は？ この詩ってナルルから借りた詩集に載ってた奴じゃない。こっちは金やら権力やら見事に自分自身のセールスポイントが皆無な上に、カカロアからの情報で財政状況がヤバいって知ってるっつーの。てか、此奴等全員婚約者居るでしょうが。アレか？ 今から愛人を確保しておこうってか？ なんか読んでいるだけでムシヤクシヤシて来たわね……」

余程私を安い女と侮ってるのか恋文の文句が陳腐で呆れ果てる。中には知人であるソーナ・シトリーの婚約者の名まで見つけてしまった。……あの女のかあ。ちよつと嫌

いななのよね。

「えっと、何が切っ掛けだったかしら？ 確か小さい頃にピクニックに行った時に蝶を追いかけてはぐれた上に野犬に囲まれた所を彼奴が助けて……止めとこ止めとこ。無駄よ、無駄。さーて！ もう寝ましょう」

最後に若手ナンバーワンとか呼ばれている奴の手紙を読まずに放り出し布団を被って目を閉じる。ああ、本当に無駄な時間を過ごしたわ。陳腐で下らない口説き文句ばかり並べたって私の心は動かない。私の心を動かせるのは彼奴の何気ない褒め言葉……。

「お休み！」

浮かんだ顔を忘れるように睡魔に身を任せる。ちよつと顔が熱かった……。

野良犬と眼鏡

「漸くですね。やっとマトモな生活を送らせてあげられる」

私の手の中には先日行つたギヤスパアの封印解除に関わる試験の合否を告げる書類が握られている。主は私ではないので当然未開封ですが結果は知っています。審査に関わる貴族の奥さんがホストクラブにはまっています、其処のナンバーワンから情報が出来たのですよ。

「……はあ」

ギヤスパアの訓練に携わつた者としては素直に嬉しい。魔眼の暴走は魔力のコントロールの不備と精神状態から来ていたのでネットを通して交流を図り、次に壁を挟んで話して馴れて貰つた後は基礎である魔力のコントロールを目隠しをした状態で行い、応用である魔眼のオンオフや範囲、強弱等の応用の訓練へと移行していった。

上層部が彼を封印したのは力の暴走を危惧してですが、あのままではお嬢様が力で無理に押さえつけられる程に強くならないと解除認定はされなかつたでしょう。主の力不足で封印されたからとお嬢様の訓練を頼まれたりしなくて本当に助かりました。でも、他に指導者の候補は居るはずなのに、ちゃんと訓練していた様子は無いのですが

……。

「……多分力でねじ伏せる様に指示されるのが嫌だったのでしょう」

それか訓練を任された私を信用して領地の管理に集中したかったのか、と、将来的に関わりそうな問題から目を逸らしながら結果を伝える為に転移する。溜め息の理由は呼ばれた時間に居る人物が理由でした……。

「お嬢様、結果が出ました。見事に合格。本日より晴れてギヤスパーはグレモリー家の家臣として力を遺憾なく発揮する事でしょう。これも全てお嬢様の人徳あつての事。では、私はこれで」

「あら、もう少し待ちなさい。今日はソーナと新人の顔合わせをする予定なのよ。彼女も貴方に会いたいだろうし、命令って事で」

「はっ！ ご命令とあらば部屋の隅をお借りいたします」

それを知っているからこそ機械的に対応して即座に退散しようとしたのですが、残れと命じられて断ることは出来ない。本人からすれば悪意はないのです。私が私としては迷惑此処に極まる。そのソーナ・シトリーに会いたくないのですから。

「入りますよ、リアス」

本心を隠し無表情で部屋の隅に立っているとノックの音が響いて数人の学生が入ってくる。その先頭に立つ冷静そうな顔の少女、ソーナ様は私の顔を見るなり驚いた表情になり、後ろの少年はアレは誰だと訝しげな視線を私に向けていた。そして、その視線に不機嫌さを感じさせる鋭い物、嫉妬が含まれるのは直ぐのこと。

「メルギスさん、どうして此処に……」

入ってきた時の冷静そうな顔が一変して驚きと動揺、喜色が浮かんで髪型を気にし始める。昔迷子になったのを助けてから妙に懐かれたが、成長と共に別の感情も含まれるようになったのは、彼女の姉である痛々しい格好のシスコン魔王セラフォル様が遠回しのつもりで探りを入れてきたので知っては居た。どうせ婚約者が居るのだし無視しても支障が無かったのだが……。

「会長、あの怪しい仮面の野郎は誰ですか？」

どうやら彼はソーナ様に恋心を抱いてしまったらしく、私を見て態度を変えた事で内心を察したのか言葉にもトゲがある。失礼な糞餓鬼が、ぶっ飛ばすぞ……等の本音は一切顔に出さず、微笑みながら仮面を外して重度の火傷痕を見せる。

「ああ、これは失礼しました。確かに顔も晒さない部外者が居れば警戒は当然。……この様に積極的にお見せしたい物ではないとご理解下さい」

「いっ!」

初見の一誠君達は私も素顔を見て絶句する。アルジエントさんが僅かに反応が薄いのは聖女としての治療で酷い傷を見てきたのがあるでしょうが、動きからして最近まで一般人の彼らにはシヨックが大きかったらしい。ですが、こうやって火傷痕を見せておけば大概の方は安心して嫉妬を収める。あの少年もこの顔なら大丈夫とも思ったのでしようね。

「申し遅れました。私はメルギス・ヘール。グレモリー公爵の兵士をやっている者です。どうかお見知りおきを」

本当は此処までする必要はないのですが、無理にいさせようとしたお嬢様への意趣返しもあります。友人が好意を寄せているからと無理に残らせるから良心が少々痛むことになるのですよ。

あつ、因みにヘールというのは母の名字ですら有りません。完全な偽名です。

「……サジ、失礼ですよ。彼は既に中級悪魔であり、最年少で上級悪魔昇級試験に推挙されています。……あの、メルギスさん。宜しければお詫びを兼ねてお茶にご招待したいのですが。眷属達に色々とお話を聞かせて頂きたいですし……」

どうやらサジというらしい少年を厳しい声で叱咤したソーナ様は何やら期待が込められた目を向けて来ますが、私は静かに頭を下げて応える。

「折角のお誘いは大変光栄ではございますが、先程おっしゃった様に矮小の身に多分な

評価を頂いた事で、テレビだとある方との対談を行う事になっておりまして、本日はその打ち合わせが入っております。故に大変恐縮ではございますがまたの機会に」

「そう…ですか。では、今度お誘いします」

「……それと出過ぎた真似では御座いますが、私は七十二柱に連なる高貴な方々に比べれば野良犬も同然の存在。さん付けなどなさらず、身分相応の扱いをなさって下さい」

正直言つて私は彼女に良い印象を抱いていない。耳にした彼女の夢は成功したとしても今の社会情勢では暗い未来が見えており、そもそも行動が伴っていない。それと姉が鬱陶しい。まさか口に出す訳には行かないので遠回しに余り関わるなど伝えればサジ君は再び不機嫌に。ああ、実に面倒くさいです。

予め渡されていた紙に描かれた魔法陣を使って転移した先は森の中のコテージ。魔力を霧状に薄く広く広げても潜んでいる者は居らず、コテージの中でくつろいでいる男ただ一人。どうせ来たことは向こうも分かっているのだからノックもせずに入れば茶菓子が用意されたテーブルを挟んでソファーに彼が座っていました。

「最近ゲームで圧勝した相手がショックで行方不明になったと騒がれていますが大変です
ね、皇帝殿」

「君は君で大活躍じゃないか。どうせ大王家の部下は君の足を引っ張っただけだろう、
無貌ノフェイス・カラムティの厄災君？　ぷくくくく。あの少年に随分な二つ名が付いたものだ」

私の前に座るレーティング・ゲームのチャンピオン、デイハウザー・ベリアルは一頻り笑った後で着席を促す。……今の私なら戦いになりますよね、スラムでの初対面時と違って。彼の一族の特性は教授に施された禁術には一部のみ作用しますし。無駄だから戦いませんけど。

「それでわざわざ呼び出した理由は？　テレビ出演にこの時間……俺は暇じゃねえんだ
よ」

猫を被るのを辞めて本性を出す。此奴は大王家に従い俺達を倒した男。今は共犯者
だけど正直嫌いだ。向こうがこっちに罪悪感を感じている部分も含めてな。

俺の早く帰りたいという意思を察してか茶で喉を湿らせてデイハウザーは話し出す。
今の社会を揺るがす事実を……。

「あのゲームの後、ビィデッセが陰で接触してきてね。接戦の予定なのにどうして恥をかかせたって言ってきて……漸くチャンスが巡って来たと思つたよ。命乞いをしながら王の駒について教えてくれた。力を十倍に高めるって物らしい」

「……確かに凄いが普通の駒だって一般人クラスが車を蹴り飛ばすレベルに強くなるし、神器だって本人の力どころか敵対する神の創造物だろ。っていうか最近数万倍に力を高められる知り合いが出来たばかりだからな……」

隠している事は確かに問題だが、程度の差はあれど似たものは浸透している。……いや、逆に考えれば隠さなければならぬ程に上はそれらを警戒しているのか？ ……あの眼鏡の夢、上を粛正でもしないと前途多難過ぎるな。

野良犬と少（幼）女

「臨時の経費として公園の整備費に貯水池の増築に掛かる諸々……ああ、産業物の売上と観光収入でギリギリ黒字か」

分譲された領地の収支報告書を眺めながら政務の難しさを再確認する。基本的に自分の金は眷属としての給金で賄って、領地関連の収益は全額領地に還元しているのですが、こうして細かく分類分けした帳簿を見ていたら頭が痛くなってきた。私、数字は余り得意ではないんですね。

「じゃあ、そろそろ休憩終わりにしましょう」

今は帳簿作成が得意な人に任せていますが、もっと勉強をしないとイケません。苦手を苦手のまま放置するのは問題ですからね。私は休憩中に読んでいた書類を仕舞うと一緒に l k m ダツシュをしていた二人の方を向く。少女二人は死んだような目をして

「……貴方馬鹿ですか？ 馬鹿ですわね。……1kmダッシュつて、標高約1000Mの急斜面の山をダッシュさせてどうするのよ。アンタと一緒にするなつての、このスパルタ馬鹿」

「ほぼ直線ですし、五往復しかさせていませんよ？ 悪魔は飛べますから転がり落ちる危険性は低いですし。……それよりもボロが出ています」

昨日の鍛錬に当てる時間、スラム出身で現在は将来の箔付けの為に屋敷に奉公している二人を準備運動に参加させたのですが、濡れたマスクを付けさせ百キロの重りを背負わせて山登りダッシュをさせた事をルーリアは少々怒っている。私が幼い頃は同じ訓練をしていたんですけどね？

……いや、よくよく考えれば下級悪魔は上級悪魔に比べて魔力以外に身体能力も低い。元々子供以下の魔力の一誠君が数万倍に倍加してもライザー様との決闘でそれ程圧倒的で無かったように。……そもそも数万倍になっているのでしょうか？ 私の解釈違いなだけで、例えるなら使い捨てのタンクを取り付けて燃料の総量を増やす事が出来ても一度に注げる量が変わらない、そんな感じなのかも知れません。

「実際、ゲームや決闘の映像を見る限りでは一度に身体に留めておける魔力量は変わらない様ですしね……」

「アンタ、人の話を聞いているわけ？」

考えが逸れて思わず呟いてしまえばルーリアに頬を引つ張られる。今、彼女は私の膝の上に向かい合わせになって座っていました。その上身体を離すわけでなく、寧ろもたれ掛かるようにしている。顔が近いし胸が当たっている。いえ、彼女の胸が当たっているからどうという訳でもありませんがね。

何故か睨む瞳が更に鋭くなりながら私の頬が両手で挟まれた。

「……ねえ。このままキスでもしてあげようかしら？ ふふふふ。昔は何かしたら切り落とすって言ったけど、今の力の差を考えたら成すがままね」

「目が獲物を狙う獣の目ですよ。アレですか？ サキユバスの本能？」

「……否定はしない。私、キスもしたこと無いけど」

この女、見た目は絶世の美女だが中身は中年のオッサンだからな。そもそも此奴がこんな事をしているのは今から来る奴らに見せ付ける為です。自分の発言に恥ずかしそうにしているが羞恥系のアレではなく、公爵家の眷属だからと寄ってくる方を避けるために恋人だと誤認させる為の策です。正式に認めたら大っぴらにアピールしなければならぬので噂が広まる程度で済みますけどね。

「あつ！ 魅了とか使って良いかしら？ レジスト禁止ね」

「横暴にも程が……来ましたよ」

もう直ぐお昼時、何時もこの時間帯に食事が運ばれてきますので偶に目撃されて噂が流れる様にする。まさかルーリアがこんな案を出すとは思っても見ませんでした。さて、ノックされましたし、開いた瞬間に慌てて離れて下手な言い訳でもすれば……。

「メルギスさん、お昼ご飯を持って……」

「あの、お邪魔で……すよね？ ルーリア姉、ごゆつくり……」

入ってきたのはアホ毛の茶髪ショートと白髪黒目の褐色肌の少女メイド二人。……身内です。スラムで共に育った仲間です。更に行くならば訓練がハードだと注意された二人。名前は桃花・クレイシーとマーシルリア・ナラル（通称マーシー）。

「これは誤解を解かないと私達がマジで出来てるって仲間に広まっちゃうわね……」
「そうですね……」

微妙な面して祝福されたり、素直に祝福したりするのが目に浮かぶ。多分否定しても照れるなどか言われそうな気がする。寧ろ、皆は言うでしょう。良くも悪くも自由なのが多いですから。取り敢えず小猫に相談を持ちかけられていますし、お供として連れ出

しますか……。

「あ、あの、本当に良いんですか？　こんなに沢山」

「これがネットで評判の新作スイーツ……」

「……いただきます」

私の前にはテーブル一面に置かれたスイーツ、向かい合わせの席には少々幼い姿の少女三人。私、そっち系の人に思われていませんよね？　甘い物で幼女を釣る犯罪者のな……等と表情に出ていたのか桃花の目が鋭くなり、小猫の眉間に皺が寄る。取り敢えず小猫が来る前に誤解は解きましたし、労いも兼ねながら相談を聞きましょう。

「き、木場さんの様子が変？　確か沖田……さんの弟子でお嬢様の騎士ですよ？」

皆さん、初めまして。私は桃花・クレイシー。……本当は暮石ですがスラムの皆さんに保護された頃は舌足らずな上に聞き慣れない日本の名字でしたのでクレイシーと間

違われ、今でも偽装のためにクレイシーと名乗っています。偽装が必要なわけは後々敵キャラなどで明かされるとして、今は冥界在住なのに日本の名前でスラムに保護された事で察するかキャラ募集のページを見て下さい。

メタ名発言は此処までとして、どうも彼の様子が妙との事。ギヤスパーさんの封印解除もあつて今度の球技大会に熱が入っているリアス様ですが、彼は上の空の事が多いらしく……師匠の影響ではないですか？ 私、彼の師である沖田総司が嫌いなんです。

『生き残りたいと思うのは生物として当然の事だろ。理想に殉じたい野郎だけが勝手に死んでりや良いし、所属を変えたから前の仲間知らないってのも自由だよ。……関心はしねえけどな』

メルギスさんはそう言つて、今でも羽織を着続けているのは自分が仲間を裏切つた事から目を逸らす行為で、其処は気に入らないつて言っていました。私は仲間の命も名誉も知らないつていう彼が気に入りません。

「……すみません、メルギスさん。何かご飯系を頼んで良いですか？」

「ええ、構いませんよ」

腹が立つてきたらお腹が減ってきたので大盛りカレー（トッピング全乗せ）を注文する。小猫さんは境遇が似ていますし、胸も同じ位なので仲間です。……手配書で見たお

姉さんクラスに成長しない内はですが。

「それでお嬢様はどうしろと?」

「いえ、部長は真面目にやるように注意する位で、私達に何か心当たりがあるかも聞かなくて、主に……」

「ああ、一誠君に夢中な訳ですね。まあ、恋に恋する少女が意中の相手を見つけたのですから仕方がないですが……」

「世の中は平等ではないですからね……」

言いよどむ小猫さんの様子や入ってくる情報から察したメルギスさん。私も家を大幅リフォームしたり等々バタバタ惚れしているのが分かります。

実の親でさえ兄弟姉妹の誰かを鼻屑するのですから、眷属でも注ぐ愛に差が出るのは仕方がないこと。ルーリア姉の胸を思い浮かべながら自分の胸をさす私は世の無情さに嘆きを感じるのです。

「教授に相談して……止めときましましょう」

自分の命さえ危険に晒すマッドの事を頼るなど自殺行為ですからね。私がクレイシーなら彼はクレイジーです。スラムの皆は私がメルギスさんの真似をして一時間睡

眠に挑戦しようとしたら、彼奴はクレイジーだから真似するなと怒りましたけど。……あれ？

「どうかしましたか？」

「いえ、『切り花』が何かに反応した気がして……」

一瞬でしたし理由は分かりませんが、私の返事を聞いたメルギスさんは念の為に冥界に帰る事にしました。小猫さんを通してお嬢様に注意を呼びかけましたけど……不安です。

……所でこの町には有名なワツフルのお店が有るので寄ってみたいのですが。ほら、皆へのお土産に……え？ 構わない？ やった！

「……悪魔か」

「ひっ!？」

お店に向かい、注文した品が出来る間にマーシーとトイレに行つたのですが、先に出了らしく女子トイレの前で待つていた彼女を神父服の男性が見下ろして正体を見破っています。髪は白ですから例の機関の所属ではないのでしょうか……。

瞳に明らか敵意が込められていたからかマーシーは思わず悲鳴をこぼして後退りをする。……止めなくちゃ! こんな事であの子に誰かを傷付けさせれない!

「ちよつとお話し良いですか? お嬢ちゃん、この人の知り合いかな?」

「え、えつと、初対面です……」

「そう。ちよつとお話しを……待てっ!？」

私が飛び出そうとした時、剣呑な空気を発した所に通りかかったお巡りさんが来るなり神父は逃げ出しましたけど……本当に嫌な予感がします。

「すみません。その子がどうかしましたか？」

「……貴方、この子の保護者ですか？ 一応関係を教えて貰ってパスポートか何か見せて貰える？ 最近、教会が誰かに破壊されたり殺人事件が起きてて物騒なんですよ」

あつ、これは早く助けに行かなくっちゃ。……この時、私が入ることで余計にややこしくなるとは予想もしていませんでした。具体的に言うところリコン的な何かの疑いを掛けられました。……ごめんなさい。

野良犬と魅了

「いや、マジで悪かったわ。めんごめんご」

一切謝罪の気持ちちが込められていないルーリアの言葉を聞きながら天井を仰ぎ見てしみじみ思う。何やら目の前で手を合わせるといった動作をしているのは床に伸びた影で分かるが直視していいないので表情までは分からねえけど、どうせ緑な表情じゃねえだろ。

「……メルギス。ルーリア、舌を出してる」

「ちよっ!? バラさないでよナルル」

「そんな事より詩集早く返して……まさかなくした

俺達が今居るのはスラムの仲間が経営する骨董品店。今日は久々の休日だからと口調も崩して仲間の顔を見に来た……つてより、今の状態で屋敷になんぞ居られるかつての。どうせ転移で一瞬だしな。……そもそも今の状況がどうなっているかと言うと、

今の俺は女を見た際に男が感じる劣情的な物が強くなっている。若い女の使用人は勿論、取り込もうと近付いてくるハニートラップ要員に隙を見せたくないしな。ぶっ

ちやけ反応次第で評判が下がるし……。

何故こんな事になっているか。それは早朝まで遡る。尚、ルーリアが原因だ。

「はあい。こんな美女の顔を寝起きに見るなんて最高ね」

今日は休日。久々に惰眠を貪っていたんだが、腹の上に重さを感じて目を覚ましたらルーリアの奴がネグリジエ姿で乗っかっていやがった。此奴の寝間着はウサギ柄のピントクのパジャマだからわざわざ用意して……暇な奴だな。

「ちよつとー！　こーんな美女のネグリジエ姿よ。男だったらもつと何か有るでしょ？」

「いや、お前が美女だつて認めるけど……お前だからなあ」

ルーリアは間違いなく絶世の美女だ。餓鬼の頃に世話になってた姉ちゃん達もセクシーな美女が多かつたし、同年代の仲間にも容姿が優れているのは多いし、桃花やマーシーとかも将来有望だが、結構な数の貴族の子息にラブレターを送られる此奴は飛び抜けているだろう。

マジでルーリアでなければなあ……。

「……………うん？　今日はなんか様子が……………」

何時もは目の前の美女がルーリアでさえなければ揺れていた理性が僅かに揺れる。偶に、偶にシチュエーション次第で心が揺れない事もあったがどうしたんだ？ 餓鬼の頃、娼婦をやっていた姉ちゃんに餓鬼共は身の回りの世話を見て貰ってたんだが、思春期を迎えた頃には……。

妙に色気があるというか、甘ったるい香水の香りが気になるというか……その香水か。俺の視線に気が付いたのか、ルーリアは指先で胸元を広げながら目をのぞき込んできた。

「偶に使わないと感覚が鈍るのよ、サキュバスの能力って。ほら、食事と一緒だし。……でも、適当に選んだ相手に勘違いされても困るじゃない。ってな訳で……魅了チャーム（全力バージョン）」

他に使う対象が居ないなら仕方ないと、つついっ油断した所に予想以上の力が籠もった魅了が襲ってくる。このタイプって事前の警戒があるか否かで抵抗の成功率が変わる。悪戯を警戒してるが、こんな所で足を掬われるとはな……。

「つたく、くだらねえ事しやがって……戻せ」

魅了は確かに掛けたんだけど、お前にときめいた所で扱いが変わると思うか？ とか言つて拳骨を落とされて正座させられてしまった。……しくつたわあ。ちよつとチャホヤさせた後で解除する予定だったんだけど。多分しばらくは録画した姿でからかえるだろうし。……効いてるわよね？ あの目は私を見る有象無象の目と同じだもの。

「はいはい。今戻す……あれ？」

何時もは適当な相手に適当に掛けて適当に解除してるんだけど、どうも今回は上手く解除出来ない。

「おい、ふざけている場合……マジか」

「お早う御座います、メルギスさん」

「あ、あの、朝食をお持ちしました」

メルギスが絶句した時、桃花とマーシーが入ってくる。そして私達の姿を見て何かを察した顔に。私のただでさえ低い威厳が……あれ？メルギスがシヨックを受けた顔に。

「……おい、ルーリア。二人共、髪型変えたか？ 妙に可愛く見えて……」
「今すぐ教授の所に行くわよ！」

こうなったら迷っている時間はない。私はメルギスの首根っこを掴むと速攻で転移を発動する。向かうはスラムの仲間の一人、ナルルが経営する骨董品店。其処に居候する教授こと死神マッドの所に！ 此奴にロリコンの烙印が押される前に！

「……教授なら温泉旅行。一体何をしたの、ルーリア？ どうせ馬鹿やったんでしょ？
メルギスも大変ね」

「いや、実は教授が作ったサキユバスの力を増す香水を使ったんだけど……」
馬鹿を見る目つてのは今私に向けられている目の事なのだろう。赤目黒髪に紫のローブのクールな少女は骨董品店のカウンター越しに冷めた目を向けている。うーん。昔から苦手なのよね、此奴。仲間相手でも容赦がないって言うか……。

そんな時、扉が開いた。入ってきたのはこれでもかとかと色気を強調した服のサキユバ

ス。私達がお世話になってた人で、スラムから出た後も娼婦を続けているおっとり系の美女だ。

「話は聞かせて貰ったわ。全部お姉さんに任せておきなさい！」

「……ルナ姉、商売の邪魔だから余所でやって貰えるかしら？」

「あら？ 何か言った？」

「……別に」

ルナ姉、小さい頃の私達の世話係の一人だった人にはナルルも強くは出られない。小聲だったからよく聞こえなかったみたいだし、ルナ姉は小首を傾げるだけだ。ウエーブの掛かった金髪からいい香りがするし、胸は少し動いただけで揺れている。……相変わらず女でも感じるほどの色気で……はっ！

「ル、ルナ姉、久し振り……」

「あらあら、少し見ない間にまた強くなったみたいね。さーて、診察診察」

男共にとつてルナ姉は一番身近な綺麗なお姉さん。当然憧れる奴が多かったし、メルギスも少しはその傾向があった。だからか今の彼奴は真つ赤になってルナ姉を直視できないんだけど、ルナ姉はそんなメルギスに近付くとオデコを引っ付けて目をのぞき込

む。私より大きな胸が当たっていた。

「……うーん。これは無差別に魅了が発動しちゃった状態ね。サキユバス数人掛かりで一人を搾り取るときの術なんだけど、教授の香水で誤って発動したのね」

当然だけどルナ姉はサキユバスとしては私より遙かに上。基礎は母さんに習ったし、ルナ姉は娼婦のまとめ役で色々忙しいから滅多に機会がないけど秘術について偶に習っている。うん。今回は任せておけば……。

「じゃあ、私のお部屋に行きましようか」

その考えは徐にメルギスの腕に抱き付いて連れ出そうとした瞬間に消え失せる。この人、食う気だ！ 思いっきり胸を押しつけて舌なめずりまでして……。

「ルナ姉、一体何を……」

「何って……ナニ？ あっ！ 大丈夫、初めてって誰もが不安なものよ。でも、お姉さんが一から教えてあげるから安心しなさい。メルギスちゃんを一人前にしてあげる」

余談だけどサキユバスの能力で相手が経験済みかどうかは一目で分かって……ルナ姉の好物は……。

「いやいやいやっ!? 魅了を解いてくれればそれで良いからっ!?」

「駄目よ。これ、だいたい時間を置くか何度もアレを出す必要が有るもの。だ、か、ら、お

姉さんに任せておきなさいって。……あら？」

……うん。全部私の責任だし、責任感から動いているだけだから。私はメルギスの肩を掴んで振り替えさせると全力の催眠を無防備な状態の彼に使う。眠って倒れそうになったのを担ぎ上げた。

「私が処理しとくから……えっと、ご指導お願いします、ルナ姉」

「あらあらあら！　良いわね、良いわね！　じゃあ、卒業は今度にとって置くとして胸やお口や手を使った殿方の喜ばせ方を伝授してあげる。ルーリアちゃんは立派な武器を持つているから教えがいがありそうね」

実に楽しそうなルナ姉と一緒にメルギスを担いで持つて行く私。その姿をナルルはジツと見ていた。

「……………(愁傷様)」

お昼前、久々にルナ姉とお風呂に入っている間に骨董品店でメルギスが目を覚ましていた。

「…………朝からの記憶がない。何か疲れたし、どうして俺は此処に…………？」

「…………さあ？ 取り敢えず今日は休みなさい」

「…………せい！」

ただ一心不乱に剣を振るう。戦場で雑念は死を招き、未熟さは死地への後押しになる。何千何万回も繰り返した動作は体に馴染み、今より未熟な頃に感じていた刀の苛立ちも感じる機会が減ってきた。皆無でないのに恥じつつもメイド業務の合間を使った鍛錬に勤しむ。全ては両親の仇を破壊する為に。

「…………ふう」

そろそろ時間だからと頭から水を被って汗を流し、火の魔力で乾かしていた時、私を呼ぶ声があった。どうも特別な仕事を頼みたいらしい…………。

「沖田さんのお付きとして駒王町に？」

ああ、憂鬱ですね……

少女剣士と聖剣

「貴女は此処に隠れて居なさい。……絶対に生き延びるのよ」

私達一家の平穩は、ある日、唐突に奪われた。転生悪魔だった父と母の愛に包まれた幸福な日々は妖刀に乗っ取られた父が主を殺して逃走。母が連座で捕まって、急な来客に不審を抱いた母の言いつけを守って入っていた地下の隠し部屋から出た時には家は無惨に破壊され、父が残した霊刀『切り花』を持って逃げて逃げて逃げて……スラムに辿り着いた。

「まあ、安心するが良い此処の住民は来る物は拒まず、似た者が多い故に結束が強い」
餓えと疲れで倒れた私を見つけてくれたのは冥府を追放された死神でトラブルメーカーの通称“教授”。元々は最上級死神にも成れたのに青年期に魂の師匠と出会い、学者になって色々問題を起こしたとか。今でも何かと問題を起こしている方です。だから娘に嫌われているんですよ……。

今まで住んでいた場所とは違い正直言って劣悪な場所でしたがスラムでの日々は楽

しく、仲間は家族同然でした。あの日、領主である大王家がスラムを焼き払う為に派兵した時は私は今よりも幼く、流石の教授もメルギスさん達に施した禁術『デスイーター』を私には使つて貰えずに悔しい思いをしたものです。

「忙しいのに悪いですね。そうだ！ 私が稽古を付けてあげましょうか？」

「……いえ、お気持ちだけ受け取って置きます。私の愛刀は直ぐに臍を曲げますので……」

魔王ルシファアの騎士である沖田総司。私を感じ取った謎の気配、そして遭遇した悪魔祓いらしき神父。事態を重く見たグレモリー家ですが、此処で下手に戦力を派遣すればお嬢様は実家からも評価が低いと他の貴族に思われ、改革に支障が出てしまいます。なので休暇の名目で人間界に彼を派遣、私をサポートにして調査を行うとのことでした。

にこやかな表情で話しかけてくる沖田さんに静かに頭を下げながら苛立ちを隠し通す。メルギスさんはああ言っていました、自分の命惜しさに主である幕府や仲間を見捨て、名誉を回復させる手伝いもせず、仲間の証である羽織は平気で着て新撰組の隊長だったと口にする。だから嫌いな相手の上位に入りますが……メルギスさんの事を思えば我慢です、我慢。

「それで先ずは何処に行きますか？ ホテルは既に予約しているんですよ？」

「そうですね。先ずは祐斗の様子を見に姫の所に行きましょう。様子がおかしいとの事でしたし……」

この日、天気は夕方から生憎の雨。確か球技大会の当日でしたけどまだ残って居るのでしょうか？ 普段は新撰組の羽織を着ている沖田さんも流石にコスプレと思われるのは嫌なのかラフなシャツとジーンズに着替え、私も仕事着であるメイド服からワンピース姿で二人並んで傘を差して学園まで向かいます。

「おや、祐斗……」

他の学生は既に帰ったのか下校する姿は見えず、遠くから雨に打たれるお嬢様達と、その中から走り去っていく木場さんの姿が目に入りました。表情は暗く、頬には平手打ちでも食らった様な痕。姿を見て掛けた声は雨音にかき消されたのか私達に気付く事なく何処か去っていきこうとする彼を追い掛け様とした沖田さんを私は手で制しました。

「……ただ事ではないですね。私が追いますので沖田さんはお嬢様の方に」

正直言えば嫌いな人の筆頭である沖田さんとお嬢様のお二人と同時に居たく無かったですし、これ幸いと理由を付けて離れます。お嬢様達を屋根のある所に連れて行く必要がありますし、立ち尽くしている彼女達に誰かが声を掛ける必要が有るから問題はな

いでしよう。

「……お願います」

今の主君の家族は余程大切なのか駆け寄っていく沖田さんの背を一瞬だけ見た私は木場さんを追います。雨の中でも悪魔の視力なら見失わず、駒の強化を受けていなくても鍛錬によって鍛えた足腰で引き離される事はない。追いつけ声を掛けるタイミングを計る事にしましょう。

……異空間に仕舞った切り花が跳ね上がるようにして反応したのは、その時だった。遅れて感じるのはアレの気配の移り香。それを直接感じ取ったのは今まで二回。渋顔をした父が持つて帰つて来た時と、三年前にメルギスさんが命じられた任務ではぐれ悪魔の討伐に勝手に同行した時。

「ああ、ああああああああつ!!」

異空間から切り花を抜き放ち、木場さんを抜き去って突き進む。落ち着けとばかりに切り花がカチカチ音を立てるも私は止まらず、駆け抜けた先で神父服の二人を目にし

た。片方は先日に出会った男。自らの血に染まって倒れ伏す彼を見下ろして居るのは白髪の少年神父。その手には聖剣が握られていた。

「フリード・セルゼン……」

私の様子を見て反対に追いかけて来たらしい木場さんが奴の名を呼ぶ。だが、今はどうでも良い。奴には僅かながらアレの気配がした。

「おっと。こりゃ、あの時の悪魔君じゃありませんか！ そつちの雌餓鬼悪魔は見たことねえけど……取り敢えず死んどけっ！」

雑に放つ殺気と共に一番近い私に振り下ろされる聖剣。悪魔にとって致命的な聖なるオーラを放ちながら真上から振り下ろされる刃を僅かに下がる事で避ける。鼻先の数センチ先を通り越していく聖剣から溢れ出すオーラは皮膚をチリチリと焼くけど、その痛みが逆に私を冷静にさせた。男が振り下ろしきるよりも前、力の重心が完全に移動しきるよりも前に真横一文字に剣を振るう。

「……浅い」

あの攻撃に最中の不安定な視線で咄嗟に後ろに飛んだのか二人の距離が開き、切りと

ばす予定だった剣を握る両腕は肉を僅かに切り裂いたのみ。滲み出た血を見て呆然とした男から堤防が決壊したかのように殺気が溢れ出した。

「こ、この餓鬼があああああつ！ 殺すつ！ 両手両足ぶった切って犯してから殺してやる」

「達磨ですか。情報を聞き出すには良いです。なるのは貴方ですけど」

滅茶苦茶に振り回される聖剣を紙一重で避けながら男を観察する。聖剣は確かに一撃でも喰らえば終わりだが、そもそも武器とは同じ物だ。手足に喰らえば祿に攻撃も防御も回避も出来ない。基本からして武器とは避けるか防ぐのが前提なのですから聖なるオーラ等は関係ない。

「……刀」

「ああ？」

「どす黒いオーラを放つ刀を知っていますか？」

僅かに眉が動くのを見て取り確信が二つ。この男、フリードは私が探し求める妖刀『魔喰い』を極最近目にしていて……殺気は見せ掛けだ。わざと振りまいて動きを読ませ、攻めに転じた私を仕留める積もり。……逃げる算段は付いている。

……それだけ分かれば結構。切り花を握る手に意識を集中させ、刀の声を聞く。浅い呼吸を繰り返すこと数回、気が増幅されるのを感じ取る。仇の手掛かりを前に溢れ出し

そんな激情を抑え込んだ。

(母の、皆の想いを無駄にするな、桃花)

母が何故、私を逃がしたのか。皆が何故、私の修行につきあってくれたのか。命に代えても仇を討つ為？ 否！ 生きていて欲しいと願ったからだ。

「……」

一瞬だけ瞼を深く閉じ、開いてフリードを見据える。今まで何度も何度も繰り返して身に刻み込んだ動き。僅かにぶれていると痛みを伴って切り花から叱責が飛ぶ。慌てず矯正し、刀を腰溜めに構えればフリードが懐に手を入れ小型の瓶の形をした物を取り出した。スタングレネード、集中でスローになった視界に移るその正体を見破るが関係無い。雑念は消え、既に動きは読んでいる。視覚聴覚が奪われようとも……いや、今なら閃光と音が放たれるより前に対処できる。

先ず、スタングレネードを弾き飛ばし、返す刀で峰打ちを叩き込んで意識を刈り取る。イメージは完璧でやり遂げる自信は有る。……ただ、此処で誤算があった。

「エクスカリバー!!」

あの木場さんの様子がおかしいと感じた理由は私同様に憎悪であり、その対象が目の前の聖剣だった事。そして、彼がそれを抑えきれずに飛び出してきた事だ。今振れば彼も切り裂いてしまうと悟った私は手を止め、割り込んできた彼にフリードは笑う。スタングレネードから閃光と轟音が響いた。

「……………ふう」

極度の集中の疲労を感じ取りながら私はフリードが居た場所を見つめる。今は姿を消し、スタングレネードが間近で発動したダメージを受けている木場さんを見詰めながら息を吐いた。……今度こそ逃がさない、そう心に誓いながら。

野良犬と苦手な相手

一癖二癖もあるスラムの仲間と自分なりに上手くやっている自信のある私ですが、苦手な相手は存在する。筆頭はスラム一のトラブルメーカーこと教授。下手したら術者が死ぬ上に対象の体質に何らかの変化が起きるって禁術（掛けられるのは子供限定）を事前説明も疎かに使ったり、思い付くままに実験を繰り返している。

いや、マジで人間の奥さんは人格者だし娘は良い子なのですがね。今は額が後退した学者みたいな風体だが、昔は死神として将来を約束されていたとか。悪魔とすれば潜在的な外敵って言うかトップがこっちを嫌っている方々の幹部が一人減るのは大助かりですが、彼を今の道に導いた師匠は本当に何をしたのやら。

……喋る。パンダだとか世迷い言を言ってたでやんす、と、娘が胡散臭そうに言っていたんですけど……。

「それでね、それでね！　これが高校生になって初めての社交界の為に用意したドレス姿のソーナちゃん。素敵でしょう！」

そして今、教授に並び立つ程に苦手な相手、痛々しいコスプレ魔王セラフオルーから妹の眼鏡のアルバムを見せられている途中だ。ああ？ 口調が本性になつてるだあ？

苦手な相手の対応をさせられているのに地の文まで取り繕えるかつてんだ。

「ええ、流石は誇り高きシトリー家のご令嬢。私等とは次元が違うとしか言い表せません」

「え〜？ メルギスちゃんならソーナちゃんの横に立てると思うよ〜？」

「ご冗談を。私が認めればお偉方に叱責されてしまいますれば」

この色男、と、肘でつついて来るのを心底ウゼエと思いつつも顔には出さない様に気合を入れる。この女、あの眼鏡が餓鬼の頃の初恋を忘れていないからって余計な気を回して来やがるんだ。俺の血筋を知ってるからな。俺が想いに応えてグレモリー家に加われば後は魔王の権力でどうかしようって反吐が出る算段だろうよ。

「つか、これってハラスメントだよな？ 今、俺は今度行う番組のイベント会場の下見の護衛だとかに指名されて車に乗させられてんだ。転移で行けば良いのに、こうやって妹をアピールする為にな。権力使ったパワハラで訴えでも無駄か？ 無駄だよな。だって貴族社会は下の者が不満を口に出すことすら罰する理由になるもんな。」

「って言うか、何シーズンも主演の番組制作するとか魔王って暇なのか？ 暇なんだな？ 強さで選ばれた象徴だから重要な仕事や権限は上層部の爺さん達が握ってるって

所か、クソツタレ。

「ふふふふ。実はソーナちゃんについて朗報が有るんだ。聞きたい？ 聞きたいよね？」

聞きたいに決まっているよね！」

「レヴィアタン様のご意志のままに。私は従うまでですのぞ」

「も〜！ その内、お義姉さんって呼んで貰うからね。じゃあ、発表しちゃうよ」

俺の内心も知らず、返事も聞かずに妙なテンションのままに突っ走る馬鹿魔王の顔面に拳骨を叩き込んでやりたいのをグツと我慢する。一応ルーリアとの偽装した関係を知ってる筈なんだが、妹が良いなら愛人にも目を瞑るとか妹の恋が叶う前提で物事を考えていやがるんだらうな。

「なんと！ ソーナちゃんもリアスちゃんと同様に婚約破棄を賭けた勝負を行うことが決定しましたー！ ねえねえ、どう思う？」

「……私如きが意見を申し上げるべき事では御座いませんで」

「素直じゃないな。もう少し素直になっても良いのにさ」

え？ テメエの顔面をタコ殴りにしても良いのか？ 違うよな、シスコンが。このままではストレスが貯まる一方だから何とか話題を変えようと模索していた時、奇妙な感覚に襲われる。何かに包まれるようなそれに警戒した時、窓の外の光景が市街から荒野

へと一変していた。周囲の護衛の車も運転手も消え、緊急停止した車を取り囲む悪魔の姿。

「敵襲……この間の報復でしょうか？」

多分そうなんだろうなあ、と、思いながら車の中からじや応対もままならないからって二人して出れば案の定、殺気が注がれる。

「偽りの魔王と、それに頭を垂れる愚か者め。新なる魔王に代わって我々が始末してやろう。カテレア様の無念を思い知るが良い！」

リーダー格らしい男の宣戦布告と同時に何人かが小瓶の中身を飲めば一気に力が膨れ上がる。こりや魔王クラスに匹敵するが……あの理事長っぽい奴、死んだみてえな扱いだな、おい。

捕縛されたカテレアだが、流石に僻地に追放したとはいえ魔王の血統を大々的に罰すれば不手際やら何やらで政権にダメージがある上に血統主義が猛烈に反対しやがる。結果、付き従った奴らが現政権へのテロを企てていたのを止めようとしたって発表。それによる恩赦で追放を取り消し……めでたく大王家の次期当主の婚約者って訳だ。会见見たけどありや何かされた目だな。

ははっ！ そりゃ俺が魔力を生成する器官をぶち抜いたせいで下級悪魔クラスに弱体化しちまったんだから当然の扱いか。此奴等もそれを知って担ぎ上げるのを止めて死人同然の扱いみたいだよ。

「止めて！ こんな事をしても意味がないじゃない！」

「黙れ！ 我々の忠義の力を思い知るが良い!!」

セラフォルーの叫びは当然届かず、野郎共は四方から魔力を放つ。そりゃ実利だけで誰もが動く訳じゃねえ。だから怨恨やら嫉妬やらが理由の犯罪があるんだしよ。……さて、無駄な思考は此処までだ。降り注ぐ魔力に粉塵が舞い上がり俺達の姿を隠す。倒したとも思っただろう。リーダー格の男は拳を握りしめた。

「やったぞっ！」

残念、フラグだ。次の瞬間、セラフォルーを抱えた俺が飛び出して一番手薄だった箇所、所に魔力を叩き込む。溜めもない範囲重視だが不意打ちとしちや十分。勝利を確信した奴らの包囲を突っ切るには問題なかった。

「ちよ、ちよっつとっ！」

「無礼による罰なら後程受けましょう。ですが今は多勢に無勢。援軍も考慮し、逃げるのが得策かと」

今の状態はお姫様だっこって奴だ。偶に眠っちゃまったスラムのガキンチョ共をベツトに運ぶくらいにしかしねえが、大勢相手に守りながら戦うにはこれが良い。手を引きながらとかおんぶだともな……。前に居るんだから楽で良い。さてと。勿体ねえけど……。

「蓄積魔力……解放。ご安心ください、セラフオルー様。その美しい顔に傷一つ付けさせはしません」

いや、傷があつたら女の顔に価値がないとか思わねえけど、仮にも外交担当なんだから無いに越した事はねえだろ。てか、護衛対象に怪我させたらヤベエ。落とさない様に抱く力を強め、この間のカテレアとかと戦った時の貯蓄を解放、風の魔力によつて防壁と加速を行いながらその場から撤退した。追いかけて来たが……追いつけるかよ、ノ口マがつ！

(綺麗な顔かあ……えへへへ。こーうやつて女の子扱いで守ってもらうの何時以来だろ？
この子、ずっと年下なのよね。……ソーナちゃん、ごめんね。応援してあげられない
や)

振り落とされない為か俺に強くしがみ付くセラフォル。……今、嫌な寒気を感じたぞっ!! あー、癒されたい。餓鬼共を遊園地にでも連れてってやるかな。つたく、苦手な女筆頭の護衛とかマジで精神がすり減るぜ……。

「……エクスカリバー? それでお嬢様は?」

その日の晩、どうも様子がおかしい……元からだが、上の空のセラフォルを連れて安全圏までたどり着き、事後報告を済ませた俺に桃花から連絡が届いた。また嫌な予感がするな、おい。木場の野郎は我が儘姫に黙っておけって言ったらしいが聖剣持った敵の侵入黙つとくとか利敵行為だぞ、ボケ。俺の身内を巻き込むなつての。

「自分達で何とかするから報告は結構だつて沖田さんや私にも……」

「……そうか。どうせサーゼクスも報告は受けてるけどギリギリまで手出しせずには経験やら功績を積みませる予定だろうから気にすんな」

……面倒臭え。

「……んで、お前も何かあったみたいだけど助力は要るか?」

口調? 精神ガリガリ削ってんだ。身内相手だ、見逃せよ。

野良犬と相談

本日は快晴、絶好の行楽日和。……はい！ 悪魔は日差しに弱いつてのは気にしない気にしない。教授の発明品の中では珍しく役に立つ物で、日光への耐性が付加されるのですよ。そして今、私はスラム出身の子供達を連れて遊園地まで来ています。

「年長組はちゃんと小さい子の面倒を見る事。折角の遊園地ですし、お小遣いは後にとって置くんなんて考えずに使っちゃいなさい」

「はいー」

元気で素直な声に癒される。いやはや、子供って本当に良い。ロリコン的な意味じゃなくつて。今回予定が合わなくて来られなかった奴らは別の日に連れて行ってあげませんと。

今回やつて来た遊園地は人気の施設で並ばないと入れない場所。ましてや数十人単位なんてかなり前からの予約が必要ですが、今回はコネを使わせて貰いました。

「それと、無理を言つて予約なしに団体フリーパスを買う手続きをしてくれたルフェイお姉さんにお礼を言いなさい」

「ありがとう、お姉ちゃんー！」

「メルギスさんには何時もお世話になっていきますから気にしないで楽しんで下さい」

それがこの子、普段は如何にも魔女って格好をした女の子で私の契約魔法使いのルフエイさん。かのアーサー王の末裔のペンドラゴン家のお嬢様です。一応この子の前では仕事モードなので口調を変えているのですが、この口調の私を初めて見る子はギョツとしています。……私でもそうするでしょう。本来はチンピラみたいな口調ですもんね、私。

「では、迷子にならないように楽しみましょう」

小さい子も居ますし、楽しい場所に気を取られてはぐれても困りませんから引率者は私以外にも数人。ルーリアとスカー、他のメンバーは何かあった時に手伝って貰う予定になっている。遊興費に飲食費等は私持ちだ。ええ、それは良いのです。子供達さえ楽しめれば……。

「……それで相談というのは？」

現在、観覧車の中でルフエイさんと向かい合ってお話中。皆には契約に関する話をすると言いましたが、どうも表沙汰に出来ない相談事が有ると持ちかけられたのです。……そんなのをする程度には信用されているのでしょう。ルフエイさんは一瞬言いよ

どんだ後で口を開きました。

「……強い相手と戦いたいから家出つて。お坊ちゃんの場合は分からないわね。使用人が哀れだわ」

遊園地で一日遊び、餓鬼共を親元に送り届けた俺達は屋敷に帰っていた。今居るのは部屋にある風呂場で、偶には背中でも流して労つてやる、と、水着姿のルーリアが入つて来たので俺も腰にタオルを巻いて言葉に甘える事にした。

今は反対に俺が背中を洗つてやりながらの会話中で、許可は取つてあるのでルーリアにも相談している。ルフエイから受けてた相談つてのは国宝でもある家宝の聖剣を持つて家出した兄の搜索。……最初は本人が探しに行くので家出する手伝いを頼まれたんだが、周りの使用人に悪いので止めといた。つたく、これだから箱入り娘は困るぜ。「まあ、スキヤンダルは隠したいだろうし教育係やら専属のメイドやらも大つぴらには罰しないだろうよ。あくまでも大つぴらにはな。……てか武者修行で家出つて時代錯

誤甚だしいな、おい。自分に自信があるって事なんだろうがよ……」

我が儘姫といい、ルフェイの兄のアーサーといい、自分のこうどうが周囲に及ぼす影響を考えちゃいねえ。巻き込まれる方は良い迷惑だと思いつつルーリアの背中を泡をシャワーで流してやる。しかし綺麗な肌しているな、此奴。

……好みか好みじゃないかと訊かれれば、間違いないルーリアは好みの見た目だ。ぶつちやけ餓鬼の頃に猫被つてた此奴にコロツと騙されていた口でもある。直ぐに剥がれた化けの皮の下を見て消え失せたけどな、そんな想いは。

「あら、私をジツと見つめてどうかしたかしら？　まさか欲情したの？　このまま押し倒されて滅茶苦茶になるのかと思うと怖い怖い」

「いや、無いから。仲間相手にんな事するかって以前にお前だぞ？」

本当に思う。ルーリアでなければ口説きたいと思うレベルの美女なんだがな、と。俺が溜め息を吐くと不満そうな顔をするルーリアは何を思ったのか向き直り俺の顎に手を添えて顔を近付ける。それこそ後少しでキスが出来る距離までだ。正直言って流石にドキドキ……は一切しねえ。だってルーリアだからな。

「ねえ、上級悪魔になったら縁談の話が舞い込むでしょうし形だけでも婚約してあげようかしら？　ふふふ、それ以上は期待しても駄目だけど。……まあ、アンタが私を上手

く口説けたら抱いてあげても良いわ」

「黙れ処女」

「……うっさい、童貞。このまま魅了して絞り尽くすわよ。こっちはアンタと違って知識は豊富なんだから」

「暈水練って言葉知ってるか?」

この後、睨み合った後で無言で風呂に入り、風呂から出た後で勝負した。俺の圧勝で、抵抗虚しくルーリアは悲鳴を上げてた。

……ゲームで。

「でさ、さっきの話だけど、よくよく考えたら別に良いんじゃない? 私も愛人にしたがる奴らが多くて鬱陶しいし。アンタも好きな相手が出来たら愛人でもすれば良いじゃん」

「いや、テメエは父親と確執がある訳でもねえじゃん。母親の想いが無駄になるからって関係ないってことにしてるけどよ」

……スラムには貴族に好き勝手された親を持つ奴が結構居るが、ルーリアは珍しい部

類だ。元々ある貴族の恋人だった母親だが、サキュバスの力で避妊するのを忘れてしまった僅か一夜でルーリアを妊娠しちまつたらしい。しかも相手には正式な縁談が持ち込まれて、愛してるからこそ身を引いた、そう聞いている。

だから母親を探しに来た父親の元に親子共々行かなかった。まあ、俺も此奴が居なくなつたら寂しいのだろう、と、思いつつ画面端に追い詰めたルーリアのキャラをボコリ続けた。これで五戦全勝。ハメ技の勝利だ。

「……あー。これを機に二人共正式に父親の家名をつてなりそうね。アンタの方は特に」

「だろ？ まあ、選択肢の一つに入れておこうぜ。お前の方は家を味方に付けられそうだし、根回しさえしとけば……」

一度戦つて倒したからかルーリアの親父さんには気に入られているっぽいし、説得の価値は有りそうだな。正式に当主になって権限を握つた後なら……。

「まあ、実際の所、庶子じゃなくて腹違いの妹として家に入るかつて言われたことも有るのよね。政略結婚とアンタ……達と離れるのが嫌で断つたけど、お祖母さんには会つてるし」

案外すんなり行きそうだと思つた所でコントローラーを置く。明日は皇帝との対談の日。……あの爺さんの遺品の写しを渡したが経過を聞かないとな。獲物は大物、引き

ずり落とすにも慎重にだ。……私怨で大勢を巻き込んだじゃいけねえよ。

「ふふふーん。よく寝てるわね。さて、今晚も搾り取らせて貰おうかしら。……あくまでも力を手に入れる為だからね」

一時間後、目を覚ますと何故かルーリアのブラがベッドに置きっぱなしだった。どんな悪戯だ？

僕の名はギヤスパー。最近まで封印されていた眷属悪魔の元半吸血鬼です。そんな僕は今……。

「きゃっ!? きゃあっ!? きゃああああああああっ!?」

悲鳴を上げる栗毛で水着みたいな格好の女の子に空中から電撃を浴びせ続けています。威力は怯む程度ですけど、無数の蝙蝠になつて絶え間なく一筋の電撃を放つ続けながら横の方を見れば沖田さんに肩を押さえられている祐斗先輩と泡を吹いて気絶中のイツセー先輩、その姿に顔を青ざめている彼女達の仲間の男の人。

あつ、朱乃さんが同類を見る目で僕を見ている。ち、違うんです。これは理由があつて。

「ギャー君、集中」

身動きを封じられて転がる青い髪の女の子の胸を潰すか形を崩れさせる為の様に執拗に踏みこむ小猫ちゃんが睨んでくる。……そんな胸が無いのを気にしてたんだ。

吸血鬼と悪魔祓い

町中を走りながら腕時計を見れば予定の時間には間に合いそうだと。僕はすれ違ふ人の視線を浴びる事に少し怯えながら約束の場所に辿り着いた。

「えつと……」

「ひいつ!」

「ご、ごめんなさーい!」

最近評判のオープンカフェの一角で悲鳴が上がり、まさかと思つて視線を向ければイツセー先輩のお友達の二人が女の人に追い払われて逃げていく。その女の人こそ約束の相手だったので、僕はビクビクしながらも近寄つて行つた。

紫の髪をボブカットにしたスレンダー系の美人。サングラスをした長い足の長身は女優か何かを思わせるけど、綺麗というよりは格好いいと感じる、女優は女優でも本格派アクション女優みたいな人。それがメドウさんへの印象だ。

「まったく、人の事を下心丸出しでナンパしやがって。これだから男つてのは……」

「あ、あの、メドウさん。お、お、お久しぶりです」

「……ん。へたれなのは相変わらずっぽいけど、元気そうで何よりじゃないか、ギヤス

パー」

ニカツと笑って顎でシャクリ向かいの席に座るように促した時に蛇を思わせる瞳が見える。僕と同じ魔眼系能力者で、制御方法を教えてくれた人だ。……メルギスさん曰く、権力的な意味以外で逆らわれない方が良い相手の一人で、僕もそう思います。気っ風が良い人ですが……怖いですから。

「……ああ？」

ひいひいひいひいひい!!? 心、読まれた!?

「あ、あの、本当に有り難うございました。お、お陰で何とか……」

「別に礼は良いさね。旦那に頼まれた仕事だし……結局はアンタの頑張りあつての事だ。つてか、本当に感謝してんなら堂々としな。それが前向いて歩けるようにしてくれた相手への礼儀つてもんだ」

「それでも、僕はお礼が言いたくて……」

冥界で害獣駆除を行うメドウさんは色々忙しい。矢つ張り軍隊じゃなく少数精鋭を主とした今の悪魔社会じゃ広い範囲に手が回らないし……彼女を眷属にしたいって

人を避ける為に動き回っているから。今日は偶々この町に来るって連絡を受けたから部長に無理言つて抜けさせては貰ったけど、矢つ張り勧誘を頼まれた。

「あ、あの……」

「前にも言つたが誰かの下に付くのは沢山だ。自分の生殺与奪は自分だけが握りたいし……例の変態ドラゴンが居るなら尚更だしね」

話を切り出す前に返事をする辺り、メルギスさんを通じて既に勧誘済み何だろうと察する。男嫌い……特にスケベな男の人が、な人だし、あのイツセー先輩が居るんじや絶望的だと僕も思いました。実際、噂を思い出したのか苦虫を噛み潰した顔になっていますし……。

「あーもう！ 終わりだ、終わり！ この話はお終い！ ほら、最近の話をしておくれよ。学校は楽しいかい？」

「は、はい。ちよつとクラスメイトの視線は怖いですけど……」

この人は確かに怖いけど、それでも優しい人だと改めて思う僕でした……。

「まあ、アレだ。人生色々あるし、時に優しさに甘えて自分を守ることしか出来なくなる

もんだけど、前向いて歩きやそれなりに楽しいもんさ」

そう言つて去つていくメドウさんだけど、町には何をしに来たのかな？ 一応部長が管理して……管理しているから害獣認定される魔獣や、はぐれ悪魔は……滅多に入つて来ない。アニメ版では三ヶ月間に二回も入られたとか僕は知らない。多分、あの人の事だから心配して来てくれたんだろうし、言及しない方が良いのかも、そう思いながら僕は学園へ向かつていました。

今日会う予定の悪魔祓いに少し不安を感じていた、そんな時だった。その人が話し掛けて来たのは。

「ああ、済まない。駒王学園への道を教えて貰えるかな？」

初老の西洋人の男の人。ガツチリとした体格で……只者じゃないって僕の中で警鐘が鳴り響く。思わず後退りをして逃げ出しそうになるけど、多分僕より強いなら逃げられない。停止させられるかどうか不明だ。ど、ど、ど、どうしよう……。

「……むう。別に危害を加える気はない。君はグレモリー家かシトリー家の眷属だろうか？ 私はヴァスコ・ストラダー。飛行機のエンジントラブルで到着が遅れたが、今日会う予定だった悪魔祓いの三人目だ。案内して貰えるかな？」

おっ!?

「……」

今回の決闘は青い髪のゼノヴィアさんがアーシア先輩に絡んで、イツセー先輩が食ってかかって、祐斗先輩が本格的に喧嘩を売って行われるらしい。それで何故二人が決闘に参加しないのかって言うと……。

「師匠！ 僕にやらせて下さい！」

「今の君に許可を出す気はありません」

祐斗先輩はこんな感じで沖田さんが止めて、イツセー先輩は最初はアーシア先輩の為に怒ってたのに決闘の準備が整う頃には水着みたいな格好に下心が刺激されて鼻の下を伸ばしてたからムカついたって小猫ちゃんが言いました。

……絶対メルギスさんの影響です。冷静なようで少し行動的すぎる所があるから、あの人の。

「お、おい、イリナ……」

「しっ！ 今は気にしないでおきましょう！」

青ざめた二人が視線を送るのはさつきから黙って腕を組んでいるヴァスコさん。同意の上だし、今のままじゃ禍根が残るから止めなかつたけど、明らかに二人を睨んで精神を削っています。

「と、取り敢えず行くわよ！」

開始の合図と共に栗毛のイリナさんが聖剣を刀に変えて来たので僕も無数の蝙蝠に変化して距離を取る。クロスボウやブーメランに変化しても対応できるように高く飛び、有刺鉄線の投網みたいにしても良いようにバラバラに分かれて、速射性と速度を重視した雷の魔力を打ち続けた。盾に変えても大丈夫な様に四方八方を囲んで攻撃を続けて何もさせない。

停止は聖剣のオーラで防がれるかも知れないし、集中のために立ち止まった所に突起物をつけた盾を構えて突進してくるかも知れないと思えば無理。先端が刺されれば身体の内部で形を変えて確実に殺されちゃう。……だから、何もさせない。

チラリと横を見れば小猫ちゃんは何時もの巨大な鉄球じゃなくて小振りな西瓜位の大きさの流星錘で戦っていた。縄じゃなくって極太のワイヤーだけ。

「……………えい」

投げられた錘をゼノヴィアさんは正面から切り落とそうとするけれど、軌道を変えて刃を避けたかと思うとUターンして振り下ろしている剣の峯に真上からぶつかつた。勢いが加算されて前のめりになつたゼノヴィアさんの腕にワイヤーが巻きついて……。

「……巨乳死ぬべし、慈悲はない」

そのまま一本釣りみたいになぜノヴィアさんを投げ飛ばす。さつき貧相な身体で挑発されてたから怒ってるんだ。こ、怖いよおおおおおとおつ!!

「ぐえっ!?!」

あつ、電撃が数発直撃してイリナさんが気絶しちゃつた。……全部が集中したお尻の布が破れちゃつたけど見ないでおこう……。

野良犬と教授

「ふはははははっ！ 矢張り我が輩は天才である！ 見よ、この究極の卵割り機を。一度に五個も割れる優れ物だぞ！」

本日は領地へ視察として訪れたのですが、妻子に家を追い出された教授が人を集めてガラクタを見せびらかしています。この人、天才的な発明をする反面、頭の捻子が外れていてゴミ同然の物を作るのですよ。今回も義理で集まった人達は説明の途中で帰ってませんが教授は気付いていません。

只高笑いをするだけで、物陰から一人娘のベンニーアさんが呆れた風に見詰めた後で此方に寄つて来ました。

《いやはや、糞親父にも困まるでやんす。メルギスの旦那、今日はお仕事でやんすか？

留学の件、どうなったか聞きたいんでやんすが……》

「ベンニーアさん、もう少しお待ち下さい。メルギス様は農園の視察に赴いた後、学園長との会食がありますので」

父親が冥府を追放された身とはいえ半死神である彼女は中々希望する学校の入学が叶わず、現在は通信教育で勉強中。……大体、中級悪魔からじゃないと教職に就けない

から学校自体が少ないのですよ。教育だけでなく、農業も畜産も水産も魔力でパッと解決して訳には行きません。戦闘に評価を置きすぎて各分野でマンパワーが深刻な不足です。

《……はっ!? 仕事モードのルーリアの姉御も素敵でやんす》

「ふふふふ。有り難う御座います」

ベンニーアさんですが、何故かルーリアに憧れています。仕事モードの彼女は美人で知的な大人の女性ですから騙されて口説こうとする方が多いのですが、本性を知っている身内からすれば失笑物なのです。それでも憧れる人は居て、目を輝かせているベンニーアさんの賞賛に口元に手を当てて笑うルーリア。

……この前私の部屋にブラを置きっぱなしにして、それをメイドに見された時はどうも気まずい思いをさせられましたけど、本当に有能なのですよね、彼女。

「むむむ? ベンニーアではないか。そうかそうか。尊敬する父の大発明を見に来たのであるな!」

《……》

後退した生え際に白衣にモノクルといったベタベタな学者姿の教授は笑う。呆れ果

てた娘の瞳に気付く事もなく……。あつ、教授はこの後で騒ぎを聞きつけた奥さんにしこたま殴られた後で何処かに連れて行かれました。スコップだの山中だの完全犯罪だの聞こえました。が気のせいです。

取り敢えず一言。教授の師匠って絶対に禄でもない存在ですね。

「留学と言えば……大丈夫でしょうか？」

農園に向かう道中、私は以前より話の上がっていた留学をする事になった桃花の心配をするのでした……。

「ええ、父の血が濃く出ていますけど私も母も日本出身では有りません」

私の身分はグレモリー家のメイド……。なのですが、今は駒王学園中等部のクラスで同じクラスになった人達の質問責めにあつて居ます。沖田さんのお供で来ただけの筈なのですが、どうしてこうなつたかと言つと……。

「転入ですか？ どうしてこの様な時期に……」

メイドの仕事があるからと文武を疎かにしたくない、そんな思いから空いた時間に修練や通信制の学校の課題をこなしている私ですが、旦那様から滞在先のホテルに連絡がありました。急遽留学をする事になりました。

「……リアスだが、貴族社会での立場がな」

言葉を濁す様子には私は少し考え込む。伝説の龍を引き込んだとはいえ、大勢を招待した上での婚約破棄までしたのでは流石に評価の下落を立て直すには至らず、更に今度の騒動を報告しなかった事は家臣団からも不満の声があがっていると聞かされて、監視役だと悟りませぬ。

「……異能者も通う学園の管理はシトリ一家も関わっている上に、此処で正式に誰かを送れば、実家からも評価されていないのか、リアスがそう判断されて政敵につけ込まれる。……頼めるか？」

「はっ！ お任せ下さい。あ、あの、私は名目上メルギスさんの部下でもありますし、部下の評価は上司の評価にも繋がりますよね？」

お嬢様の我が儘の後始末でメルギスさんの仕事が増えていますし、此処で彼の評価を上げれば恩返しにもなる。そう考えた私は短期留学生として中等部に入るのです。……がつ。

「む、難しい……」

数学は得意なのですが……国語はちよつと苦戦しそうです。いや、私の頭が悪い訳じゃ無いですよ？ お父さんは日本人でしたけど私は冥界育ちですし、仕方ないのですが……。

休校日にはメイドの仕事をする予定ですし、頑張りますよ。だってメルギスさんはもつと頑張つて居るのですから。ぶつちやけ過労死を心配されるレベルで！ あの人、ワーカーホリックだからなあ……。

「……そう。もう、私の何処が不満なのかしら？」

放課後、昨日頼まれたメドウさんへの口利きの失敗を伝えるとお嬢様は残念そうに肩を落とします。ギヤスパーさんが駄目でも付き合いがもつと長い私が勧めれば……と思つたのでしょうか。

「……申し訳有りません。色々とアピールしたのですが」

実際は、断りますよね？、からの、当たり前さ、でしたが、表面だけ申し訳無さそうにしておけば誤魔化せます。しかし、ギヤスパーさんも最大の理由である、好色な変態

と同僚になりたくない、とは言えなかったらしく……。

実際、お嬢様は公爵家の跡取りでお金持ちで他の悪魔に比べれば眷属に優しい……まあ、放任主義ですが自分で立ち直れると信じていると言えなくもないです。メドウさんは格好良い系の美人で害獣駆除の腕前でも有名ですから眷属にしたいのでしょうか。

正直、他の貴族が珍品を集める様に珍しい力の眷属を求めるのに対し、お嬢様は珍獣のペットを欲しがる様に眷属を求める、そう思えますがペットも家族の一員なら……。

「そう言えば貴女も結構強いよね？　どうかしら、私の眷属に……」

……うげ。思わず声が出そうになるのを堪えて顔に出ないようにする。悪人ではないですが領地の問題と悪魔社会全体の問題の区別が付かない人の眷属になるのは。ですが、相手は主の家のお嬢様。断るにも何か……そうだ！

「実はメルギスさんから昇進したら眷属になるかと誘われて居まして。長い付き合いですし……好きな方ですから嬉しくて」

「あら、それは残念ね。でも、気が変わったら何時でも言って。貴女なら歓迎するわ」

思わず口から出任せを言って難を逃れる。ごめんなさい、メルギスさん。love
じゃなくてlikeで好きなのは間違いないですが、小猫さんやギヤスパーさんに訓練

をつけた事で噂に上がってるロリコン疑惑が加速したらごめんさい！

旧校舎からの帰り、気絶した一誠さんと祐斗さんの襟首を掴んで引き摺っている小猫さんを見なかつた事にして沖田さんの休暇（という建て前の任務）中に拠点としているホテルに向かう最中、空気の流れを感じ咄嗟に屈んだ私の首があつた場所を刃が通り過ぎる。髪の毛が数本切られて宙を舞った。

そのまま振り返ると同時に抜刀した切り花で切りかかると僅かに後ろに下がられ当たらず、切っ先が相手に向いた瞬間に突きに切り替えるも刀の腹によって受け止められる。刃も柄も闇夜を思わせる黒で鏗無し、何より見ているだけで前進に刃が突き刺さつたかの様に感じさせる禍々しい呪気。……私は、あの刀を知っている。

「久し振りだな、桃花」

刀を持った男の顔を、声を知っている。幼い私と母の名を呼び、優しく頭を撫でてくれた男を知っている。二年前、メルギスさんが助けてくれなければ私を殺していた其奴を私は知っている。

「……………ふな。その……………」

ああ、会いたかった！ 抑え込もうとしても溢れ出る激情に切り花がカチカチと音を立てて警告するが抑えきれない。

「その声で、父さんの身体で、私の名を呼ぶな……魔喰いいいいいいいいいつ!!」

刃を鞘に納め、腰を落とすと同時に抜刀。剣術の中でも最も自信がある高速の居合い切りは上級悪魔にすら通用する。

…… فقط。

「少しは強くなったが……数年の努力で俺に届くと思ったのか？」

必死に探し求めた仇はそれ以上の居合いで私を切り裂く。先程まで抜いていた刀を何時納刀したのかさえ見切れず、私はその場に崩れ落ちた。体が熱くて痛い。

「じゃあ、死ね」

歯を食いしばって睨み付けた私の顔めがけて態と遅速に刃を迫らせながら楽しそうに笑う顔に悔しさしか感じない。母の想いの為にも生きると誓いながら何をやっていくのだと唇を噛みしめ血が流れ出た時、空にもう一つの太陽が現れた……。

サキュバスと苦手な物

ご機嫌よう、男共。超絶美女のルーリアよ。才色兼備な私だけど、この日はちよつとピンチに陥ったわ。

「チンジャオロース……肉増し増しピーマン抜きで」

「はいはい。チンジャオロース、ピーマン増し増しね。……子供の教育に悪いから我慢しなよ」

今日は休日のスカーがメルギスの領地でスラム出身の皆に料理を振る舞う日。美味しい物巡りとかの合間にやってるんだけど、私の目の前には苦手なピーマンが山盛りに盛られていた。メルギス？ 会食に行ってるわ。テーブルマナーとか大変ね。

「マ、マヨ……」

この絶望の皿もマヨネーズがあれば乗り切れる。でも、願いは虚しく、スカーは両手で×を作った。

「却下」

もう身内しか周囲に居ないんだから仕事中でも被っていた猫を脱ぎ捨てようとした

けれど、私の一生の願いはあえなく却下される。いやいや、大量のマヨネーズ無しにどうやってピーマンを食べろって言うのよ、苦いじゃない!?

「ぐぬぬぬっ! この人でなし!」

「悪魔だからね、君も僕も」

「ふはははは! ならば我が輩の発明した好き嫌い克服マシーンを……」

「いただきます……」

ぐっ! 仕方ないから食べてやるわよ。ったく、昔はメルギスもスカーも私の言いなりだったのに、本性ばれてから思うように行かなくなったわね。……に、苦い。

「遠慮しなくても大丈夫だぞ、ルーリアよ! この好き嫌い克服マ……」

「ガラクタは捨てておくわね」

「なんと!」

拘束具付きの椅子に料理を食べさせるアームといった無理矢理食べさせるの確定な好き嫌い克服マシーンは教授の奥さんの手で捨てられていく。私の目の前には減る様子のないピーマン。あゝあ。私の将来設計ってこんなんじや無かったんだけどな……。

『良いかしら? サキュバスに生まれたなら男共を手玉にとって面白おかしく暮らすのよー!』

惚れた男の為に伯爵家次期当主の愛人つて地位を捨てたお母さんは幼い私に何度も言い聞かせ、男の操り方を教えてくれた。まあ、化けの皮が剥がれちゃって身内には通用しないけど……。

男は操り誑かす対象……でも、支えたいって思ったんだから仕方ないじゃない。

「うふふふ。ルーリアちゃん、メルギスちゃんの事を考えているわね？ アレかしら？ 処女を捧げる気になったの？ そうよね、偽装とはいえ結婚するのだから。夢魔なら相手が経験済みかどうか分かるし……所でお姉さんも混じっちゃ駄目？ あの子、立派なの持ってたし、魔王クラスのを注いで貰ったらと思うと……」

「ルナ姉、ステイ。何処から湧いたのって言うか教育に悪い。子供が居るんだから」

突如現れて十八禁上等な事を言いながら色気を振りまくルナ姉。あつ、男共の何割かは前屈みになってる。って言うか子供が居るからピーマン食わされてるのに台無しじゃない。もう食べなくて良いわよね、ピーマン。え？ 駄目？

「あら、この程度なら大丈夫よ。私が性教育を担当しているもの」

「……明らかに人事ミスね」

スラムの子供の世話係の一人だったルナ姉。サキュバスとしての教育もして貰ったし、こうなりたいって小さい頃から憧れてたけど……この人が講師ってないわー。竹輪

に中身がある奴になれって言われるくらいないわー。

……あー、でもルナ姉の言うとおりね。結婚してて処女と童貞って新婚早々仮面夫婦だし、恋人設定だから……彼奴が求めてきたら抱いてやるか。本番行為は口や肌より力の吸収効率が遙かに上って教わったしね……。

「所であの子がロリコンって噂を耳にしたけど、30の時は幼い姿になった方が良いかしら？ 大丈夫。お姉さんが二人をリードしてあげるし、ちゃんとサキュバスの力で避妊はするから」

「いや、彼奴は絶対巨乳派よ」

隠している（つもり）の本は巨乳系ばかりだもの。あと、完全な露出よりランジェリー姿とかの際どいのが好きみたい。顔のタイプは私と共通点があるわね。……ふふん。仕方のない奴だわ。今度、下着姿でも見せてやろうかしら。

「ロリ巨乳？ 私、魔力で幼くなっても胸はある方だし……」

そもそも混ざって良いとは言っていないんだけど。この人、本当に性に奔放って言うかマイペースって言うか。桃花が聞いたら怒り出して暴れる案件ね……。

……あの方との関係について話が聞きたい？ まあ、良いでしょう。今でも思い出す……思い出したくない様な修行の日々をお話ししましょう。

「……魔力の修行の家庭教師？」

「ああ、何時までもゲームでも何もしない訳には行かないからな」

お父様から提案された話には私は紅茶のカップを持つ手を止める。怪訝な顔をした私の前に幾人かの候補のリストが差し出され、面倒ですが適当に選んでしまいましょう。耳にした事のある著名な講師が目につく中、最近少し興味を引かれた方の写真が目についた……。

この前のパーティで一番上のお兄様に高度な魔力制御……を使った力業で打ち勝った方。まあ、適当に教わった後は何か言つて家庭教師自体を無かつた事にして貰えば良いですしね……。

そして、初日。軽い顔合わせ程度と思つていたのですが……。

「あの、火の魔力の訓練の為に寒くて空気の薄い場所で訓練するとは聞きましたけど……限度があるのではっ!？」

もし此処が人間界ならば私はこう言ったでしょう。地球は青かった、と。そう、私は今、成層圏ギリギリの場所に連れて来られました。寒い！ 空気が薄い！ 魔力で作出した氷の足場の上で炎を作り出しますが普段より弱々しい炎しか作り出せない。こゝ、此処なら確かに良い訓練になりそうですが……。

「では、炎の生成に慣れた後はこの様に……」

先生が作り出したのは大きさがバラバラの炎の魔力の球体。それが太陽の周囲を廻る星々のように動いています。速度も角度もバラバラで一瞬のミスで接触しそうになるけれど何時までもぶつかからない。その数、凡そ二十。途轍もないコントロールです。

「取り敢えず三十個程を目標にしましょうか」

「無理ですわ。つて言うか先生だつて二十個じゃないですかっ!」

「大丈夫です。やって出来ない事は有りません。……ああ、それと」

文句を言った途端、先生の周囲に更なる魔力の球体が現れる。その数、目測で百。大

きさはビー玉程度ですが目で追うのがやつとの速度で複雑に動き回る。……この方を侮っていたようです。

「じゃあ、最初は軽く全力疾走しながら三個ほどで練習しましょう。持久力もついでに鍛えられます」

「軽く全力つて矛盾していませんこと!？」

この後、三十個を達成したと思つたら糸のように細く長くした魔力を針の穴に通しての裁縫も同時進行でする事になって……。

「……全く、無粋な方が居ますこと。小猫……さん? に相談があつて来てみれば」

空に浮かんだ直径十メートル程の炎を圧縮、超高温の拳サイズに変化させて飛ばす。小柄な少女に刀を向けている外道の手を貫通、瞬時に炭化させました。

「誰だっ!」

……余りにありふれた言葉に呆れながらも貴族らしく優雅に対応して差し上げま

しょう。スカートの両端を摘まみ、軽く頭を下げる。

「私は偉大なるメルギス先生の弟子にして誇り高き不死鳥の一族の令嬢……レイヴェル・フェニックスですわ」

猫と不死鳥

「小猫ちゃん、木場の為にイリナ達に接触しよう」

ギャー君がお尻丸出しにして倒した悪魔祓いのイリナさん、その相方で無駄乳のゼノヴィアさん、そしてヴァスコさんに交渉を持ちかけてエクスカリバーの破壊許可を貰おうと言いだしたイツセー先輩。隣のアジア先輩も昨日の様子のおかしかった姿が心配だそうで止める気が無いようです。

……仕方ないですね。このままじゃ絶対に無茶をするに決まって居ますから。身の回りの誰かが居なくなるのはもう嫌です。意を決した私は協力者として生徒会の匙先輩を勧誘しようとするイツセー先輩に待ったを掛けました。

「あの方が協力してくれたとしても、ソーナ会長の動向が分からない以上は誤魔化せず発覚する恐れがあります。だから、祐斗先輩を呼んで私達だけで行きましょう」

この件は発覚すれば部長達は必ず止めに入るでしょう。だからこそ極秘に接触を図る気らしいのです。

「でも、俺達だけで……」

「ギヤー君も誘います。ギヤー君も私もあの二人より強いですし、二人共切り札は使っていますから大丈夫です」

正確に言えば使えなかつたのですが、あの場では。ギヤー君は警戒しすぎて神器を使えなかつた上に大技は威力が高すぎて、私は近日届く手筈になっているから、ですけど。あの私闘の時に気絶していたイツセー先輩も私達と二人の戦いの様子を聞かされたからか実感が湧かない様子ながらも納得して祐斗先輩を呼び出す。少し待った頃、浮かない様子で現れました。

「……話ってなんだい？」

「木場！ 俺達も協力するからエクスカリバーを破壊しよう！ 何とか許可を貰って一本だけでもよ」

長年抱えていた憎悪の対象を前にして戦うことすら許されなかつた上に別の誰かに敗れた姿を見たせいか気力が感じられず、そんな姿に意を決した様子のイツセー先輩が説得に掛かります。単純故に真っ直ぐな言葉に心を動かされ始めた姿を見て私も口を開きます。

「……私は姉様に捨てられて一度一人になりました。もう、誰も周りから消えるのは嫌です……」

これは本心。だから顔も声も泣きそうになっているのが自分でも分かります。イツ

セー先輩が彼を心配して部長に極秘で悪魔祓いと接触するのを決めたように、私も祐斗先輩がこのままじゃ居なくなってしまうって感じたから縫り付くように肩に手を置いて……。

「……ごめんささい」

そのまま、胸ぐらを掴んで体勢を崩すと顎に一撃を加えて昏倒させる。直ぐ近くにいたイツセー先輩が驚いて言葉を失う中、同じ様に顎に戦車の力を加えた平手打ちを叩き込んで気絶させました。

「こ、小猫ちゃん？ どうして……？」

口を押さえながら動揺するアーシア先輩。気持ちには分かります。追い詰められた仲間を助けたい。そんな優しい気持ちで応援したい。私だって同じです。でも……。

「……エクスカリバーを奪って町に潜伏しているコカビエルは本当に危険なんです。聖剣で斬られて浄化されたら二度と会えないんです。覚えて置いてください。優しさは相手の意をくんで応援するだけじゃなく、想いを察して尚、邪魔してでも危険から遠ざ

ける、そんな優しさも有るって事を……」

私にとつて二人は大切な仲間です。だからこそ、恨まれてでも守ってみせる。そんな守り方も有るとメルギスさんから教わりました……。

「……分かりました。じゃ、じゃあ、二人を休ませる場所に連れて行きましょう」

アーシア先輩も聖女だった頃に危険から遠ざける為と軟禁に近い扱いを受けていたと聞きます。余計な知識を付けず都合のいい聖女であつて欲しいとの願いもあつたのでしようが守るために居場所を限定して護衛や見張りを付けていたのも事実。だから悲しそうにしながらも納得してくれました。

「二人共、ごめんなさい。存分に恨んで結構です。でも、その代わりに危ないことは絶対に……」

流石に二人を担ぐのは小柄な私では難しいので襟首を掴んで引き摺って旧校舎まで運ぶ。途中、桃花ちゃんが此方を見て直ぐに目を逸らしたのが気になりました……。

「……そう。良くやったわ。でも、私達に知らせるって手もあつたんじゃ……」

「あ、あの！ その場合、逃げる可能性もあつたんじゃないでしょうか。祐斗先輩の足で逃げられたら沖田さん位しか追えませんか……」

流石に手荒だったと遠回しに注意されるもギャー君のフォローが入る。気絶させた二人をどうしようか部長が悩む中、連絡を受けた沖田さんが直ぐにやってくると言つて来ました。最悪拘束でしょうか？ 祐斗先輩は特に精神状態に問題がありますが……それはちよつと嫌です。私も姉様の件の直後は拘束されて、ギャー君も引き籠もりが性にあつたとはいえ封印経験者。

少し判断を間違つたかと思つた時、ノックの音が扉から。沖田さんにしては少し早い気が……。

「ご機嫌よう、リアス様と眷属の皆さん。ちよつと失礼いたしますわ」

「貴女は……」

扉を開けて入ってきたのは沖田さんではなくライザー・フェニックスの僧侶にして妹、私が先日のゲームで足止めを言い訳にしてサボ……ライザーとの戦いに参加しなかつたレイヴェル・フェニックスでした。……あの時、こんな会話が有つたのを思い出しました。

「……足止めですか。ふうん。まあ、それは兎も角として……貴女もメルギス先生の教え子なのでしょう？」

私が部長への義理立てとメルギスさんの立場を考慮して残った事を見抜いた様子でしたが、驚いたのはそれ以外。まさかフェニックス家の人にまで指導を……いえ、婚約で結びつこうとしている仲ですから不思議ではないのでしょうか。

「先生から聞いていますの。レイヴェル様以外にもお嬢様の眷属二人の指導を任されています、とね。先生の愛弟子としては他の教え子に興味がありません……ふっ」

値踏みするような眼差しの後、鼻で笑われる。……おい、何処を見て笑った？ 取り敢えず第一印象は最悪だったと記憶しています。

……僕は自他ともに認める臆病者。メルギスさんは臆病は慎重さの現れって言うってくれるけど小猫ちゃんにはタレヴァンパイアって言うてる。そんな僕は今も怯えていた。

「お茶ですわ」

「あら、これはどうも。……警戒しなくても結構ですわ。私、婚約破棄は逆に助かったと思っっていますの。お兄様とリアス様では将来的に此方が頭を下げる問題に発展しかね

ませんでしたし。まあ、お兄様もあの年齢も出身もバラバラの大人数相手に修羅場になつていない部分は評価してくださいませね」

朱乃さんが少し警戒した様子でお茶を出すけれど彼女は優雅に笑うだけ。警戒する此方が間抜けに感じる様子に皆さん拍子抜け。で、でも小猫ちゃんは……。

「……それで何しに来たのですか?」

「あら、怖い。私は先生の愛弟子で、貴女達も先生の教え子。同門じゃ有りませんか。まあ、両家の合意での試合での結果にグレモリー家の眷属が異を唱えて暴れ、グレモリー家出身の魔王様が後押しをした。敵意を持つてると思われても仕方有りませんが貸しとして何時か回収させて頂く算段ですのでご安心を。……と言うより、本日は貸しが増えたとお伝えに来た迄ですわ。先程、グレモリー家の使用人の少女を助けましたの」

さつきから何か恨みでもあるのかレイヴエルさんを睨んでいる小猫ちゃん。特に自分を愛弟子って言った途端に発する空気が鋭くなった。嫉妬? もしかして身長がそれほど差がないのに胸周に差が……。僕は二人の胸に視線を向け、納得した。

「……後で腹パン」

ひいひいひいひいっ!? 僕にだけ聞こえるドスの利いた声が投げかけられる。だから何で心が読めるの。……って、グレモリー家の使用人の子を助けたっ!? 一体何が……。

「桃花が襲われたのね。あの子、メルギスの部下でもあるから後で知らせないと。それで犯人は？」

「……倒したけれど逃げられた、と言った所でしようか？ 下手人の中年男性の腕を焼き尽くした途端、魂が抜け出る様に無傷の少年が体から出て来て刀を持って逃げましたの。流石に怪我人が優先ですのでフェニックス領の病院に運びましたわ。……まったく、今日は小猫さんに用事があつて来ただけですのに」

「……私に？」

病院の住所が書かれたメモを部長に手渡しながら煩わしそうに呟くレイヴェルさん。名指しされた小猫ちゃんもキョトンとしていた。うん、本当に何の用だろう？

「……分かりました。部長、そういう事ですので……」

「……ええ、私が流石に表立って関わったら反発を受けそうですね。今度の指導の時にでも伝えてちょうだい」

イツセー先輩との戦いの後、ライザーさんはドラゴン恐怖症で引きこもりになったらしいです。三男でも仕事がありますし、世間体もあるのでどうにかしたいけどカウンセラーに伝手はない。だから顔の広いメルギスさんに頼りたいけど表立って頼れば先日の一件を不満に思っている人の反発を買う。……だから小猫ちゃんを通して頼もうと来たとか。

部長達は納得した様になっているけど、レイヴェルさんの行動力は凄いなあ。僕も少しは見習わなくちゃ。

「では、私はこれで。先生から送られてくる課題のリストをこなさなければなりませんので」

「……私とギャー君は呼び捨て。貴女は様付け。……愛弟子?」
「んなっ!」

最後まで優雅に振る舞っていたレイヴェルさんだけど、最後に小猫ちゃんが発した言葉に余裕が崩れる。部長、面白そうに見てますけどどうかして下さい。

「あらあら、ソーナも大変ね」

……うーん。あの二人のは恋愛なのかなあ? 僕にはよく分からないや。

氣絶したままのイツセー先輩達の扱いを決めようと話し合いが行われる中、最後の言葉で勝ち誇った表情になった小猫ちゃんが胸のことを忘れてくれたら良いと願っていました。

そして、その夜の事。悪魔の契約の仕事で契約者の下に飛んだ僕は安ホテルの一室に転移しました。窓からは隣の廃ビルが見えて……あれ？ 何か巨大な生き物が……。

気になった僕が視線を向けると月明かりがその姿を照らし出す。三頭を持つ巨大な犬の魔獣ケルベロス。冥府の入り口に生息する筈のその姿を視認した時、僕がいる部屋より上の階に向けて巨大な火球が吐き出された。

野良犬と魔王少女

「筋トレですか？ どうしてまた……いえ、先生の仰る事ですもの、従いますわ」

レイヴェル様の指導も進む中、私は上級悪魔であろうとも近接戦の必要が有ると思っ
ているので説得しようと思つて居たのですが、説得が困難だというのは杞憂だった様
子。一瞬迷うも直ぐに信じて従つて下さいました。キラキラと尊崇の念が籠もった瞳
を向けられたら此方も生半可な指導は出来ませんね。

最初は桃花やマーシー、小猫やギヤスパーの様に死んだ魚の目で讒言を呟く事もあつ
たのに逞しくなつたものです。……何故かルーリアには怒られました。

「超回復を」存じですか？ 過度の負担から時間を掛けて回復する際に筋肉が更に強靱
になる事ですが……フェニックスには不死の特性が有ります」

「……成る程。休息时间を置かずに超短時間で強化できるといふ訳ですね。そう言えば
それほど鍛えていないお兄様も逞しい肉体をしていましたわね」

「御明察で御座います。……では、限界が来てもこれを振り続けて下さい」

差し出したのは持ち手の付いた巨大な鉄塊としか表現できない無骨な物体。但し重
量は全くの別物。魔力を吸い取り重量を増す特殊金属。教授は製造に飽きたから名前

さえ付けずに放置していたのを奥さんが尻を蹴り飛ばして加工させたトレーニング器具。

「じゃあ、先ずは三十キロから。勿論他にも筋肉に合わせた器具を用意していますがこれが中心です。実戦訓練も同時進行しましょう」

「はい！ 愛弟子として期待に応えて見せますわ！」

張り切った顔で手を挙げて宣言するレイヴエル様。本当に私を信頼されている様子。今後とも良い付き合いをして私も期待に応えましょう。……しかし、彼女は少し似ていますね。当然といえば当然ですが。

「……よし。この後は書類のチェックをして……その前に例の仕事が有りましたか、畜生」

自分の管理する領地だけあって屋敷よりも心が安らぐのを感じつつ激務を進める。数年前まで逼迫していたお家事情を改善させた私と仲間達の手腕は対価を払ってでも引き入れる価値があると示す物。余計な口を出させない為に忙しいですが、文官を育てる為の機関からは嬉しい知らせが届いている。後数年、たった数年以内には使い物になる人材が増えて仕事が楽になると……。

正直、仲間の心配が心苦しかったのですよ。まあ、スラムには訳有って表舞台に出られなくなった有能な人材も多く集まっていますから運が良かった。さて、あと一踏ん張りど気合いを入れた私は今から向かう場所に相応しい姿に着替えるのでした……。

「やつほー！ こつち、こつちー！」

「……セラフオール様、お出迎えなど恐れ多い事で御座います。どうか身分にあつた行動を、と、進言する権利をお与え下されば幸いです……」

仕事としてやって来たのは貴族御用達……いや、正確には貴族以外お断りのホテル内の高級レストラン。とある密談の為に呼び出された私ですが、呼び出した相手である痛々しい格好が好きなきな馬鹿魔王と合流していた。……あーっ、駄目だ。どーも此奴相手に内心を取り繕う余裕がねえ。

入り口で受付に話を通して現れた馬鹿魔王は何時ものコスプレに仕事中心でしている餓鬼っぽい髪型ではなく、少し胸元を開いて足下にスリットを入れた紫のドレスと服装に合わせて結つた髪型だ。只、結局テンションがそのまんまなので滑稽だな。

「もー！ 相変わらず真面目なんだから。そんなんじゃ女の子に嫌われちゃうぞー？」

じゃあ、行こうか」

手を振りながら駆け寄ってくる馬鹿魔王は俺がお辞儀をしても気にせず、額を指先でつつくと強引に腕に抱きついて引つ張る。胸を押し当ててくるがルーリアの方が良い感触をしてんな。彼奴、今頃何やってんだか。一緒に飯食う約束だったのによ……。

「……さて、偶にはこんな夕ご飯も良いでしょ？ カップ麺にチーチクにタコわさにビールに焼酎、枝豆はスカーに頼んだし……酎ハイも買つとけば良かったわ」

「じゃあ、取り敢えず乾杯する？」

「あの、例の件……相手を殺さずに神器を抜き取る方法の運用についての話を先にすべきでは……」

通されたのは他に客が居ない個室。防音ガラスからは夜景が見え、馬鹿魔王はワインを注いだグラスを片手に持つて差し出してくる。いや、酒飲んで嫌な気分を誤魔化したって気持ちはあるが仕事が先だろ。つたく、んな事だから妹が襲われたら絶対に戦争

を起こす、なんて魔王の資質を疑う噂が流れるんだよ、ボケ。流される時点で為政者と
しちや落第だ。

「うーん、そだね！ メルギスちゃんの意見を聞きたいかな？」

いや、そもそも話をするのは良いとして、どうして相手がお前なんだよっ!!? 何時も
馴れ馴れしくしてくるサーゼクスはどうした、サーゼクスはっ！ 俺は叫びたいのを
グツと堪えると相変わらず緊張感に欠ける馬鹿魔王に意見を述べた。

「魔王様方や偉大なる貴族のお歴々の治世に異を唱える訳では御座いませんですが発表は時
期尚早かと。確かに神器持ちのはぐれ悪魔を無力化するのに使えるでしょうが……余
計な欲心を刺激される方が出ないとは限りません」

実際、教授が発見したこの方法を公に発表していないのはそれが理由なんだよ。お前
の眷属良い物持つてるな、ってな感じで立場が上の相手から平和的な話し合いによる譲
渡を求められたり、駒の制限を気にせずに戦力強化が出来るからって人間を狙う馬鹿が
出るだろうしな。んで、現状から考えて今の魔王じゃ止められねえ。

因みに抜き取る方法の人体実験は、俺を襲ってきた自己顕示欲と中二病の塊みたいな
奴でしたぜ。

「やつぱりねえ。メルギスちゃんもそう思うかあ。……暗くて難しい話はこれでお終い！ 楽しいディナーにしようか」

話を報告したから意見を聞きたいと言われて来たんだ、それは納得するよ。でも、テメエとの食事が楽しいわけねえだろ。一流の料理も酒も苦手な相手と一緒だと味がしない。何とか誤魔化し愛想笑いを続ける中、馬鹿魔王はガブガブ酒を飲んで行く。よし、さっさと酔いつぶれる。待機してる部下に任せて俺は帰る。

……だが、どれほど飲んでも潰れる気配がない馬鹿魔王は食事が終わって店を出ようとした時、俺の腕に抱きつきながら耳元で囁いた。

「ねえ、部屋を取ってるんだけど……」

「そうですか。では、何方か配下の方にご同行を願いますよう。私如きが結婚前のご婦人の部屋にお邪魔してあらぬ疑いをかけられてはなりませんので」

取り敢えず当たり障りのない言葉で逃げるが腕に抱きつく力が強くなり、谷間で腕を挟まれる。馬鹿魔王は艶っぽい瞳を向けてきた。

「ぶー！ 分かってないなあ。……えつとね。権威つてのは服の上から着るものだよ？

権威の欠片もない私の姿に興味ない？」

普段から権威を脱ぎ捨て痛々しい格好をしてる奴が言うな！　ってか、俺でも分かってるっての。いやいやいやっ!?　いくら男日照りが長いからって無いだろ、普通っ!?　……テメエ抱くくらいならルーリア口説いて童貞捨てるわっ!

「……」自愛下さい。どの様な状況でも魔王は魔王です。伝統有る称号を野良犬同然の私への冗談で汚さぬ様にお願いたします。……おや、失礼。緊急時の連絡で御座います」

取り敢えず全力で逃げるためにどうしようか頭を働かせていると着信音が鳴る。緊急の知らせだからと許可を取って出ると焦った声のギヤスパークからだった。

「た、大変です!　街中に魔獣が出た上に学園でエクスカリバーの融合を行うって。その上……コカビエルが町に居ないんです!」

劍士と疑問

「つ、疲れたあー」

郊外の安ホテルの一室で相棒であるイリナがベッドに倒れ込む。古くなったスプリングがギシギシと音を立てて耳障りだった。この分じや肉体の疲れは取れそうにないな。……精神の方は言うに及ばずだ。何せ同行者があのヴァスコ卿なのだからな。

本来、今回の任務はイリナと私だけで行はずだったのだが先日の任務で生じた仮面の悪魔との戦い、見逃される結果に終わったそれを理由に私達の力を疑問視する声があり、誰かもう一人を、となった時に昔コカビエルと戦った経験があるヴァスコ卿が名乗りを上げたんだ。緊張はしたが名高い悪魔祓いに力を証明するよい機会だと張り切ったのだが、先に到着した私達だけで行つた交渉の際に生じた私闘で敗北してしまい……。

『君達なりに考えが有つての結果だろうが……時と場合を考えなさい』

あの私闘について経緯を聞いたヴァスコ卿は静かにそう言った。主に力を与えられて聖女と称えられながら悪魔を癒し、今は悪魔となって主から与えられた力を悪魔のた

めに使うアーシア・アルジェントが信仰心を残しているのなら、これ以上主を裏切る前に天に召した方が幸せだろうと思つたまでだ。

正直、悪魔退治に命を張っている身として苛立ちがあつたのは認めるが、間違つた事は言つていない。悪魔を癒せる力だつたとしても、それを悪魔に使うのは別の話。なら、戦闘系の力を得た者は人を傷付けて良いのかという事になるだろう？　だが、大物を相手にする任務中に余計な敵を作るのは慎むべきであつた。何が優先されるのか、それを忘れてはならないのだから。

「……寝るか」

暫し物思いに更けていると隣のベッドに寝ころんだイリナが寝息を立てる。此奴は此奴で幼なじみが悪魔になつていたり、大勢にケツを晒したりと精神的に私以上にすりへつたのだろう。……久し振りの故郷に浮かれてヴァスコ卿に叱られたのも有つただろうが。

「……うん？」

下の階層から妙な気配を感じ、悪魔を誰かが召喚したのだと辺りを付ける。世も末な話だが、不干渉となつているので少々無視を決め込んだ。つたく、これが別の時なら乗り込んでゐるぞ。

ベッドに寝転がり布団を被ろうとした所で窓が目に入る。目の前の廃ビルとの間に

ある街灯の明かりが存外眩しいとカーテンを閉めに億劫ながらも立ち上がった時に薄い壁越しにヴァスコ卿の声が響いた。

「敵襲だっ！」

一体何処からと廊下に意識を向けるも気配はせず、窓の外に目を向けた時に理解する。ケルベロス、上級悪魔でも用意に倒せない魔獣が廃ビルから此方に火球を吐き出すうとしていた。イリナは寝ぼけているのかボケツとしていて上半身を起こしただけの状態だ。その襟首を掴んで退避しようとした時、向かっていた火の玉が停まった。

「ま、待て！ 部長が管理する町で暴れるなら、メ、メルギスさんの教え子の僕がだ、黙ってないぞ！」

下からの声に窓から見下ろせばイリナの尻をさらけ出したあの少年が震えながら啖呵を切っている。その姿に思わず私は眩いた。

「……………なんでメイド服なんだ？」

「……何だろ？」

月が暗雲に隠されて闇夜が覆つても悪魔の目には明るく見える。部長の命令で僕はイツセー君と一緒に暫くの間はギヤスパー君が封印されていた教室で謹慎を言い渡されたんだ。小猫ちゃんは何度も謝りながら僕達に危ない目にあつて欲しくないつて訴えて、師匠も厳しい言葉じゃなくて心配する言葉を投げ掛けてきた。

どの位皆に心配をかけていたのかを自覚したけど、やっぱり心の奥の憎悪は消えそうにない。巻き込んでしまったイツセー君は部長のおっぱいが恋しいつて泣いていたけど今は大人しく眠っていた。僕も物思いにふけていたんだけど校庭の方で何やら異変を感じて窓から外を眺める。生憎この教室からは何も見えなかつたけど、何か起きているのは間違いないみたいだ。ちよつと気になるな。でも、部長の許可が下りない限りは学校に行く以外は旧校舎から出られない。

「おや、こんな所に悪魔が居たか」

突如声が聞こえて真上に視線を向けると墮天使の男と視線が重なる。背中の方は……六枚!? 此奴、上級墮天使だつ! 僕は咄嗟に魔剣を創り出して構える。次の瞬間、窓を突き破つて飛び込んできた光の槍が激突した事で魔剣が砕け散る。光の槍は軌道がずれこそすれ無事な状態で床に突き刺さつた。

「イツセー君！」

「おっぱいが一組、おっぱいが二組、おっぱいが……うおっ!? な、なんだっ!?!」
「敵襲だよっ!」

最低の寝言だなあと、思いつつ僕は墮天使に向き直る。……ちよつと厳しいかな? イツセー君が本領を發揮する迄の時間をどうやって稼ごうかと思つた時、上空から風が落ちてきた。

「ぐあっ!?!」

いや、自分でも何を言っているのか分からないけど、兎に角猛烈な突風が上空から真下に向かつて吹き続け、地面に叩きつけられた墮天使を押さえ込んでいる。い、一体誰が……。

「あらあら、牽制のつもりで放つた軽い微風でしたのに情け無い。私、これ以上の風を負荷に使つて筋トレをしていましてよ?」

彼女は墮天使を見下ろしながら歩いてくる。金色の髪は曇り空だというのに月明かりに照らされているみたいに輝き、物腰は優雅そのもの。……あれ? 今、筋トレって言つた?

「さて、本来ならば下郎に名乗る名は持ち合わせていませんが本日は特別に名乗って差し上げましょう。私はレイヴェル・フェニックス。冥土の土産に覚えて置きなさい」

両手にスイーツが詰まった色々なコンビニの袋を下げたジャージ姿のレイヴェルさんは優雅に名乗りを上げた。

「レイヴェルさん、一体どうして此処につ!？」

「駅前の二十四時間営業のジムに行った帰りにスイーツをと思ひまして。ほら、筋トレ関連の器具は冥界よりこっちの方が進んでいるでしょう? 悪魔の肉体に合わせた物を特注するにあたって色々と体験しておきませんと。帰り道にスイーツを買い込んでいたのですが学園が騒がしかったので覗いてみたら……」

……うん。もっともな意見なんだけど彼女ってお嬢様だよ、伯爵家の……。メルギスさん、どんな指導をしたんだろう? 上級墮天使を張り付けにし続ける風の魔力に驚くべきか、それ以上の物を負荷にしていることを驚くべきか、どっちだろうか……。

野良犬の教え子達

……突然ですが私には目標があります。今日決めました。

「小猫さん、貴女の目標は？ 私は最強の女悪魔が選ばれる魔王レヴィアタンになる事ですわ。……あら？ まさかメルギス先生の弟子ともあろう者が目標の一つも決めて居ないので？ おーっほっほっほっ！」

「……五月蠅い、焼き鳥姫。目標なんて他人に語るものじゃないです」
「何ですってっ!?! この丸太体型!」

……こんな会話がありましたけど、影響なんてされていません。悔しいから急遽決めたとかじゃなくって、前々からの悩み事に関係することです。

……あの胸は絶対にもいでやりますが、先ずは別の目標を。……昔の日本では貧乳の方が持て囃されましたし、着物だつて小さな方が映えるんです。私は日本出身だから胸が小さくても問題ないです。

SS級はぐれ悪魔『黒歌』、仙術使いであった姉様を一對一で倒す。捕まえるとか、殺すとかではなく、超える。何時までも仙術が怖いと逃げるんじゃないで、仙術なんて私

には不要だと証明する。土台は作った。後は基礎と実戦経験を積み上げるのみです。

「はい！ 其処でポーズお願い！」

「……」

今は悪魔稼業中。堕天使が侵入しているようが自粛しているようでは契約者の信用を失い、屈したと内外に思われる結果になるでしょう。……それは非常に困ります。今回のようなコスプレ撮影会の報酬や評価がどれ程の物になるのかとも思いますが。

『進退は疑う無かれ、行動してから考えるなど言いますが……何も考えずに行動するのは問題です』

私のはぐれ悪魔の妹という事で殺されそうになった様に悪魔社会は人権概念が希薄で、公爵家の眷属であろうとも上層部の私への信用は薄いでしょう。姉様を倒したとして逃げられた時に繋がりを疑われたら面倒です。だからコツコツ評価を稼ごうと、メルギスさんの言葉を思い出しながらポーズを取りました。

今回の依頼主は前髪をオールバックにした金髪巨乳のお姉さん。名はガラティミア

さん。胸が大きい以外は問題の無い、寧ろ高価そうなお茶菓子とか出してくれる上に支払いの良いお客さんです。……いや、でした。

「……はあ。もう遊びは十分ね」

カメラを放り捨てたガラティミアさん、いえ、ガラティミアの手に光の玉が出現し私に向かつて放たれる。咄嗟に身を翻した私は窓を蹴破つて外に飛び出るなり籠手を装着、同時に鎖付き鉄球を異空間から取り出すと向かつて来る光の槍を弾き飛ばしました。鎖を持つ手に痺れが走りましたし、かなり強いですね。

「……一つ聞かせて。貴女、何時から不審に思ってたの？」

「目が笑っていませんでしたから。……そう言った人の観察方法を学んでいるので丸分かりです」

背中にも六枚の黒い羽を出しながらガラティミアが出てくる。上級墮天使とか面倒です。すね……。

「コカビエル様配下で上級墮天使のガラティミアと申します。まあ、どうせ死ぬのですから覚えて置かなくても十分……」

敵の目の前で名乗りを上げたので遠慮無く鎖を振り回し、今度は回転を加えた鉄球を放たせて貫きます。ガラティミアも予想していたのか光の槍を振るいますが……私は籠手に意識を集中させていた。

光の槍はガラスのように砕け散り勢いを衰えずに突き進む鉄球はガラティミアの槍を振り抜いたままの腕に激突、腕の骨を砕いて身体に衝突すると紙細工みたいにはね飛ばしました。

「な……何よ、その鉄球。神器かし……ら……」

「……手の内を敵に話す馬鹿になった覚えは有りません」

急に威力が増したので鉄球の力と想了想らしいですが違います。正確には籠手……改造神器『龍ツイン・クリティカルの双爪』の能力。龍の手は一定時間使用者の力を倍にしますが、これは二個一対。当然四倍になるんです……籠手の鉤爪と手にした武器の性能も含めて。

「……さて、連れて行きましょう」

……相手が油断してなければ対空性能の低い私では苦戦していたでしょうから正直助かりました。教会側との不干渉の取り決めも向こうから襲ってきたのだから問題ないでしょうし……お茶菓子でも食べて部長を呼んで待ちましょう。騒ぎになっちゃいましたからどうにかしないと。

戦闘による被害や物音を聞きつけた周辺住民の対応を丸投げすべく私は部長に連絡

を取るのです……。。

「それで小猫を狙った理由は何かしら？」

あの後、急遽駆け付けた部長はガラティミアを連行、部室で取り調べを開始しました。肋骨と右腕の粉碎骨折、臓器にも多大なダメージを受けていたので最低限の治療を施して拘束した上での尋問。正直言って素直に話すとは思っていませんでした……。。

「戦争よ、戦争。コカビエル様の望む通りに戦争を起こしたいの。流石に上級墮天使が何人も動いたら他の幹部に目を付けられて初動で邪魔されるからって本部で待機していたのだけど……。メルギスとやら以外にも邪魔になりそうなのが来たから町を任せられたの。事前に潜り込んでいた私を含めてね」

意外な程に素直に話すガラティミア。……。いえ、問題はそれ以外。彼女の言葉からして他に……。

「朱乃、ギャスパーを呼び戻すわ！ 私は魔王様に連絡する！」

コカビエルの目的が予想を超えて危険であり、当然と言えば当然なのですが幹部であるコカビエルが動かせる実力者が他に侵入している事、何よりもコカビエルが町以外の

場所で其れこそ戦争に発展する程の何かを行おうと気が付いた部長は慌てて指示を飛ばす。流石に縄張りの問題で片付けて良いレベルの問題ではないと焦りを見せた部長の顔が更に歪む。校庭から強大な聖なる力が、祐斗先輩達が謹慎中の教室から窓が割れる音がして、続くように魔力を感じ取る。

「あら、もう行動に出たのね。皆、働き者ね……はいっ!? ヘリオールっ!」

余裕綽々と笑うガラティミアは睨み付ける部長を鼻で笑いながら視線を窓に向け、何かに吹き飛ばされたのかグチャグチャに潰れた身体から血を流しながら飛んでいく金髪のソフトモヒカンの墮天使を見て間拔けな声を上げます。次の瞬間、ヘリオールと呼ばれた墮天使が爆発しました。

「ご機嫌よう、リアス様と眷属の皆さん。異変を感じたので介入させて頂きましたわ」

窓から顔を出せばジャージ姿のレイヴエルが此方を見ている。空中に……いえ、風の魔力で創り出した足場に立った彼女の手には巨大なハンマーをフルスイングした格好をしています。黄金色の柄が赤い水晶を思わせる無骨な塊に取り付けられたその武器からは並々ならぬ力を感じ取りました。

「……それ、何ですか?」

「ふふふ、これですの？　メルギス先生が愛弟子である私に下さった改造神器（リアント・ハンマー）『巨人の悪鎧』ですわ。……三トン程有るので地面に立つと足が刺さりますが、こうして風に乗れば足腰の力も十全に乗せられますの」

「……脳筋」

「何ですつてつ?!　もう一度言つてご覧なさいっ?!」

「分かった、脳筋。……言つておくけど私も別の物を貰っています」

事ある毎に愛弟子を連呼するのがウザかった、他に理由は有りません……。

「中々良い度胸だが足が震えておるぞ小娘。……その服装は趣味か？　魔王の妻もそう
いった遊びに興じていると聞いたが……」

どどど、どうしよう!?!　最近自信が付いたからってケルベロスに啖呵を切った僕だけ
ど、それに反応するみたいに奥からゾロゾロとケルベロスやワイバーン、グリフォンが
出てくる。その上、禿頭に多くの古傷を持つ老人の墮天使まで現れた。背中の羽は……
八枚っ!?!　咄嗟に集中して時間停止を発動するけど阻まれた。このお爺さん、絶対強
いっ!

……この服は契約者のお願いで撮影会やってたんです、可愛いとは思いますが、僕まで公開メイドプレイやってるみたいに言わないで下さいっ!?

「少年よ、あの様な申し出をした立場で恥を知らぬ様だが……此処は手を組もう」

「は、はい!」

ヴァスコさんは窓から身を乗り出すと聖剣を構える。確かにこの状況じゃ不干渉がどうかか言っている場合じゃない。

「はははははっ! 年をとって耄碌したか、ストラーダっ! 小娘と小僧を間違えるとはな」

「……うむ」

「さて、二つ良いことを教えてやろう。コカビエル様は既に別の場所に居る。流石に面倒な敵が多いのでな。遊びを捨てさせて貰ったぞ。そして悪魔の拠点である学園ではエクスカリバーの融合が行われる。融合の魔法陣が発動すれば町は崩壊するであろう」

その言葉に僕達の間で戦慄が走る。そして墮天使は羽を広げて飛び上がった。

「さて、私も役目を果たすでしょう。我が名はゴルディア! 町を守りたくばこの首を取ってみよ!」

叫びと共に魔獣が散らばってゴルディアは光の剣を手に向かって来る。それを迎撃するストラダーダさん。僕がする事は……。

『……そうですか。では、お任せします』

僕が選んだのはメルギスさんへの連絡。こんな時こそ強い人に任せるべきだと思っただけ……僕は今まで何をやってただっ！　こんな時の為に鍛えたのに、逃げていたら意味が無いじゃないか！

頬を両手で挟むように叩き気合いを入れると上空へと飛び上がる。空を飛べる魔獣が襲いかかって来るけど其れを置き去りにする速度で上を目指した。

「僕が此奴等を相手にします！」

「……分かった！　イリナ、他の客を逃がしたらお前は町の避難誘導をつ！　私は日本語が分からんから学園に向かう！」

「……………うん、僕になら出来るっ！」

風が吹きすさぶ上空、向かって来る鳥型の魔獣やケルベロスを見下ろしながら最大まで高めた魔力を放つ……………寸前で停止させる。更に最大まで高めて停止。更に、更に！コントロール出来る最大数まで宙に浮かべた魔力、それを動かすと同時に蝙蝠になって散らばると全方向に視線を向けてロックオン。拡散した魔力を打ち出した。

「クワトロ・フルバーストツ!!」

最大限の一撃×4は全ての魔獣を撃退する。よし！もう僕は引きこもりの臆病者じゃない。一人前の男だっ！

「……コカビエルの捜索に向かわなければならぬというのに。家出小僧の遊び相手をしている時間など無いのですが？」

「おやおや、これは手厳しい。ですが私としては貴方を試したいのですよ」

野良犬とストレスマツハ

ガクリと肩を落とし、肺の中の空気を全て吐き出すような深い深い溜め息を吐いた。「……疲れた、休みたい、領地の温泉宿の一番良い部屋に泊まって温泉入った後はマツサージを受けて昼寝して。ルーリアでも誘うか？ いや、絶対からかって来るから歓楽街からルナ姉でも呼んで思い切って……あーあーあーあーあつ！ 現実逃避終了！」

体の芯に貯まった疲労が一気にこみ上げて来た私はブツブツと呟いた後で周囲に視線を向ける。一気にストレスを爆発させた原因はもう近くに居ない。それだけで安心した私は気合いを入れ直す。しかし、本当にアレはない……。

「ええっ！ 墮天使がそんな事をつ!? よーし！ こうなつたら……」

ギヤスパーからの連絡内容を馬鹿魔王に伝えると徐に気合いを入れ出す。おっ！ 流石は外交担当、何やら考えがあるみてえだな。まあ、普段の碌でもない言動は問題だけど、有事の時は頼もしく感じるぜ。俺はこの瞬間、馬鹿魔王……いや、魔王レヴィアタンを見直した。……まあ、口調がそのままなのは……。

「私自ら墮天使領へ突撃して戦争の開始だよっ！ 纏めて氷付けにしちゃうんだからっ！ ソーナちゃんは絶対に傷付けさせないわっ！」

「セラフォル様、緊急事態にご冗談が過ぎるか。お立場をお考え下さい」

……前言撤回！ 周囲に俺しか居ないにしても外交担当でもある国のトップの一角が口にして良い事じゃねえだろ、マジで。そーいうのが広まったら内外の過激派を刺激すんだから考えろボケっ！ こういった時に大事に至らないようにするのがテメーの役目だっつーのに、妹を理由に戦争起こすとか間違つても口にすんな、だぼ鯨がっ！

絶対に冗談であると思つたっか思いたい俺は静かに窘めたんだが、大馬鹿魔王は気合を入れて魔力を高めた状態で俺の言葉に首を傾げた。

「え？ 本気だよ？」

「……私は冷静ですので冗談で緊張を解す必要は御座いません。どうかお立場に相応しい行動を切に願います。このような時こそ貴女様の手腕に我々は期待するのですから」
「ふんふん。メルギスちゃんは私に期待してくれているんだね？ よーし！ じゃあ頑張っちゃうー！ 今すぐ皆と会議だよ」

「……私如きの言葉をお聞き届け下さり恐悦至極、感謝致します」

再度窘めれば促した通りに外交官として動く気合を入れる。冗談だったな、絶対。

口にするだけで民主主義国ならマスコミのバッシングで退任に追い込まれるレベルの不適切な発言だったが俺が黙ってりやセーフだ。この大馬鹿でも完全に上層部が手綱を操れる訳でも無いし、完全な傀儡になるよりはマシだ……多分。

他の魔王や外交の部下との協議のために転移しようとする馬鹿魔王。俺もグレモリー家に戻ろうとしたんだが、頬に柔らかい物が触れる。馬鹿魔王にキスされてた……は？

「今日は楽しかったよ、またデートしようね」

俺が固まる中、何を勘違いしたのか笑って手を振りながら消えていく馬鹿魔王。……数秒後、我に返った俺はこみ上げてきたストレスによって冒頭の状態に陥った……。

俺、悪くないよな？ 仮にも国のトップがアレなんだぜ……？

「さて、旦那様に連絡を……いや、確か今日は」

早速戻って公爵家としてお嬢様への支援や冥界での行動の指針を話し合おうと思つた所で本日の予定を思い出す確か親交のある貴族との交友会との名目で飲み明かす予

定でした。奥様も別の用事で出掛けますし、連絡を入れたら私は自分の領地で指示を出しましょう。

……戦争を起こす気のコカビエルが居ないのなら十中八九悪魔領か別の町で事を起こすでしょう。病院が貴族の屋敷か、戦争に至らざるを得ない規模の被害を出す気だろうと焦った私の前を遮る様に空間を切り裂いて一人の青年が現れる。初対面ですが知っている顔でした。

眼鏡を掛けた冷静そうな育ちの良さを伺わせる青年。手にしているのは最強の聖剣コールブランド。国宝であり、彼の家の家宝でもあるそれは家出した時に持ち出したそうです。

……取り合えず一言。さっさと家に帰って親に謝りなさい。

「冷たいですね。私としてはヘラクレスを倒した貴方の力を是非試したいのですよ。実家にいた時からルフエイから話を聞かされて興味を持っていましたしね」

「……ヘラクレス？ ああ、この前襲ってきた中二病ですか。まさかと思いますが仲間ではないですよね？」

「リーダーである曹操に従う気はありませんが同じ派閥には所属しています。力試しが

気に入らないなら敵討ちでどうでしょうか？」

……駄目だ、この馬鹿。思っていたよりも拙い……。

自分の……いや、自分と自分の周囲の奴の状況が分かっちゃいないのか平然と剣を向けてくるアーサー。聖なるオーラが迸る刀身の切っ先を掴むと聖なるオーラは粒子になって俺に吸い込まれていく。一瞬気が動転したアーサーの足を払い剣を投げ飛ばすと見下ろしながら口を開いた。

「貴方、ルフエイさんとは仲の良い兄妹だったようですが、可愛い妹の結婚相手は素行不良のドラ息子と親子ほど離れた中年男性、このどちらが良いと思いますか？」

「……何を馬鹿な。あの子にはちゃんとした相手が相応しいですよ」

どうやら俺が言いたいことが伝わっちゃいないようだ。このままじゃそうなるって教えてやってるのに。俺の言葉に怪訝そうな表情を浮かべる世間知らずの馬鹿に教えてやるか……。

「ヘラクレスは一部しか自白してはいませんが、貴方が幹部として所属するテロ組織は誘拐や洗脳を行い、目標として掲げるグレートレッドは倒せば世界に甚大な被害が出る可能性が否定できない。……さて、客観的に考えて貴方は悪事と無関係と判断され、家

も没落の可能性すらない、等と思うんなら此処で死んでおきなさい」

ルフェイには悪いがこの馬鹿魔王以上に馬鹿な奴は事態が露見する前に死んだ方が良いかも知れない。契約者の兄貴がテロリストってのは俺も拙いし、何より家族や使用人がどうなる事やら。だが、その程度は思いつく程度の頭があつたのか明らかに焦っている。

……ルフェイから可能性として提示された家出の理由の二個目、恋愛関係にあるメイドが追い出されないように、っていう家出までなら兎も角テロリストになっちゃ余計に拙い理由は正解みたいだ。

後継ぎがテロリストになつて没落した家を建て直すには政略結婚だろうが、マトモな相手が居るなら普通はそっちを選ぶ。つまりはマトモな相手が見つからない馬鹿息子だの位しか候補がないし、使用人、特に身近なのは真つ先に追い出されて路頭に迷う。余計な傷が経歴に付いた状態だな……。

「私は今後どうすれば……」

「さあ？ 精々が正義心から潜入していた、そんな言い訳が通して貰えるほどの手土産を持つて投降しては？ もっともヘラクレスが捕らわれていますから生半可な情報は意味がないですけど」

馬鹿が勝手に自爆するのは構わねえが巻き込まれるのは沢山だ。俺は案を提示して

アーサーは其れを受け入れた。たつく、ちよつとヒント出したら思い当たる頭があるなら考えて動けつての。恋人も何処かに匿うなりあるだろ……。

あー、駄目だ。マジでこんな馬鹿の相手してたら地の文で本性が出ちまうよ……。

「アレがサーゼクスの家か……」

多くの仲間を失った。その結果、勝つたならば諸手をあげて喜ぼう。共倒れならば仕方ない。仮に負けたとしても弱かったのだと諦めよう。……だが、あの戦争の結末はどれでもない。ドラゴンの喧嘩に巻き込まれた、そんな三流喜劇の内容によつて有耶無耶のままに集結し、仲間の無念など忘れたかのように平和ぼけした同胞達。

だからこそ俺様が、このコカビエルが戦争を再び起こすのだ！ 最初は遊びを交える積もりであつたがヴァスコの姿を見て気が変わり、各地に待機させていた志を同じくする者達を集結させた。

そして今、俺はサーゼクスの実家が見える場所に来ている。使用人を、親を、息子を

灼熱が俺の顔の左側を焼き、炎に押し込まれ地面へと激突する。無理やり炎を振り払うも直撃した左目が見えず、触れた手の感触が重度の熱傷を悟らせた。そして、追い討ちとして降り注ぐ魔力の雨。炎、雷、風の刃、殺意と威力を十分に込めた猛攻を羽と腕で防ぎ、先程のようにかき消される事を承知で今度は特大の光の槍を放つ。当然かき消されたが……女の魔力も止まった。

「……成る程な」

種は分らんが弱点の予測は付いた。なら、どうとでもなる。さあ！ 存分に殺し合おうじゃないか!!

サキユバスとコカビエル

「ふはははは！ 我が輩の最高で最強な知能が新たな術を生み出した！ 名付けてデスイーターである！」

私が幼くスラムで暮らしていた頃、冥府を追放されて流れ着いた教授は今も昔も変な物を創り出していた。この時も私やメルギス……もうこの世に居ない奴らも含めた子供を呼びだして術式を披露する。誰も期待していない目をしてたわ。教授は気が付いてなかったけどね。

「んで、どんな物なんだ、教授？」

放置しても聞かされるので皆がさっさと聞いて遊びに行こうと役目を押しつけ有った結果、メルギスが訊ねると教授は更に調子に乗っていた。いや、本当に幸せな人だと思おうわ。てか、死神デスが作った術が死を食イーターらうって……。

「聞きたいか、そうであろうそうであろう！ なんとこれを背中に刻むことにより、本来死をもたらす筈の弱点となる力を貯蔵、必要に応じて全解放で己の力に上乘せ出来る上に、一定上溜め込む事で力が上がるのだよ。ふふん！ どうかね、素晴らしいであろう！」

まあ、子供だけ呼んだ理由は刻めるのは一定以下の年齢って事だったけどね。……刻む途中で複雑な術式を間違えたら教授が死んでいたとか他にもデメリットはあったんだけど……天才だわ、あの人って……。

「……やつぱり月見酒をしに人間界まで行こうかしら？」

スルメをツمامミに領地で作っているチェリー酒の瓶を片手に散歩中、味気ない夜空を見上げて呟く。これでメルギスでも側に居たらたのしいんでしようけど……変な意味はないからね？ 兎に角、誰か誘うべきかと思いつながら真つ先にメルギス呼び出しうになつて携帯を懐に戻す。今は多分、痛々しい女魔王との食事会ね。……帰ったらマツサージでもしてあげるべきね。彼奴と会った後は本当に疲れて居るもの。

「いや、腰揉んでやるより胸揉ませてやった方が良いかしら？ その流れで押し倒されても仕方ないわよね、私って絶世の美女だし」

彼奴は全裸よりも下着姿の方がフェチを刺激されるつてのは隠していた本で知ってるし、ブラの上から揉ませるか中に手を入れさせて揉ませてやるか悩むものね。まあ、それは流れで決めるとして……。

正直、彼奴に全部背負わせているつて罪悪感が有る。お母さんが父さんを愛してたか

らこそ身を引いて姿を消して、嫁に隠れて探し出した私と一緒に暮らそうって言われたけど、死んだお母さんの覚悟を大事にしたいからって断った。……せめて皆を二人で背負えば今よりはマシになってたんだらうな。

そうこうしながら彼奴の顔を思い浮かべると酒のせいで……絶対に酒の影響で顔が熱くなつていく。べ、別におとこととして好きな訳じゃないんだから当然よ！ 寝てる間に搾り取るのは彼奴だけってのは対象に選んで良い奴の中で一番強いからだし？ 偽装とはいえ結婚するのに抵抗がないのも仲間だからだし？

そうやって極々当然の事を再確認しているとメルギスから連絡が入る。随分と精神的に疲れた声で、コカピエルって墮天使が悪魔の領地で何かをやらかすかも知れないって。……うん、本当に辛かったのね。

「帰ったら腰と肩を揉んでやるか。少し無理してでも休みを取ってあげる。……私がないと本当に駄目なんだから」

あの馬鹿の稼ぎは大きい。数年前まで逼迫していたグレモリー家のお家事情が回復する程度に利益を上げている領地の必要書類は膨大で、グレモリー家に関わる者の手を借りる気は無いからってのが今の忙しさの理由の一つ。……鍛錬の時間が多いってのが一番だけだね。

だから本当に心身共に疲れた時は静かに休ませてあげる、その予定だったのに……。

「誰、彼奴？ 空気読めつてのっ！」

スラムでの生活は厳しい。仲間内の結束は強くても外から幾らでも敵がやってくる環境は私の感覚を鋭くして、遠くから敵意を放ってくる男の姿を発見するに至った。しかも墮天使、その上最上級クラス。そんなのが攻撃を仕掛けて来ようとしたのを見た瞬間、考えるよりも先に体が動いていた。

「あの馬鹿の仕事をこれ以上増やして堪るもんですかっつてのっ!!」

全速力で飛来する私に向こうも気付き光の槍の射線上に私を入れた上で放つ。広範囲に散らばった大量で高密度の光の槍の群れ。其れ全てが私の体に吸収された。

痛あああああああああああああつ!! ヤバい、マジで痛いっ! 悪魔の弱点である光を大量に喰らった私は激痛を感じながらも涙を堪えて間抜け顔を晒す男の顔に拳を叩き込む。風の魔力の足場を踏みしめた渾身の一撃の威力を伝えきると同時に炎の魔力を放った。範囲ではなく威力を重視した魔力は男を地面に叩き落とし、私は更に

追撃を雨霰と降り注がせる。

流石に最上級墮天使と正面から戦えるかってーの！ 相手が本気出す前に少しでもダメージ稼いで援軍と一緒に囲んでボコる、其れが一番よっ！

「ちっ！ さっさと死んどけってのっ！」

再び飛来する光の槍。さっきみたいに吸収するけれど、デスイーターの弱点として吸収中は魔力による攻撃も防御も出来ないものでこっちの攻撃は止み、また凄く痛い思いをする。その上、別にダメージが無いわけでもなく範囲内に拡散した全てを集めるから寧ろ増える。しかも土煙が晴れば何やら感づいた様な顔を向けられるし……。

「ちよいと厳しいわね……」

ポケットに入った携帯に手を伸ばして救援コールを手早く行う。本当はメルギスと呼んで助けて貰いたいけど……頼ってばかりじゃ女が廃るってもんだわ！ 私は光の剣を両手に好戦的な笑みを向ける墮天使に向かって人差し指で首を掻き切る仕草をとった。

「ふはははは！ 良い、良いぞっ！ 最初は軽く捻って終わりかと思ったが予想以上の

力に謎の能力。小娘、名を名乗れっ！」

「はっ！ 小汚いオツサンに名乗る名は無いつてのっ！」

「ならば名無しとして死ぬ、小娘っ！」

随分と品の無い娘だと呆れながらも力には血湧き肉踊る。だが、あの力の弱点は見抜いた。精々が上級悪魔の上程度の娘に負ける程鈍っている気はない。暫く楽しみたいが屋敷の者に逃げられては面倒だ。……少し惜しいが終わらせるか。

光の剣を投擲、それを追尾する様に接近する。案の定消し去られるが顔が僅かに歪むのを見てダメージ自体は蓄積されていると確信した。拳を握りしめ放ち、同時に羽で切り裂こうと襲い掛かる。全体を覆うのではなくピンポイントで防ぐ障壁によつて防がれるが迂回させておいた光の玉が小娘の背後から迫った。

「っ！」

正面からの拳と羽、背後からの光球。其れを今度は全体に広げた障壁で防ぐも強度は落ちる。後は逃さないように追いながら連打を続ければ良いだけだ。

「取ったっ!!」

遂にその時は訪れる。拳障壁を崩し、羽が体を貫く。心臓と肺を確実に貫き、最後の一撃を出す前に首を切り飛ばす。……呆気ない。力は上々だが近接戦の経験が不足していたな。……さて、さっさと屋敷を襲うか、と、そう思った時であった。心臓と肺を

貫き首を切り飛ばした体が動いて俺の羽を掴んだのだ。

「き、貴様まさか……っ!」

俺の直感を肯定する様に小娘の遺体……いや、身体は紫の焔に包まれ切り飛ばした筈の頭が再生している。酷く不機嫌な顔が俺を睨んでいた。

「まったく、この力は使いたくないから極力傷が付かないようにって言うか絶世の美女の体に傷を付けるとか馬鹿なのかってのっ!　　っか、馬鹿決定っ!」

「小娘、貴様フェニックス家の者だったのかッ!?　ぐっ!?　ぐぬううううううううっ!」

体を貫いた羽に感じる灼熱、そして激痛と虚脱感。この溶けた鉛を血管に流し込まれたみたいな痛みと力が抜けていく感覚は……毒だとっ!

「小娘、何……を……!」

「敵に言う……って、やばっ!」

こうなったら一人でも多くの悪魔を殺し否が応でも戦争を再開させてやる。俺は最後の力を振り絞り、小娘の腕を掴むと同時に例の力の範囲外に創り出した特大の光の槍を屋敷に飛ばす。この殺し合いは貴様の勝ちだが……勝負に勝ったのは俺様だっ!

焦りを見せて振り払おうとする小娘を俺は渾身の力で掴み、光の槍は屋敷へと一直線に向かっていく。そして……。

「助けはさっさと呼んでよね、ルーリア。……ギリギリ間に合った……よっ!!」

屋敷から飛び出してきた古傷だらけの眼帯の男、其奴が構えた盾に光の槍は防がれ、それでも押し込もうとするが上空へと弾かれる。宙を舞った槍は庭の一角に突き刺さり、消え去った。

「……呆気ないのは俺だったか」

「そうね。……最後に名乗るかしら?」

「コカビエルだ、小娘。精々手柄にするが良い」

名乗った俺は目を閉じ……る等はせず俺を殺す相手を最後まで視界に収める。心臓を魔力が貫き、内部から焼き尽くされて意識が途絶えるまでずっと俺は小娘を見続けた。……自分を殺す相手の名前くらいは知っておきたいが仕方がない。

それに、奴が目的を果たしてくれらるだろう。俺は使う気が起きんかったが面白い手土産も貰った事だしな……。

騎士と聖劍

小猫ちゃんの泣きそうな顔を見てこれでも冷静になった積もりだったが、この先にエクスカリバーが有って聖劍計画の首謀者が居ると思うと怒りで沸騰しそうになる。緊急事態という事で謹慎が解かれた僕が校庭へと辿り着いた時、其処には二人の人物が倒れ伏していた……。

「ゼノヴィア……さんと、バルパー？」

罅の入ったエクスカリバーを握ったままうつ伏せに倒れているのは悪魔祓いのゼノヴィア。体中傷だらけだし、あの水着同然でセクハラ紛いの戦闘服は所々が破れて危うい感じになっている。イツセー君、場合が場合だから鼻の下は伸ばさないで欲しいんだけど……。

もう一人は見知らぬ老人。例えるなら自分の頭の一部をもぎ取って他人に食べさせる英雄の協力者の男性に似ている、そんな相手だった。袈裟懸けに斬られ一目で絶命していると分かる彼こそが墮天使が不自然な程に話した情報に出てきたバルパーなのだと分かってしまう。皆の最大の仇は恨み言をぶつけることさえ出来ずに死んでしまっていた。

「おやおや、これは最近会ったばかりの悪魔君と仲間達じゃありませんか。元気にしてた？ だったら最悪だよね！」

「フリード、これは君が……？」

軽薄そうな声とおどけた口調で僕の顔を眺め、何を思ったか腹を抱えて笑い出す。心底可笑しい事があったかのような。このタイミングって事は僕について何かあるんだな。その思考は視線で伝わったのかフリードは僕を指さして、次にバルパーの死骸を踏みつけた。

「バルパーの爺さんがもしやって言ってたけど君って聖剣計画の生き残りだったりする？ だとしたらどんな気分？ 仇を討つ前に不要になったし嫌がらせに使えるかもって理由で此奴が殺されるのはよ」

石ころを蹴り飛ばすみたいに蹴り上げられたバルパーは血を周囲に散らしながら僕の足下に落下する。もう少し憎悪にまみれていたら死骸を切り刻んで居たんだろうけど今はそんな気分じゃない。今したいのは……エクスカリバーの破壊だ。僕が魔剣を創造して構えるとフリードもエクスカリバーを構え、後ろの皆も臨戦態勢になる。でも、師匠が前に出ようとした部長達を止めてくれた。

「……有り難う御座います」

今に僕なら任せて良いと判断したんだろう。じゃあ期待に応えないとね。……でも

氣掛かりなことが。墮天使が言っていたエクスカリバーの統合と同時に起きる面白い事って奴だ。それにどうして彼女だけ居るんだろうか？

「おいおい、盛り上がってんな。其処の青髪ビッチも一人で俺を倒せると思っただらしくってよ……コカビエルの旦那がポツリって漏らした聖書の神の死を教えてやったら動揺して雑魚になつたぜ。まっ、僕ちゃんからすれば元から雑魚だがな！」

「……は？」

あまりの情報に思考が追いつかない。嘘にしても荒唐無稽過ぎる。こんな事を言う意味が分からず思わず魔王の眷属である師匠の顔を見て……本当の事だと悟った。知られては駄目な事を知られた事への焦りが浮き出た顔で、僕も剣を握る手が震えてきた。それはアーシアさんなど特に酷く顔面蒼白だ。そして、その情報をあつさり述べたフリードは僕めがけて剣を振り下ろして来る。

とつさに構えて受け止めた刃に罅が入り、一旦後ろに飛ばうとするも先に腹を蹴り飛ばされた。矢張り強い。正直、ゼノヴィアさん達以上に聖劍の力を引き出して恩恵を得ているかもね。

「ほらほら、どうしたよ？ あっ、もう一つ良い事教えてやるよ。町に入り込んだ上級墮

天使三人全てを後十分以内に殺さないと町の一部が吹き飛ばぜ」

ヘラヘラ笑いながら告げられた内容に焦りが増して剣筋が鈍る。大振りになった一撃を避けられ、突き出された切っ先をギリギリで避けたつもりが掠ったのか煙と共に痛みが走った。

「沖田、此処は任せたわ！ 私は早く捕らえた墮天使を始末しに行かなくちゃー」

事態は急を要すると旧校舎に向かう部長。一応見張りに朱乃さんが残った上に拘束もして傷も深いけど嫌な予感がする。……そして、その予感の中した。

「旧校舎がっ!？」

内部から突き出した巨大な光の槍が旧校舎を破壊して上空に二人の姿が飛び出す。朱乃さんとガラミティアと名乗った例の墮天使だけど、あの光の槍は上級墮天使の範疇を越えてるんじゃないや……。

「おいおい、偉そうに言っておいて結局使うのかよ。……んじゃない、俺も使おうと！」

徐にポケットに入れた小瓶を手にするフリード。中に入っている小さな蛇を飲み込んだ彼の姿が視界から消え、背中を強い力で蹴り飛ばされる。咄嗟に宙で体勢を整えて着地すると馬鹿にした笑みを向けてくるフリードの姿があった。

「それは何だい?」

「さあ? 協力者の野郎が渡してきたパワーアップアイテムだよ。墮天使共は使いたがらなかつたけど」

エクスカリバーを手で弄ぶようにするフリードの背後で立ち上がったゼノヴィアさん。彼女は破壊力に優れたエクスカリバーを大上段に構えるとフリードに切りかかった。

「うおおおおおおおおおおお!!」

「不意打ちで叫んでどうすんだって話だぜつと」

振り返りもせず、片手で構えた刃でゼノヴィアさんは攻撃を止められ弾き飛ばすなり腹を蹴り飛ばされる。垂直に飛んでいった彼女は校舎の窓ガラスを割って中に落下、多分もう戦えないだろう。上空では部長と朱乃さんがガラミティアの相手をするけど押されている。レイヴェルさんや小猫ちゃんもフリードに油断しない眼差しを送っている、僕が助けを求めれば直ぐに参戦するんだろう。

でも、僕は最後まで戦う……そう思った時だった。堅い物に罅が入る音がフリードの手元から聞こえたのは。先程ゼノヴィアさんの一撃を受け止めた場所を中心に罅が広がっていたんだ。きつと中途半端で無理な合成で脆くなった所に強力な一撃を受けて……今だっ!

エクスカリバーに意識を奪われた一瞬の隙について僕はフリードに一直線に向かい、罅の中心に堅さと重さを重視した魔剣を叩き込む。手応えがないほどあっさりエクスカリバーは砕け散り、固まったフリードの横顔に全力で剣を叩きつけた。

「ぶぎゃっ!!」

切れ味は無視したために鈍器の役割しか果たさないと構わない。僕は遂にエクスカリバーを打ち破ったんだ。……達成感と虚脱感が同時にやって来て、バルパーの死体に近付いて見下ろす。この老人を自分で裁けなかつた事が心残りだと思った時、肩に師匠の手が置かれる。よくやったと、目が告げていた。

「師匠……え?」

急に肩に置いた手に力が加わって突き飛ばされる。不意を打たれ尻餅を付いた僕の視界に入ってきたのは血を吐く師匠の姿とバルパーの死骸……。

「先ずは一人……」

そして、バルパーの死骸から飛び出した少女が手にした刀で師匠の腹を貫き、真横に振るって腹を深く切り裂いた姿だった。崩れ落ちる師匠は自らの血の海に沈み、少女の恐ろしい笑みが嫌でも見えてしまう。吐き気がするほどに妖しく恐ろしい笑みだった……。

少女劍士と妖刀

我斬り殺す、故に我あり。我は妖刀、故に我行いに善悪を持ち込む事は間違いである。只、己の存在理由に従っているだけ故に……。

『……魔喰い、お前の銘は魔喰いだ』

我が完成した時、それは我が自我が目覚めし時と同時にあった。汗ばむ熱気が籠もる工房で髭を生やした熟練の刀鍛冶が我を打ち、込められた執念によつて血を吸うより前に妖刀となつたのだ。我が親とも言える男であり、我が最初の肉体から得た記憶によれば多くの命を奪い完成させた金属を使つたらしいが興味はない。善悪など人に問う物、刀の我には無縁である。

「おや？ この刀は？」

「この様な見事な刀が打ち捨てられているとは……」

「これが魔喰い。これさえ有れば……」

幾十幾百の時が過ぎただろうか？ 我を握り、我に肉体も力も記憶でさえも奪われし者は数多く、奴らが何を思つて我を手にしたか知つてゐるが興味は皆無。我斬り殺す、

故に我あり。其処に事の善悪など存在しないのだから……。

「師匠！」

我が奪つた肉体の持ち主に憎悪を向ける小僧を殺そうとしたが庇われ、庇つた男は僅かに息がある。悪魔とは存外生き汚い生物であつたと思ひ出し感心する一方で、あの男の肉体を捨てたのが悔やまれる。腕を失つた劍士の肉体に価値がないにしても、磨き上げた技量まで共に捨て去るのを失念していたとは……。

「……今まで価値の低い物しか捨てていない弊害か」

この身体のように隠密行動に適している以外は無価値で有つても無くても対して変わらない物なら兎も角惜しい事をした、と、我を握つていない方の手で幼子の矮軀を軽く撫でた所で他の獲物に目を付ける。奪つた肉体から得た記憶や技は捨てると同時に徐々に失われて行くが、別口で出会つて仕留め損なつた小娘、捨てた肉体の実子である桃花を殺すのを邪魔した悪魔の娘が目の前に居た。

思はず口角がつり上がる。漏れ出る笑みと殺意を抑える気にもならず我は小娘目掛けて一心不乱に駆け出した。途中、先程殺し損ねた小僧が魔劍を急造して向かつて来るも肉体のリミッターを外した今の我には止まっているも同然。数多くの劍客の限界を

超えた力を受けた肉体が悲鳴を上げるも限界が来て崩壊すると同時に捨てて別の肉体で向かっていった。

「……死ぬ」

「お断りですわ!」

鞘に収めて即座に抜刀、三日月の斬撃を飛ばすも戦鎚で正面から相殺される。振り抜いた瞬間、斬撃が爆発したが神器とやらか……。生憎、今まで手に入れてストックしている肉体に神器は宿っていない。故に純粋な肉体の力と技量が磨かれているのだろう。

「貴方、魔喰いとやらですわね?　メルギス先生から聞いていますわ」

「先生?　……ああ、奴か。お前、彼奴の弟子かあ」

見るからに重量のある戦鎚を軽々と振りかぶる小娘の発した名に直ぐに思い当たる。数年前、桃花を斬ろうとしたのを邪魔した仮面の悪魔だ。あれは惜しかった。今回こそ斬れると思ったが弟子に邪魔されるとは……。

「……あの人の弟子は此方にも居ます」

真横から向かって来る流星錘を放ったのは小柄な白髪の小娘。桃花といい、小柄な小娘と縁が深い男の様だが奪った記憶にあるペドフィリアという奴か？ 迫り来る錘を頭に受け熟れた果実の様に潰れさせると同時に新たな肉体で直進する。金髪の方に迫ったが僅かな差で宙に逃げられた。油断無く俺を見下ろす小娘だが、その手が小瓶を投げて先程の小僧がキャッチする。薬だろうが……ああ、どうでも良い。我は妖刀、人斬りの道具。

「ははははっ！ まっていただけ、桃花あ!!」

二度も斬りそびれ、必ずや刀身を血で染めようと思い描いていた獲物、桃花が上空より現れたのだからっ!!

「……行きましたね」

消灯時間を回った時間帯、フェニックス領の病院のベッドの上で看護師さんの巡回をやり過ごした私は音を立てずに起き上がる。メルギスさんの愛弟子を自称するからか

レイヴェル様が用意してくれた部屋は豪華な個室で、ベッド横の冷蔵庫を開けて飲み物を取り出すと差し入れのチェリーパイが入っていた。

小振りな西瓜ほどの大きさを持つドクロチェリー（微妙な味をした教授の発明品）、現在はドラゴン向けな味をしているので特産品としてドラゴンチェリーに変名してドラゴン相手に売っているのですが……。少しだけ空腹を感じたので一切れだけ口にしてお茶で流し込む。さて、行きましようか。

お父さんの身体を奪い連座でお母さんまで連れて行かれる原因となった妖刀魔喰い、また負ける所でした。医者の話では重要な血管や臓器にも刃が届いており、本当に薄皮一枚一秒一刻を争う状態だったとか。ですが、故にお父さんから受け継いだ切り花の真の力を発揮できる。

「さて、確かルーリアさんから聞いた話では……」

傷自体はフェニックスの涙と手術で塞がっているが未だ痛む体を動かして窓から出ようとするけれど脱走防止の術式が邪魔で出られそうにない。だから私は段ボールを被る事にした。どうも歴戦の傭兵も戦場で段ボールに隠れて身を隠していたそうである……。

「いー！ 何をやっているの！」

一分後に見事に見つかったので全力で逃走しました。……解せぬ。まあ、其れは兎も角として脱出成功した私は人間界に転移します。一応メルギスさんには連絡しておきますけど……後で叱られそうで怖いなあ。

転移した先は駒王学園。お嬢様に活動許可を貰おうと向かった先で切り花がガチガチと音を立てて警告する。この気配、間違い無い。奴が、魔喰いが戦っている。後先考えられなくなった私は敵の戦力も味方の状況も調べずに突入し、お嬢様達と戦う墮天使を発見した。あの白髪同様に魔喰いの残り香がする墮天使女は私を見るなり不快そうに顔を歪めた。

「新しかった！ ええい、鬱陶しいわね……」

見るからに満身創痍といった状態でお嬢様と朱乃さんを圧倒している彼女は私に向かつて光の玉を飛ばすも居合いで切り落とし、再び納刀。ベッドの中、切り花に宿る歴代所有者の思念から流れ込んだ戦闘経験。其処から手に入れた技術を上乗せして放つ。

「暮石流抜刀術・攻こうのかたにしきの型しちどぎつね二式 七度狐しちどぎつね」

超高速の連続抜刀により七の斬撃が飛ばされる。僅かに速度にズレを生じさせ一度での対処を封じるも、墮天使の女は光の剣で防いだ。一度、二度、三度、四度、五度、六度と……。

「中々の技だったけどこれで終わりっ!？」

七度目の斬撃は防げない。何故なら幻だから。最後の一撃が呆気なく消え去った事に動揺するも彼女は即座に気を取り直す。まあ、其れが普通です。最後の一撃が幻ならば他の敵に気を向けるのが上策。……幻だったのですが。

「……怨み狐は七回欺く。七度目は、手出しせぬと思わせ嘲笑う」

最後に遅れて向かった七発目の斬撃が墮天使の上半身と下半身を断つ。呆けた表情のまま落ちていく彼女を一瞥した私は校庭に降り立った。対面するのは見知らぬ誰かを乗っ取った魔喰い。今は戦士らしい身体付きの中年女性。校庭には死体が散らばっています。

「……死ね」

「……へし折る」

互いに長い言葉を交わす必要はない。向こうは私を斬りたく、私は向こうを破壊したい。只其れだけ、其れしか無い。先ず、魔喰いが動く。ほぼ同時に向かつて来る超高速抜刀。……ですが歴代所有者の経験を受け継いだ私には、お父さんを捨て、役に立たないと多くの肉体を使い捨てにした今の魔喰いの居合いは通用しない。静かに目を閉じ、柄に手を掛ける。

……人々の全てを安易に奪い、そして捨てて来た報いを受けるが良い。

「暮石流抜刀術・守しゆのかたいっしきの型あけがらす一式 明烏」

迫り来る斬撃、それを剛の抜刀で弾き、勢いが乗ったまま柔の突きへと変える。切り花の切っ先が魔喰いの腹を捉え腕から弾き飛ばす。宙を舞いながら次の身体を出現させようとしますが……させはしない。

「暮石流拔刀術・終ついでにかたの型
地獄じごく百景ひゃくけい亡もうじや者のたむれ戯!!」

野良犬と後始末

桃花からの連絡を受け学園に来てみれば校庭に出現した魔法陣が消え失せて行き、局地的な災害にでも起きたかのような惨状の校庭には死体の山が積み重なっていく。折れた刀から次々と死体が吐き出されて行く光景は不気味を通り越してシユールにさえ映った。一体何が起きたか説明は必要です。

「……………えっと、取り敢えず説明……………の前に」

膝を折り息を荒くするも切り花を杖にして辛うじて倒れ伏していない桃花を抱き上げれば顔色が悪いのが一目瞭然。先ずはアルジエントさんに治療をして貰った後で病院に搬送、完治後に説教とこぶ締め刑ですな……………。

「み、皆さ〜ん！ な、何が起きたんですかあああああ!?」

校庭の様子を目にして到着早々に相変わらぬの情けない声が出るギヤスパ。まあ、事態は解決しましたが後処理が残っていますね。……………あくまでもこの町はお嬢様が任されているだけです。私の仕事は増えないと、そう思いたい……………。

「成る程。そういう事が……」

「ええ！　メルギス先生の教えを活かし撃退致しましたわ」

自ら進んで説明役を申し出たのは小猫とレイヴェル様。この二人ならば立場からしてレイヴェル様を無碍に扱える訳もなく、多分拗ねているであろう彼女へのフオローはお嬢様に丸投げして大体の話を聞き出しましたが……非常に厄介な事態のようです。

フリードとやらが使ったという謎の蛇は恐らくカテレア様が使った物と同じ……無限龍オーフィスによる物。既に大王派の傀儡にして次期当主の婚約者となった彼女の話ではテロリストの集団を結成したとか。トップに据えた力の象徴がオーフィスで、創設者は墮天使の幹部。今後、非常に厄介な事になるのは明らかで気が重くなった。

「あら？　何かお悩みの様子ですわね。愛弟子として私が力になりますわよ？　フェニックス家の力が必要ななら何時でも仰って下さいませ」

私の浮かない表情が気になったのか心配してくるレイヴェル様。やれやれ、子供に氣を使われる等、私も未熟ですわね……。

「ええ、その時は頼りにさせて頂きます」

好意を利用するのは気が咎めますが必要ならば致し方なし。まあ、何かしらでお返しはしませんと駄目ですけどね。それにしてもキラキラとした眼差しを向けられていると私も少年時代から大きく変わったな、そう思いました……。

（ふふふ。今のはポイントが高めですね。先生には今後もご指導いただき、将来的には魔王を目指す私を支えて頂きたいですもの。……うーん。もっとポイントを稼ぐ方法は無いですか？）

「……あくまで政府から縄張りの管理を一任されているだけで、実際後始末は私以外の者が行いましたが……はあ」

「おや、独り言が大きいですね。……追加です」

あの後、デュランダルの先代所有者とエクスカリバーの使い手が合流、神の死は伏せて情報交換が行われた後で後始末が始まりました。完全な記憶抹消は無理なので魔獣が現れたのは鳥の大群や猪が出現したと書き換え、記録媒体の改竄も無事に終了。墮天使との話し合いは外交担当の仕事で私は通常業務……では有りませんでした。

「……ぶっちゃけ悪かったわ。偽装すべきだったわね」

「口調、口調。乱れていますよ、全く……」

目の前には書類の山で隣にはばつの悪そうなルーリア。コカビエルを撃退した彼女と、結構な数の悪魔の身体を乗っ取りS級として手配されていた魔喰いを破壊した桃花。この二人は私の眷属だった事になっている。故に主として報告書を書いているのです。

『現政権に危機を知らせるために立ち上がった勇敢で偉大なるレヴィアタンの末裔を始末しようとした極悪非道なる者達から尊い魔王の血族を守った事は試験無しで昇格するに値する。だが、特例故に広めず形式として受けた試験後に正式に領地を与える予定であった。だが、眷属の健闘を称え正式に発表するものとする』

これが政府……正確には眷属悪魔ですらない下級悪魔に手柄を立てられるのが面白くない上層部の発表内容。あの時点で既に二人は悪魔の駒で転生していた、そういう事になったのです。なので関連する書類を急いで仕上げる必要があつて大変ですが……大王家が口出しして嫌がらせを行い、その結果として、特例事項故に領地の授与は折を見て行う、として新たな領地は貰えず、経営の人材確保は時間的な猶予が出来たのです。「矢つ張りルーリアは女王でしょうか？ 王の側に居るのが通例ですし、貴女が側に居てくれると安心します。一緒に居てくれますか？ ……なんかプロポーズみたいですね」

「いや、そういうのは仕事モードじゃなくなってる。本来の口調で言いなさいって。まったく、そんなんだから童貞なのよ。まあ、結構な数の縁談話が来たけれど？ それも殆どが……ぶくくく」

ルーリアに怒る気力すら湧きません。敢えて後回しにしている縁談写真、軽く見た時点で……十代前半辺りの少女が多かったです。私、見た目の好みならばルーリアやルナ姉さんみたいなセクシー系なのですがね……。

ロリコン疑惑が貴族社会に広まっている事に落ち込みつつも書類を片付けて最後の一枚に判を押す。さて、一時間ほど眠るとしましょう。ああ、ストレスが酷い……。

「ルーリア、何時ものを……ルーリア？」

鏡を見て我ながら疲れきった顔だと思ひながら寝転がろうとすると、何時もは上から覆い被さって来るルーリアが今日は何故か枕元に正座して膝を叩いている。膝枕……ですよね？

「その枕は最高級品でよく眠れるので結構です」

「いや、完全無欠超絶美女の膝枕よ。てか、ルナ姉に教わったサキュバスの秘術よ。緊張

とかストレスで役に立たない奴相手をリラックスさせるの。最近覚えただからアンタに使ってやるわ。ほら、さっさと……」

完全無欠には異議申し立てたいですが眠いので諦めて膝に頭を乗せれば確かに溜まった何かが抜けていく感覚がしてリラックスするのを感じる。最後にルーリアの目を見つめれば何時もの様に深い眠りに落ちていった……。

「あーあー、全く仕方がない奴。本当に私が一生支えてやらないと駄目じゃないの。私を一生縛るんだから責任取りなさいよ……?」

「マジか……」

起きるなりメールを見て眼鏡が話があるからと茶会に誘って来た事や、好き勝手に旅に出ていたスラムの仲間の何人かが戻って来た事、魔喰いの破片が消え失せた事、教授が変な発明を……するのは日常茶飯事だとして、つい本性が出た理由、それは……。

「……………すう」

右隣に上半身裸のルーリアが寝ていて俺に足を絡めて抱きついている。もう反対側には……………何か着せた奴の嗜好を疑う格好のゴスロリ少女が居た……………。

サキユバスと龍神

正直言って此処までとは思っていなかった。ストレスとかの精神的な負担を取り除くって術だけど、そこはサキユバスのだし結果はお察し。私はメルギスの下半身に視線を向ける。いや、幾ら何でも……。

「これは念入りに吸い取らないと駄目ね、うん」

ルナ姉は術による増強は目覚める頃には解けるとか言ってた来もするけれど多分勘違いね。起きてこの状態じゃ大変だろうし、一人で処理するから部屋から出て行けとかも言いにくいだろうし？ 籍入れる私がどうにかしてやるか、仕方ないわね。

まずは胸で何回か、と、服を脱ぎ捨てた所で動きを止める。背後に何かが居た。得体の知れない気配。力の大きさは異質すぎて感じられない。右手でメルギスを掴み、裏拳を左手で叩き込むと同時に飛び退こうとするけれど、左手に伝わって来たのは柔らかい幼子の身体みたいな感触、でも微動だにせず。

「あつ、これ駄目な奴だ」

スラム育ちの危険察知能力が告げる。仕方なく振り向くと前面をさらけ出して胸にシールを貼っただけの少女が立っていた。うわあ、こんな子にこんな格好させたままと

か絶対にロリペド野郎ね。メルギスもそんな感じの噂を立てられているけど。

「我、オーフィス。無限の龍神」

オーフィスという聞き覚えのある名前を脳内で反芻、直ぐに思い出しちゃった。嫌な内容をね。

「あーはいはい。テロリストの親玉ね、畜生。何か出してやるから待つてなさい」

「うん。我、待つてる」

スラムには色んな奴が集まる。その為か大抵の相手が大体どんな奴か分かるんだけど、オーフィスの場合は子供だ。故に危険と判断する。目的の為に行動して、その内容や影響を考えない。なのに最強クラスって悪夢みたいな存在よ。出来るなら関わりたくないし、身内は関わらせたくない。だから刺激しないでさっさと帰って貰わないと……。

「……………いい匂い」

教授の開発した無駄に大きいドラゴンチェリーはつきり言つて美味しくない。スカーが色々苦心して料理しても微妙なままで、唯一美味しくできたチェリー酒以外は何か好評なドラゴンへの輸出にしかならなくて、無駄にしないために配られた在庫を

オーフィスに出していた。

ジャムを乗せたクラツカーにパイ、シロップ漬けに果実入りの大福。私が酒をチビチビ飲む中、オーフィスは無表情だけどパクパクと次から次へと口に運んでいく。指先に付いたジャムを指を咥えて嘗めとり、口の周りにベタベタと食べかすが付いていた。

「ほら、ジツとしてなさい」

「ん」

「まったく、どうして私が口元を拭いてやつてるのよ。オーフィスは特に抵抗せずに受け入れて、全部食べ終わると皿と私を交互に見詰める。もつと食べたいって所ね。……組織の奴らはちゃんと食べさせてないわけ？ 下つ端の私達に回ってこない情報でもデイハウザー・ベリアルから伝わって来るけど旧魔王連中は利用してるそうじゃない。傀儡なら傀儡らしく甘やかしとけての。」

いや、見た目通りの歳じゃないし、自分の意志でテロリストになったって分かってるけど、ちゃんと食べているのか分からない奴を見てるとちよつとね。

「アンタ、酒は飲むの？」

「お酒？ 我、飲んだことがない」

……今まで誰も勧めなかった訳ね。昔は老人の姿だって聞いたけど、本人が目的以外に興味がないから誰にも誰も歩み寄ろうとしなかったって訳か。……ちつ。絆された

訳じゃないけど、今日は刺激せずに帰らせるついでに在庫一掃するか。

「じゃあ、追加持つてくるまでこれ飲んで。不味かったらジュースも有るから」

「えっと、あり、ありが……何だっけ？」

「ありがとう、よ。ったく、力貸してる奴は礼すら言わないの？ 大体どうせ……」

約束なんて守らないわよ、と、言いそうになっただけど止めておく。下手に行動を変えさせた方が此奴は厄介だ。じゃあ自分だけで今から挑む、なんてなったら目も当てられない。取り敢えず今は準備が整っていないって嘘を信じて行動してないんだからね……。

「ありがとう?」

「はいはい、よく出来ました。大人しくしてなさいよう?」

……にしても威厳に関わるんだから格好はどうにかさせろつての。てか、何で幼女なのかしら? まあ、特に意味なんて無いんだろうけど……。

「我、良い気分」

「酒に強くはないのね。アルコールを分解する力が低いとか? 其れは兎も角、何の用

かしら?」

「我、次元の狭間をグレートレッドから取り返したい。だから仲間集めたけど弱いから

蛇をあげている。メルギス、他人を強くするの上手いって聞いた。こんな姿が好きだとも」

「其れ誤解だから」

思い掛けない回答に憐れみしか感じない。テロリストの親玉にまでロリペド扱いて……こりや私が子供でも産んでやるしかないかしら？ いや、別に惚れているから子供が欲しいとかじゃなくて。生んだらちゃんと夫婦で育てるし愛情は注ぐけど。

「我、騙された？ 曹操嘘吐き？」

「曹操？ 何処かで聞いた名前ね……」

曹操って名前からして東洋だろうけど何をした人物か思い出せない。……あれ？

確か何処かで……。

「引き入れた將軍や軍師が実は敵の手の者で罨にはまって大敗したり、折角築いた国をわざわざ引き入れた軍師の一族に乗っ取られた曹操の関係者かしら？」

確か二十人以上いる息子の一人が詩人として有名で七歩歩く間に詩を作れって兄貴の無茶ぶりをこなしたとか何とか……駄目だ、それしか思い出せない。まあ、どうせマイナーな人物でしょ。

「我、ぜんぜん知らない。でも曹操の子孫だって聞いた。それで……眠い」

お酒が回ってきたのかうっらうっらしだしたオーフィス。私も良い気分には口酔いだし少し眠るとするか。オーフィスの手を引いてメルギスが寝ているも余裕のあるベッドに寝かせ、私も少し横になる。……あつ、服脱いだままだ。でも眠いし……すう。

「……成る程。故郷に帰りたいたいという願いは共感しますが……私も悪魔社会の一員。承諾しかねます」

流石にアンタの股間がギンギンだったから解消させようとした、とか言えないから酔った勢いって誤魔化してオーフィスの話を聞かせる。ロリペド扱いには精神的に参った様子だったけど抑え込んで要求をはねのけた。まあ、旧魔王連中は絶対にオーフィスとの約束を守らないし、どうせ別の協力者を作つて倒す、とか無理な算段でも付けているんでしょう。

「……むう。どうしても駄目?」

「はい、駄目です。ほら、今日はお土産を持って帰りなさい」

無表情ながら拗ねた様子のおーフィスにメルギスは瓶詰めシロップ漬けやジャム、作り置きパイを籠に纏めて入れて手渡す。……会って短時間だけど無表情でも僅かに嬉しそうに見えるのは気のせいかしら?

「分かった。我、今日は帰る」

オーフィスが消え去ってひとまず安心だけ……。

「報告書が必要ね。……懐柔を目指せとか言われたらどうする？」

「命じられたら努力するしかないですが……もう好きな物を与えるから地底洞窟の奥深くで我慢して貰えませんか？ ……それと胸をいい加減隠しなさい」

「あら、気になる？ もしかして襲いたい？ ……ふーん」

もしかしてオーフィスさえ居なければ襲われていたかもと何故か……何故か何故か何故か何故か！ 惜しい気にもなつたけど、顔を背けるメルギスを見れたから満足しましょう。でも、ちよつとだけ……。

不意打ちで背中から抱き付き、頬に軽くキスをする。ぷぷぷ、驚いてる驚いてる。……ちよつと熱が出てきた気がするわ。だってサキュバスの私がこの程度で……。

猫と再会

……今日はメルギスさんが上級悪魔になった事への挨拶周りに来るらしい。部長は自分に黙っておくとか水臭いって言ってたけど、本当に隠してたんでしようか、と疑問に思う。特例故に公表を控えていたらしいですけど、部長は公爵家の次期当主、極秘裏に話が回って来そうですが……。何か汚い社会の事情が有りそうです。

「それで眷属は集まってるのかしら？ 桃花とルーリア以外にも有能な知り合いは居るんでしょ？」

「まあ、有能かどうかは別として候補は既に幾人か居ますね。只、友人と形式だけでも主従になるのに抵抗も有りまして……」

部長の問いかけに複雑そうなメルギスさん。成る程、友達を部下にするのに抵抗がある、というのは理解できます。……なら、弟子の私やギャー君はどうなのか、そんな考えが浮かんだのを掻き消す。私は部長に恩が有る身ですし、メルギスさんも引き抜き交渉をするタイプの人じゃないですから……。

「しかし羨ましいぜ、メルギスさん。女の子ばっかしを眷属にしてハーレムを作れるじゃ……痛っ!? こ、小猫ちゃんっ!？」

「メルギスさんをイツセー先輩と一緒にしないで下さい。ほら、ギャー君も一緒に蹴りましょう」

「ええ!？」

相変わらずのイツセー先輩の足を蹴り上げ同門のギャー君にも制裁を促す。イツセー先輩は困ったように部長達に助けを求め視線を送りますが笑って受け流されました。全く、男の人全員が女にだらしない訳じゃないのに……。

「あらあら、嫉妬かしら、小猫ちゃん？」

「……そんなんじゃないです」

朱乃さんは興味深そうに言ってくるけど本当にそんなんじゃない。好きか嫌いかで言えば間違いなく好きですが、恋とは違う好きだと断言できる。でも、眷属になれたらと思うくらいは良いですよ？

「ああ、所で折角だからちゃんと挨拶をしておこうか。久し振りだね」

「ええ、こうして顔をちゃんと合わせるのには敵同士だった時以来ですね、クアルタさん」
私が物思いに更けている時に会話に入ってきたのはゼノヴィアさん。神の死を知ったから追放されたそうで部長の眷属になりました。……メルギスさんは少し複雑だそ

うです。元々敵だった事も有るんでしようけど……。

『彼女に親兄弟友人恋人、其れを殺された人がグレモリー家にまで恨みを向けないか心配ですね。どうして悪魔を殺していた奴を同胞にするんだ、と』

イツセー先輩辺りは任務として命じられたから、とか庇いそうですが、其れを言ったら部長の眷属って誰かしらに殺されたり殺され掛けたりした人ばかりで、其れを恨むなと言われても、と、なつてしまいます。でも仲間になつたからには私も守れるように心掛けましょう。……もし子供が泣きながら、お父さんを返せ！ と刃物を向けるなどした時に心まで守れるかは別ですが……。

「あつー！ メルギス、頼んでいた物だけど……」

「お持ちしていますよ、お嬢様。デュランダルやエクスカリバーに代わる彼女の武器、ブレード・ブラックスミス聖剣創造です」

「……助かるよ。仕方ないとは言え剣を持たない剣士など話にならないからね」

……そう、当然ですが追放されたゼノヴィアさんがエクスカリバーや適合していたというデュランダルを所有できる筈もなく、帰国する二人の手で持ち帰られてしまいました。そんな彼女の為に部長が用意することにした代用品が今回の品物。メルギスさんが敵対した相手から奪つたり、捕らえた闇商人の商品の中から報償として受け取った神

器の一つ。手の平サイズの球体を受け取った彼女が自分の胸……余分な脂肪の塊に近付けると吸い込まれて消えていく。次の瞬間、手には聖剣が収まっていた。

ゼノヴィアさんは手にした聖剣を眺め、幾度か振って感覚を確かめる。表情からして完全に満足できる品ではないみたいです。祐斗先輩のもそうですが神器で作ったのは本物に劣るそうですから。

「うん、流石に本物には劣るけど仕方ないか。……所で不躰で悪いんだが頼みがあるんだ」

聖剣を消したゼノヴィアさんですが、何やら急に真剣な眼差しをメルギスさんの方向に向ける。アレですか、弟子入り志願ですね、多分。私やギャー君に貧乳同盟の桃花、ついでについてのレイヴェル。……構って貰える時間が減るので嫌だなと思っただけですが、内容は意外な物でした。

「私と子供を作らないか？」

ゼノヴィアさんはそう言って手を差し出す。メルギスさん……の後ろのギャー君に向かつて。この人、脳筋な上にシヨタコンだったのでしょうか……。

「……ふえ？　　ぼ、僕ですかああああああああああつ!？」

「ああ、そうだ。彼、メルギスと迷ったんだが君は吸血鬼としての能力も持っているし

ね。新たな生き方として子供が欲しいんだが、どうせなら強い子供が欲しいんだ。子育ては私がするから安心して……っ!？」

……一瞬、空気が歪んだかの様に思いました。途轍もない怒気がメルギスさんから放たれた気がしましたが皆が視線を向けた時には何時ものあの人のままです。でも、怒る気持ちは理解できる。メルギスさんの父親は考えなしにお母さんを抱いて孕まし放置したと聞きました。子供を産むという事を軽視していると思っただけ……。

「あ、あの、無理ですうううううううっ!」

「むう。私だと魅力が足りないか? ……もしや彼と同じ趣味だとか……困ったな。その場合、悪魔は年を重ねれば見た目の年齢を変えられると聞くから、君好みの幼い姿になっても構わないぞ」

……この人、例の噂を信じているんですね。泣きそうに拒否するギャー君に迫るゼノヴィアさん。ヘタレのギャー君じゃ完全に拒否できないだろうから助けようと思ったのですが……。

あれ? メルギスさん、ロリコン扱いされて落ち込んでますか? ……後でフォローしておきましょう。

「ぼ、僕の父親はお母さんを攫って僕を産ませて苛めました！　だ、だからその場の勢いで子供を作ろうとする人は嫌です！　そ、それにメルギスさんはロリコンじゃないです！　小猫ちゃんとは逆の知的美人の恋人が居ますうううううう！」

「そ、そうか。確かに軽率だったな。子供の人生を考えて無かった気がするよ……」

ギャー君の言葉に肩を落として反省した様子のゼノヴィアさん。ギャー君、成長したね。涙目で怯えきっているのは情けないけど頑張った。

「よし。だったら先ずは結婚を前提に健全なお付き合いから始めようじゃないか！」

「ええええええええええっ!?　た、助けて小猫ちゃああああああん！」

「……知りません」

「そんなああああああああつ!!」

……成長したのは褒めてあげるけど、ルーリアさんと逆つていうのは余計です、ギャー君。助けを求める彼に目を合わせずそっぽを向く。あつ！　後で接近戦の稽古をしましょう、神器と魔力無しで。ちよつと考え事が有るから手加減忘れるかも知れませんけど……。

泣き出したギャー君を放置して私は考える。本当に姉様は暴走したのかと……。

メルギスさんに鍛えてもらって、自分の力に自信がついて、少しだけ姉様について考える余裕が出来ました。修行中に偶に教わった貴族社会の闇。姉様はその犠牲者で、家の名に傷が付くから反乱された理由を全部姉様に押し付けたりした、そんなのじゃないかと思うのです。仙術の暴走は格好の理由だった、とか……。

勿論全部私の想像で、余裕が出来たからこそ身内最良の願望も入っているのです。う。でも、幸せだった頃の記憶が訴える。もう少し信じたらどうか、と……。

「でも冤罪にしろ上が黒といえど黒ですし、再会した時は暴走している時に備えて殴り倒してから考えましょう。冤罪なら見逃せば良いですしね」

貴族社会汚い、マジ汚い。メルギスさんが冗談混じりに言っていた言葉を思い出しながら帰る途中、他に誰もいない場所で背後から呼び止められました。

「やつほー、白音。久し振りにやん」

振り返れば姉様が居た。相変わらぬの気まぐれそうな顔に着崩した着物から大きな胸が……よし削ぎましよう。先手必勝、私は龍の双爪を装着し、笑顔で手を拭る姉様に飛びかかった。

野良犬と屋敷での休日

「……あー。やっぱ実家が一番だわー。屋敷とか職場だし、落ち着かねー」

山を通り越して山脈が連なる書類を全て片付けて領地に建てた屋敷の部屋で寛ぐ。職場で寝泊まりが続くとかブラックさながらだぜ。小猫やギヤスパー達に昇格の報告に行った後、ルーリアが調整してくれて久々に取れた連休を……もう一度言うぜ、連休を満喫するぞ！

「あの眼鏡との茶会は面倒だけどそれだけ済ませれば……ふう」

普段寝ているグレモリー家の部屋は特に物を置いていないが、この部屋は違う。今寝ころんでゴロゴロしているキングサイズのベッドにお気に入りのソファァー、そして隣接する部屋には最新の音響設備を備えた趣味の部屋があるんだ。漫画に雑誌にシアタールームも完備。領地の収入は全部領地に還元してるけど、仕事で手に入れたアレやこれを売って手に入れた金は別だ。

「さて、ポテチ喰いながらマンガ読むか。ゲームもするぞ。音楽はランダム再生にして……炭酸飲みてえ」

そうと決まれば手元のボタンをポチツとな。直ぐに足音が近付いてドアが開く。グ

レモリー家の屋敷ならメイドプレイ好きのグレイフィアが五月蠅いだろうな。自分は主に手をあげているくせによ。

「メルギスく……旦那様、何の用？ ……ですか？」

現れたメイドとしてはちよつと頼り無い水色の髪の子猫の名はジュリイ。小猫よりは発育がマシだが136位のちびっ子で……多分俺がロリコン扱いされる一因だよな、此奴。忘れっぽいからメイドとして半人前だし、オレが困ってるって噂だ。見た目は十代前半だけ俺と同年代なんだがな。

もう一度言っておくか。このどう見てもロリなメイドは俺と同年代だ！

「悪いけどコーラ持ってきてくれ。氷入れてな」

「う、うん。えつと、コーラに氷を……えつと……大丈夫！」

全然大丈夫に思えないけど、まあ仕方ない。そもそもジュリイの忘れっぽさも成長が遅れているのも理由が有つての事だ。俺の屋敷でメイドやつてるのも……この彼奴専用の结界が設置された屋敷で自然に暮らさせる為だしな。慌ただしい足音が遠ざかり、途中で屋敷の警備員をやっている元教会の戦士育成機関の犠牲者だった奴と派手にぶつかったらしいが彼奴ってジュリイに惚れてるからご褒美だろ。

数分後、氷の入っていないジンジャーエールが届いたが文句言わずに飲んだ。やっぱ

り気を抜いて飲み食いするのは最高だ。休みの調節をしてくれたルーリアには感謝だな、マジで。

「今なら彼奴に愛してるとか言えそうだな、はははっ！」

「そういう事はルーリアの居るところで言ったらどうだい？　僕はそれをお勧めするよ」

ノックもせずに入ってきたのはさつきジュリイとぶつかった白髪頭のロリコン。手には氷の入ったコーラのグラス。多分口で確認してたのを聞いてたんだな。

「おいおい、何でルーリアだと分かったんだ？　まさか教授にエスパーにしてもらったとか？　改名してローリエスパーになったのか!？」

「現形無いじゃないか、それとだいたい分かるよ……」

呆れながらも飲み干したジンジャーエールのグラスを回収してコーラを渡してくる。後で思い出して慌てたジュリイに間違っていないって言うたためにな。……いや、外出用の結界装置のテストで向かった人間界で死にかけの此奴を見付けて世話を申し出たのは確かにジュリイだけどフォローしすぎじゃねえ？

「……お前何時になつたら告白すんの？」

「僕が彼女に相応しい戦士になつたらね。……少なくとも前世みたいに龍王を倒し損な

う真似をしない程度にね。伝説を元にした話を聞く度に恥ずかしくなる様じゃ駄目だ。本気の彼女の隣に立てる位じゃないとね」

「そりゃ時間が掛かりそうだ。人間のままじや無理だな。……てな訳でほら」

指先で弾いたそれを其奴は……ジークフリートは受け取って目を丸くした後で苦笑する。どうやらオツケーって事らしい。

「^{ポーン}兵士か、まあ我慢しよう。良いよ、なつてやろうじやないか。伝説と違って実は龍を殺し損ねた英雄の生まれ変わりとか野良犬の眷属には相応しいからね」

愉快そうに笑い其奴は……ジークフリートは誇らしげに拳を突き出す。俺もそれに合わせる様に突き出してぶつけ合った。

「……三個かあ。いや、桃花に使った騎士は確かに同じ三個分だけど、あの子に三個の価値があるとは限らないし？ 僕の方が上って可能性は有るわけだ」

「相変わらずライバル視してんのな、お前」

お前、神器宿してるじゃん……とは言わない方が良いな、うん。

「取り敢えず格ゲーするからお前2Pな」

「コマンドが逆だからIPが良いんだけど……仕方ないか」

ぶつくさ文句を言いながらもジークはゲーム機を起動させる。最初からそのつもりだったのか自分の分の飲み物まで用意してるし、ポテチの油を拭き取る為のティッシュまで持ってきてやがった。いや、誘ってなんだが仕事する気ないだろ、テメー。

「そーいやお前つてジュリーの何処が一番好き？ 顔と中身以外で」

「脹ら脛かな？ 彼女、ドタバタ走るだろ？ そのせいで後ろから眺めればよく見えるんだ、偶にパンツもね。精神年齢も低いから子供っぽいのを穿いているのが更に良い。」

「……君は女性の身体で好きな部分は胸と腰回りだけ？」

「腰よりは指先だな。あと、うなじ。でもまあ胸が一番だな、胸が。ルナ姉とかルーリアとか押し付けてきた時の感触が凄いなだよ」

時々揉んでみたいとか思うんだよな。ルナ姉とか前に大勢で居るときに揉んでみるかって言ってきたけど……今になったら惜しい気がするぜ。

「僕としてはジュリーの身長に比べて大きい胸も中々だと思うよ。挟めないけど手で挟みたいね」

やっぱりゲームをのんびりするつてのは最高だな。……この後にドクターの定期検

診があるのは忘れよう。

(ひゃ、ひゃわあああああつ!?)

この時、ジュリイに聞かれていたけどジークは最後まで気が付かないで猥談をペラペラ話していた。

「……戦闘用キャットタワー『猫丸君』起動。姉様、お覚悟を」

ちよつと会わない間に妹がアグレッシブになってた件について関係各所に問い合わせ所存です。……等と馬鹿なことを考えつつ前方に広がっていく六角形の物体に視線を向ける。宙を浮遊するそれらは固定されたみたいに動きを止めた。

「覚悟をつけて……随分な口を叩くようになったにゃん」

「……あの流星に姉妹だけの時はそのキャラ付けをやめて下さい。とても恥ずかしいです。いえ、男の人を誘惑するのに使うのには口を挟みませんが……」

「ちよつと酷くない!？」

今回、妹が上級墮天使と正面から戦って捕縛したという噂を聞いたから顔を見るついでに試しに来ただけけど、この子を鍛えた奴はどんな教育をしたのよ、全く。敵はサーチアンドデストロイとでも習ったの？

……後日知った話だけど、大体そんな感じだった。わざと逃がして本拠地を叩くとかも教わったらしいけど。

「……姉様、質問良いですか？」

「胸を大きくする方法？ 悪いけど私は貴女と同じ頃には既に……」

「いえ、其れは後で削ぎ落とすので関係ないのですが……本当に暴走したのですか？」

「……さーて、どうだったかによ……かしら？」

不覚にも嬉しいと思ってしまう自分が居た。妹が、白音が私を信じてくれていたんだって。ちよつとだけ思う。今の私なら組織もあるしこの子を連れて行けるんじゃないかって。世話になってる奴らに負い目を感じないように強引にだけど。……尚、最初の方のは聞かなかつた事にする。

「……………そうですか。じゃあ……………取り敢えず殴り倒しますね」
「ええ!？」

腰を落とし、全身のバネを使つて爆発的な加速で迫る白音。咄嗟に避けたけど速い。戦車として増強されたパワーを推進力に使つたのね。足場のアスファルトが爆砕しているし……………つて言うか何で殴るつて結論に達する訳!？」

「ちよ、ちよつと!?! お姉ちゃんが置いていったの恨んでるつ!?!」

「……………ええ、そうですね。置き去りにされて寂しかったです。その上殺されるかもつて怖かったです」

背後に浮かんだ猫丸君を足場にした白音の呟きに心が痛む。そうよね、悪魔社会つてそんな物だし、二人だと逃げ切れにからつて置いて行かれた身内が罰せられても不思議じゃなかったわ。

「でも、暴走してなくつて何か理由が有つたなら別です。二人なら逃げ切れないから望みを託したと分かりますので」

「白音……………」

……………駄目、泣きそう。でも下手になれ合つたら繋がっていたのかつて白音が疑われる。此処は敵として……………。

「……取り敢えずトラウマ克服の為とメルギスさんの教えが有れば仙術なんて必要無
いって証明したいので姉様は倒しますけど」

「どつちにしろ敵として扱う気だっ!?!」

言葉と同時に再び飛びかかってくる白音。地面、電柱、街灯、猫丸君、ありとあらゆる場所を足場に加速を続けて飛んでくる妹を紙一重で避けるけど仙術を使う暇がない。

……武器の爪部分を使わないのは迷ってるからね。つたく、甘いんだから。

……マジでどんな教育したのよ、メルギスはっ! 随分と注目されてるし顔は分からないけど不細工じゃなかったら誘惑してみようとか思ってたけど止めた! 会ったら姉として抗議よ、抗議!

……さて、説得は無理っぽいし、お姉ちゃんが稽古を付けてあげるわね、白音。最上級悪魔との戦いって言う経験を積ませてあげる。

「……うん?」

目の前に何かが転がる。缶みたいだけど……これってまさか。転がってきた物体に

視線を向け、次に見た白音がサングラスをしていたのを見て確信に変わる。でも、対処する前に眩い閃光が放たれて目が眩み、腹に凄い衝撃が走る。正面から白音がぶつかって来たみたい……。

「ぐふっ……」

「取り敢えず……通報は後回しです」

衝撃で仰け反った私の顎に拳が叩き込まれ意識が朦朧とする。倒れてしまった私の胸を白音はグリグリと踏みにじっているように感じた。……多分気のせいね、うん。

龍劍士?と幸福

捧げよ、命。捧げよ、魂。捧げよ、人生。其れがお前達の幸福だ。……僕は生まれ育つた場所です。毎日の様にそんな事を聞かされていた。神の忠実なる兵士を作り出すシグルト機関、それがあの地獄の名前、思い出したくもない、でも向き合うべき過去。

姿も見たことが無く、声も聞いたことがない、そんな存在を敬い全部捧げろなんて生き方を、あの頃の僕……僕達はしてきたし、それしか知らなかった。拷問じみた訓練、洗脳同然の教育、様々な投薬や実験。正当性があると、少なくとも自分では思いこんでいる人間は幾らでも残酷になれるもので、結構な数が狂ったり死んだりして……それが羨ましかった。

だって僕は他の生き方を臆気ながら知っている。皮肉な事に教会が認めていない転生って形で、よりによってシグルトが前世だったから。……そんな僕を適応できない癖に力がある危険分子と見なしたのか上は危険な任務に碌な支援も無しに送り込み続けた。成功すればよし、死んでもよし、って感じだね……。

そして遂にその時がやって来た。毒を受けた状態で山をさまよひ、倒れた僕に熊が近寄ってくる。

「……やつとか。痛いのを少し我慢すれば……」

出来れば一思いに死にたいと願いつつも毒を与えた悪魔から聞いた話を思い出す。前世であるシグルトが倒して英雄となった筈のファブニールの魂は残っていて、何故か北欧の神が復活させたとか。ふふふ、オーデインが娘を追放する理由となった男の功績など認めない、そんな感じかな？

益体もない事を考えている僕の匂いを熊が嗅ぐ。毒を感じ取って警戒していたみただけで大きな口を開けて喉元に食いつく……その寸前に動きが止まった。何かを見て固まっている。次の瞬間、何かに怯える様に逃げ出したんだ。気になって視線を向けた先に居たのは……。

「女神……う？」

その少女は美しく、既視感があった。シグルトと恋に落ちたオーデインの娘……その二人の間に生まれた子供に似ていた。目覚めた時の夢の記憶みたいに儚くあやふやだけど其れだけは覚えていて、僕は胸が高鳴るのを感じた。これが恋って奴だって、今の人生で初めて知ったんだ……。

「ぎゃー!! ドクター、ストップストップ!」

「いえいえ、駄目です……よ! 全く、無茶を続けているようですねっ! アレは程々にしなさいと言ったはずなのですが、ねっ!!」

今、僕の目の前でメルギスが拷問を……いや、整体を受けている。ボキヤとかゴキユとかおよそ人体から出て良い音じゃない物が鳴り響き、有り得ないほどに背中や手足が曲げられていた。

整体を行っているのは中年男性で清潔だが冴えない風貌だ。名前はセシル、スラムに長いこと住んでいた変わり者の医者だ。にしてもメルギスの奴、アレを続けて居たとはね。ドクターにミツチリ怒られていたよ。所で泡吹いて気絶していないか?

アレ、とは風の魔力を常時身体に纏い、動かしたい方向と逆方向に力を込めて魔力と肉体のトレーニングを行い続けるって言う考え付いても誰もしない方法で、行うのはメルギスって馬鹿だ。なんだよ、その大リーグボール何チャラギブス擬きはさ。

「この後は温泉をしますから予定はキャンセルにして下さいね。おや、疲れていたのか寝ていますね」

さて、僕の番になる前に逃げるとしよう……。

「えっと、次は……」

ジュリイとお茶でもと思ったけど取り込み中のようだ。布に型紙に沿って線を引き、線に沿って魔力で型通りに裁断、今度は糸の繊維内に魔力を浸透させると針に通して縫い合わせていく。縫い目が均等になるように、素早く丁寧に次から次へと簡単な作りの熊のぬいぐるみを作っていた。後で孤児院の子供に配る奴だね。

「……僕も頑張るか」

アレは道楽で魔力を使っているんじゃない、出力の制御とコントロールの訓練を兼ねている。糸に込めすぎれば切れてしまい、纏った時の面積が大きければ針を通した時の穴が大きすぎる。微細なコントロールと集中力が必要な作業を手順書を見ながら行う姿を見たら僕も浮かれた気分は消え去って訓練室に足が向いていた……。

まあ、後で誘うけどね。二人のお茶の時間は日課だし。

「さて、最初は慣らしと行くか」

訓練室に入り難易度を選択、何時もより一段階だけ落としたのは悪魔になった事で生じる感覚と実際の動きのズレの調整のためだ。変な癖が付かないようにと頭の中で動きを確認しながら装備を構えれば手抜きっぽい案山子みたいな見た目の鎧型ゴーレム

が出現する。手には今の僕が装備している訓練用の剣や斧、槍を構えて襲いかかってきた。

「……結構差があるな」

二歩ほどで接近する積もりで飛ばば一足飛びに息がかかる距離まで移動してしまう。慌てて左腕に装着したラウンドシールドを叩き付けて弾き飛ばし、背中から生えた龍の腕、龍トウワズ、クリティカルの手の亜種のそれに、装着した銃からエネルギー弾を撃てば命中。これで数秒だけ動きが止まるけど斧と槍が左右から挟撃を仕掛けてくる。剣と盾で防ぐと動きを止めた剣のゴーレムが切りかかってきたので蹴り飛ばすけど足に剣先が掠った。

「ちっ！ クソツタレが」

ついつい悪態を付くけど追加のゴーレムに加えて上空からエネルギー弾を撃つてくる小型の円盤も現れる。これらを捌きながら致命傷となる所なら一撃、他の部位も難易度毎に設定された回数ヒットを避けながらどれだけの時間戦い続けられるかというのが訓練の内容だ。さて、さっさと慣らしてハイスコアを狙おうじゃないか。

……つて言うか悪魔になってスコアが落ちたとか彼奴が絶対に怒る。只でさ盾に作り直されて不機嫌だつて言うのに手入れの時間を増やされたらジュリイと過ごす時間

が減るじゃないか！

「じゃあ、ペースを上げて行こうか!!」

私服の時間を夢見て僕は気合いを入れ直す。宙から放たれるエネルギー弾の雨に、見た目と違つて高度な連携を行うゴーレム達。でも、この程度の逆境なんて乗り越えてやろうじゃないか！

幸せつてのは誰かに押しつけられる物じゃない。自分自身で決める物だ。僕は今の人生で、今の居場所でそれを知る事が出来た。今の目標はメルギスのコネで戦つた皇帝デイハウザーと戦いと言える戦いをする事。神器を三つ駆使しても無意味にされたんじゃないや効果がない。アレは完全に指導されていた。彼に勝つには基礎を徹底的に上げなくちゃね。

「うん、やるべき事が多すぎる」

さて、頑張るか。……そう言えばルーリアは何処に行つたんだろ？ オフでも大体メルギスの側に居るのにさ。あの二人についてだけど周りの奴らは、近過ぎてくつつくの逆に無理じゃ？ 派、と、もうくつついてるだろアレは派、この二つに分かれている。そ

んなルーリアが見えないのは不思議だな……。

「遅くなって申し訳御座いませんわ」

メルギス先生から出された課題に自主トレを加えて夢中になっていたらお父様達に呼び出されていた時間ギリギリ。焦って汗を軽く流しジャージからドレスに着替えて応接間に向かうと既にライザーお兄様以外の家族……そしてメルギス先生の恋人……でしたわよね、のルーリアさんが居ました。あら？ どうしたのかしら。

「レイヴェル、早く座りなさい」

促され着席すると違和感の正体に気付く。この部屋、使用人が居ませんわ。……つまり重要な話という事ですわね。それこそ既にルヴァルお兄様との間の子供を産んだ義姉様を出席させないレベルの。

私を感じていた時、お父様が口を開きました。

「さて、改めて紹介しよう。知っていると思うが彼女はルーリア……私の隠し子……として正式に認知する予定のルヴアルの隠し子だ。婚約が決まる直前に妊娠が発覚したな」

「……そうですの」

色々面倒事の予感がしますけど……つまりメルギス先生が彼女と結婚すれば身内ですし様付けなどの余所余所しい話し方はされないという訳ですわね！ ぶっちゃけ一番重要な事ですわ。

龍劍士?と龍殺し

ひたすら無心にて包丁を研ぐ。シャリシャリとテンポよく音を立て、切れ味を増していく。そんな最中、姉様が目を覚ました。

「な、何事?!」

「……あつ、起きたのですね」

水の入ったペットボトルで囲み鎖で背面合掌縛りにした状態でフローリングに転がっていた姉様は今自分が置かれた状況が理解できない様子。目に入る場所に胸の型崩れする要因を検索途中のパソコンの画面を見つけ何故かギョツとしています。意味不明ですね……。

「……これだから胸に栄養を吸われた人は。あつ、そうそう。聞きたいことがあるのですが」

「その前に包丁を放して貰えない? てか、どうして包丁なんて……」

「これですか? 姉様の胸を削ぎ落とし……いえいえ、何でも無いです」

「絶対何かある! マジであるのロリコン仮面にどんな教育を……ぶぎやつ!!」

包丁はちよつとしたジョークと威嚇の予定でしたがメルギスさんに失礼な事を言わ

れたので万が一のことを考えて用意していた霧吹きを鼻先に吹きかける。中身？ 凄く酸っぱいレモンジュース。猫科は柑橘類の匂いが苦手で猫妖怪の私達姉妹も同じ。……あと、強炭酸なので鼻の中や目に入ったら痛いです。

「ぎにやああああああつ!? 目があ! 鼻があ!」

「……………ごまあ」

ゴロゴロとのたうち回りながら悲鳴を上げる姉様を見下ろし、足で押さえつける。こうでもしないと話が出来ませんからね。無駄な脂肪を足で踏みつつ私は姉様に問い掛けた。

「姉様、貴女は本当に暴走したのですか?」

「……………さあて、どうだったかにやん? 痛たたたたつ!? 腿の内側を執拗に蹴るの止めてっ!」

「……………正直、こうして姉様をマンションに連れ込んだ時点で不味い橋を渡っています。事前に逃亡準備する暇もなく主を殺す理由があったのか、誰かに冤罪を着せられたのか……………どれですか?」

この時点で私は姉様が暴走したとは思っていません。だから私を置いて逃げざるを得ないほどに切迫した状況だったと、そう思うのです。今度誤魔化したら尻を蹴ろうと

爪先で小突くと姉様は渋々といった感じで口を開きました。

「……仕方ないかあ。まあ、白音も色々と遅しく……うん、文句を言いたいレベルで遅しくなったから教えて上げるわ。……あの男、私との約束を破って貴女に仙術を使わせて道具にする積もりだったの」

「……そうですか」

「あら、あつさり信じるのね」

「……姉妹ですから」

一時期は怯え信じられなかった癖に何をと自分に言いたくなくなったけど黙っておく。姉様は、そっか、ただ其れだけ言っただけです嬉しそうに見えました。この人、変わりませんね。じゃあ、もう縄を解きましょう。

「……私は帰るけど大丈夫？ 一緒に……は無理か」

「……それこそ姉様が私が助かる一縷の望みに縋って置いていった意味がなくなりますから。だつて一緒に行ったら反逆者として追われて……メルギスさんにも迷惑が掛かります。部長にも……」

「……ふーん、随分と慕っているのね。じゃあ、帰る前にお姉ちゃんが男の籠絡の仕方を

……」

「え？ 姉様つて年齢〓彼氏いない歴ですよね？ 籠絡云々には信頼性が……」

それに私はメルギスさんに抱いているのは恋愛ではなく親愛や尊敬、共に歩きたいのではなく彼に続いて歩きたい、そんな感じです。……そう続ける積もりですが姉様は泣きながら走り去って行きました。……言い過ぎましたかも。

「……はあ。自信が無くなるね、全く」

僕ことジークフリートは何度目かになる溜め息を吐く。鍾乳洞の奥、地下深い場所でも悪魔の目は暗視が効くので問題無くパーベキューをしていた。ドラゴンチェリーを使ったタレで味付けした肉や野菜はドラゴンに関わらない者でも、ドラゴンの因子を持つていれば尚更美味しく感じる上に幸福感すら得る。……教授によると人が肉を食

べた時に発生する脳内物質がドラゴンの因子持ちがドラゴンチェリーを食べた場合は十倍近く分泌されるとか。ヤバい薬物じゃないよね？

話を戻そう。僕が愚痴を呟く理由は目の前で熱い鉄串を素手で持つて口の周りをタレでベタベタにしている幼女……の姿をした年齢不詳のドラゴンにあった。名をオーフィス、テロリストの親玉である。何故そんなのこんな場所で飯を食べているかと言うと……。

「……オーフィスの懐柔を命じられた？ 魔王も無茶を言うね。随分と信用されているじゃないか」

「義理の弟を使い潰そうとする奴だぜ？ 転生悪魔の現状を私的に嘆いても公的な立場を優先して貴族を刺激しない奴なら無茶だって言うだろうさ……」

ドラゴンチェリーのお菓子が随分とお気に召したらしいオーフィスは再び来ると言ったらしいが、上に報告したら何とか仲良くなってくれとサーゼクスに頼まれたとか。まあ、部下に戦力増強を任せる事で逆にグレートレッドに挑もうとする動きが緩慢になっている以上は役に立たないと見切りをつけさせる事も出来ず、かと言って倒せもしない。なら、懐柔は妥当な線かな？

「……他の勢力が何って言うかが問題だけど」

「既に今度行う三竦みの会談の打ち合わせで報告済みだよ。……あつ、昨日現れたから次元の狭間に近い暗くて静かな場所で飯に誘ったけどお前も出席な。……龍殺しの元魔剣の使い手として見定めて欲しいんだ」

……てな感じで僕がこの場にいる。幼女（の姿をした最近まで老爺姿のドラゴン）を暗くて人目の付かない場所に誘うとか……うん、止そう。何かを察して睨んできている。

さて、じゃあ僕の武器を再確認だ。

神器 龍の手の亜種 聖剣創造 魔剣創造 二種とも龍殺しは作成可能。

その他……これが重要だ。異空間に仕舞っているのは使用者の命すら削り、禁手化で龍の力が増した状態で全開にすれば致命傷すら負う最強の魔剣こと魔帝剣グラム……だった物だ。今は中央に敵の剣を受け流す役割が大きい銀の突起が付いた赤いラウンドシールドになっている。うん、面影が無いにも程が……。

「あ痛っ！」

……今現在、盾の内側にはオーラが発生しない安全設計に教授が改造って言うか別物に作り替えたんだけど、意思が以前よりハッキリした上に思考を読んだり手入れを怠っ

たりしたりして怒らせると痛みを与えてくる。盾に尻に敷かれていてる気分だよ。

でも、盾の外側には相変わらず凶悪なオーラが付いているから攻撃をしたり叩きつけられたりした相手は甚大なダメージを受ける上に、内側にはめ込んだゴツイ銃はチャージしたオーラを弾丸として放つ凶悪設計。……銃と盾と剣を同時に使う、それが今の僕のパトルスタイルさ。……そして、それらを考慮した結果……。

「……まさに虫虻と龍の戦いだね」

此方を見て首を傾げるオーフィスを見ながら呟く。蛮勇と勇氣は別物。時に戦わずして勝つのも重要だ。……つたく、教授が手を出して冥府を追放されたアレが使えれば倒せるかもだけど絶対じゃない。死なない以前にダメージを受けても平気だから避けるって事を知らないだろう、有効である事とそんな予測が的中する事に賭けるにはリスクが多い。ああ、本当に厄介な存在だよ。

僕が平静を装う中、メルギスは新しいメニューを差し出していた。

「オーフィス、ドラゴンチェリーを練り込んだクリームやチョコを使った菓子が有るけど食べますか？」

「……食べる」

こうして見ると普通の子供に見えるけど忘れるな。自分の意志で戦争を起こそうと
している奴らに力をばらまいているって。……まあ、可愛いのは認めるけどさ。あつ、
口にクリームが付いてるや。指先で拭ってあげようかな……。

野良犬と襲撃者

本日はシトリ一家のお嬢様であるソーナ様に招かれたお茶会の日……なのですが、お供のメイド兼眷属代表の私の目の前のメルギスさんは面倒だという感情を隠そうともせずに車の中で書類を手にしていました。

「えっと、メルギスさん？　もう直ぐ着きますね」

「…………… ああ、そうだな。桃花、適当に話合わせておけよ？　理想ばかりで現実が見えていない奴らつて厄介だからよ」

この理想というのは彼女達が設立を目指す誰でも通えるレーティングゲームの学校で、現実とはゲームを取り巻く環境の事なのでしょう。まあ、スラムでの生活歴が短い私でも彼女達のような貴族の方が少なく、大多数の支配下に置かれた下級悪魔の立場を理解できていないと分かります。それは同行者の彼も同意見みたいで……。

「悪魔の寿命は長いし、意識改革にも相応の時間が必要だ。あの資料と……さつき貰った物を使って掃除を行ってもね。ゲームが夢を見る為の場所なのは確かだけど、ステージに上がるための道は汚れきっている。腐臭で鼻が曲がるほどにね」

今回招待された際、メルギスさんは出来るだけソーナ様の相手はしたくないというの

が本音だ。でも、招待を受けた以上は立場があるし、彼女ってメルギスさんに好意を抱いていますから積極的に寄ってくるでしょう。……だから特別な招待客を連れていきたいと申し出て、相手が相手だけに向こうも喜んで受け入れた。その彼はメガネとペンを……正確には隠しカメラを仕込んだそれら二つを忌々しそうに手にしていました。

「アーサーだったかな？ 私からしても意味不明な理由でテロ組織に入った……いや、正義感から独断で潜入したんだっただね。協力者の契約相手の身内を悪く言うのは良くないか」

「どつちにしろ馬鹿だけどな、あの坊ちゃん。まあ、別の派閥の構成員に色目使って協力を申し出る振りをして盗撮したそうさ。旧魔王共って魔力や魔術への備えはしてても人間の道具は警戒がザルらしいからな」

「奴らと裏で繋がっている貴族や脅迫のために集められた不正の証拠……これらに君に以前貰った手記の一部が揃えばゲームを自分達の権威の道具にしている連中をかなり追い落とせそうさ……最悪、私も道連れにされるだろうがね」

「……あの手記は俺の死んだ仲間の一人が残した物だ。其れ使って俺まで巻き込むなよ？ ……言っておくけどボロ負けした時の俺と同じだと思っただら間違いだからな」

分かつているさ、と、彼が……デイハウザー・ベリアル様がそう言っただけの時、丁度車は目的地に到着する。既に出迎えが集まっていました。

「デイハウザー・ベリアル様、この度はようこそお越し下さいました」

「いやいや、そう緊張しなくて結構。今日はオフだからね」

貴族や魔王にオフもへったくれも無いのでは？　と言いたいけど我慢して様子を守る。ソーナ様達も最上級悪魔でゲームのチャンピオンが来たとなつては誰を優先的に相手すべきか分かっているらしく、これでメルギスさんは立場に傷を付ける事無く逆に恩を売った上にソーナ様の相手は最低限で済むという計画通りに……行ったら良かったのですが。

「あは！　こうやって二人でのんびりするのって初めてだね！　まるで恋人同士みたいで……なーんちゃって！」

「……セラフオル様、お立場を考慮した言葉をお願いします。成り上がりが思いがたつて魔王様に不敬を働いたと思われては領地の民にも迷惑が掛かります故」

「大丈夫、今日はオフだから！」

拜啓、死んだお母様。俺って呪われてるの？ あの眼鏡をデイハウザーを使って防いだと思ったら、三棘みの会談が決まったって言うのに外交担当のトップが呑気に妹主催の茶会に出席とか暇だな、おい。てか、魔王はオフの時は魔王じゃなくなるとか勘違いしてるだろ。オフでも魔王は魔王だつての！

妙に密着して甘えた声を向けてくる馬鹿魔王に辟易しつつも顔には出さず時間が過ぎるのを待つばかり。ああ、俺の貴重な貴重な連休が無駄に過ぎていく……。

そんな俺の嘆きに気付かずベタベタ触ってきたんだが、急に身体を預けると囁くような声で訊いてきた。

「……ねえ。ソーナちゃんと私の事、どう思ってる？」

妹……目が悪いんだな。姉……痛々しい。

「お二人とも聡明で素敵な方かと。私など見上げるだけでも幸福が過ぎます」

「えへへ。そっか、そっか。素敵だつて思ってくれてるんだね。……でもさ、勇気を

出して手を伸ばしたら案外簡単に掴めるかもよ？」

「……恐縮です」

いや、手を伸ばしたくねえから。寧ろ遠ざかりたいし、勇気を出してグーパーン叩き込んで良いか？ 駄目だよなあ……。

取り敢えずこんな魔王共には例の手記を渡せないと、しみじみそう思った……。

「……疲れた。マジで疲れた。なあ、ルーリア。俺、疲れちまつたよ……」

「はいはい。頑張ったわね」

あの地獄から解放され領地に戻った俺はお気に入りの昼寝スポットで寝転がる。草の感触が気持ち良く、フェニックス家での打ち合わせを終わらせたルーリアが膝を枕に貸してくれたので心地よく眠れそうだ。……何かさ、生理的に苦手なんだよ、あの魔王。

確か領主としての経験もないはずだろ？ 何でそんなのを魔王にしているんだ上層部、傀儡にしやすいからですよ、畜生め！

疲れきった俺を氣遣ってくれるのは大変有り難い。頭をポンポン叩かれるのは少し気になるが、今の此奴は素敵に見えるな。

俺の勝利……と思っただが。

「破っ！」

「……気合いでぶっ壊しますか」

息を一瞬吸い込み、気合いで粉々に鎖を砕いた男は俺に近付き……ハイタッチを交わした。

「久し振りだな、二人とも」

「帰るなら連絡くらい入れろよ」

………つたく、相変わらず俺の仲間は癖が強いぜ。

野良犬と復讐 挿し絵有り

この日、私は非常に気分が良かった。何故ならばお嬢様の授業参観で旦那様もサーゼクス様夫妻も不在だからです。奥様？特に関わりませぬね、彼女とは。どうも帰りが遅い家臣……嫁ぐ際に実家から連れてきた付き合いの長い方……を心配しているらしく。まあ、正直に言うならば私が殺して死体も処分しました。

「教授も恐ろしい物を作った……」

「反逆蒟蒻でしたか？ ジークもうっかり食べて大変だったそうですよ」

今は仕事なので辛うじて猫を被っているルーリアが口に出した反逆蒟蒻とは教授の発明品で、某国民的アニメの道具を再現しようとして失敗、意に反して質問に口が勝手に正直に話す様になる恐ろしい物です。因みにジークはジュリイとの会話でこんな事があつたそうで……。

「あ……あの！ ジーク君は私とその……エッチな事がしたいのですか？」

「勿論さ！ 今すぐ君とイチラブ交尾がしたいね」

この時、メドウさんが遊びに来ていたから叩きのめされ、暫くは接近禁止となったの

で良い機会にと学校に通つて頂きます。具体的に言うとお嬢様の関係で私が足を運ぶ機会を減らす為に駒王学園にです。拒否？ 却下に決まっているでしょう。悪気はない事故の類とはいえ、ジュリイの訓練の邪魔ですから。……大体、あの三人への指導も与えた道具もジュリイの制御訓練の為のデータ集めに過ぎません。情は移るし引き受けたからには全力を尽くしますけど……。

……しかしジーク、矢張り君は本物か。

「……それで良かったの？ 長い間調べて漸く見つけた親の仇をあつさり殺しちやつてさ。殺した理由も聞かないで……」

「必要なのは殺したか否か、依頼者や仲間の有無。理由など知るだけ不快でしょうからね」

「……こんな時位は本性で話しなさいよ」

復讐は何も生まず、報復は無意味だ。そんな言葉を口にする方も居ますけど、無駄は一切削ぎ落とした機械的な禁欲生活を送って居るのでしようね。憎悪は消えない？ ええ、その通り。親を殺された憎悪が消えてなるものですか。

『ふふふふふふ！ この世界では君を使って面白おかしく楽しませて貰うよ』

我が輩が師匠と出会ったのは幼き頃。将来を嘱望された神童で最上級死神も約束されたとまでされていたが、その程度など今やどうでも良い。知的好奇心のままに動き、したい実験や発明を行う。それが我が輩の生きる道である。師匠は喋るパンダだと言うと誰もが疑うが実に馬鹿馬鹿しい。世界の全てを知っているとでも言うのかね、奴らは。

「……墮天使の総督が我が輩に興味を持っている？ 詰まらんことだな」

「でも、会談で和平を結ぶ予定って噂だし、そうなれば要請が有るかも知れないわよ？」
漸く家内の許しが出て家に帰れるので居候先であったルルネの店の一室を掃除していたのだが、我が輩の才能という灯りに釣られて寄ってきた中途半端な天才に辟易してしまう。

「適当に相手をするまでだ。多少はメルギスの顔を立ててやるが、天才とは孤高であるべきだからな」

我が輩は研究がしたいからするのであり、他者や社会的規範に介入されたくはない。

自らのみで思考し調べ上げ完成させる、そうでなければ無意味に過ぎん。世話になって
いる小僧の顔は立ててやるがそこまでだ。言葉を交わせども研究に立ち入らせはせん
ぞ。

……しかし改造神器の研究も進んだが後一步が足りん。あの小娘が自由に歩くた
めにも最上位クラス……出来れば神滅具が欲しい所なのだ。何処かに抜き取つて
も構わない奴は居ないものか。生きたまま抜き取れるから捕虜にするにも問題ないの
だが……。

「仕方ない。家に帰ったらサマエルの血の研究を進めよう。……ハーデスの奴もサンプ
ルを採取した程度で追放するとは心が狭いな」

ああ、全く世界はままならん。明日有るといふ三竦みの会談で神滅具の所有者が裏
切つて欲しい。どうせ小僧ならどうとでもなるだろうしな。

「ジーク、どうも俺はこの場所でのいうのが気に食わん」

三竦みの会談、下手すれば今度こそ何処かの種族が、もしくは全ての種族が壊滅する
大戦に繋がるであろう話し合いが始まった。僕は最近になって眷属になった訳だし会

談を行う部屋には入らないけどメルギスの兵士として警備に駆り出されていたんだ。

「……………ふん。所詮は人などどうでも良いみたいだな」

「幾ら三方ともが納得できる場所が見つからないといっても街中はね……………」

会談の場所はなんと街中の駒王学園。騎士になった浩宇は他の奴らに聞こえないように毒づくけどココビエルが問題を犯した場所以外で他の勢力の所有地で会談に相応しい場所が無かったのも、他の神話に仲介して貰って場所を借りるのも無理って分かるけど……………。

殺気立った大勢の護衛、破断すれば戦争の戦士となる奴らを見ながら溜め息を吐きたくなる。戦争になれば人間が巻き込まれて大勢死んで、他の神話に介入する口実を与えるんだろうなって。教授の元ボスのハーデスとか、ハーデスとか。

そんな風話をしていると校庭全体に魔法陣が出現し、無数の魔術師達が現れる。何奴も此奴も上級悪魔クラスはあってグラムが嬉しそうに反応しているから龍の力を得ているみたいだった。

「オーフィスの蛇とやらか……………」

「まあ、都合が良いかな？」

直ぐ様グラムを取り出し、セットしていた銃を手にとると引き金を引く。最強の魔剣のオーラ、それも龍殺しの力を出力三十%程にして発射された。破壊的なオーラは一撃

で魔術師を絶命させ、咄嗟に障壁で防ごうとするも容易に破壊する。龍の力で強化されたのだから龍殺しに弱くなっていると何故分らないんだらうね。

「さて、俺も動くでしょうか……破っ!!」

「はははははっ!! 君達で戦功を稼がして貰うよ!」

遠くの敵は銃で撃ち殺し、囲んでくれば創造した魔剣や聖剣を全方向に飛ばし、寄ってきたなら盾で撲殺するか剣で斬殺する。

浩宇は浩宇で空中を物凄い勢いで駆け回りながらすれ違いざまに拳を叩き込んで爆散させていった。次から次へと現れる魔術師達に選抜された護衛達が押される中、僕と浩宇は撃破スコアを競い合う余裕すら有る。

「魔王連中は本命の出待ちか……」

学園を守護する結界の維持の為にトップ陣は動かない。脱出防止の結界も張っているみたいだね。そうこうしていた時、同じ様に魔術師達を倒していた墮天使側の護衛、現在の白龍皇のヴァーリが声を掛けてきた。

「やあ、君は随分と強いけど名前はなんだい?」

「男のナンパはノーセンキューなんだけだね。……ジーク、ジークフリートだ」

「……ふーん。なあ、機会があれば俺と戦わないか？ 君の仲間の彼も興味深い」

「機会があればね。絶対ないと思うけどさ」

因みにアーサーからの情報で此奴が寝返っているって僕は知っている。墮天使総督のアザゼルにとつて息子同然だから言っても虚言だとされる可能性があったし、都合が良いから黙ってた。

そして会談が行われている部屋に魔王クラスの悪魔が出現した瞬間、背後のヴァーリから濃密な殺気が放たれる。

「機会は今……がはっ!？」

何をしたって？ 裏切り者って分かってたから警戒していた奴が不意うちしようとした瞬間に盾で殴りつけただけさ。カウンターで叩き込んだ盾は当然龍殺しのオーラを纏っている。白龍皇には効果抜群で鎧は碎け、張り直す前に僕はヴァーリの手足を撃ち抜いてから首を掴んだ。

「じゃあね、臆病者さん。多分今日が言葉を交わす最後の日だ」

「お……俺が臆病者だと……?」

「墮天使の組織に居る時は派手に戦いを挑まず、無限龍が居る組織に入った途端に派手に動いただろ、君? 後ろ盾がないと好きな戦いもセーブして、強い奴と戦うのが好きだけど弱らせないと戦えない。ほら、臆病者さ」

そう言いながら僕は教授から預かった物を取り出す。見た目は小さな懐中電灯。先端を心臓の上に当ててスイッチを入れる。ポンって音がしてヴァーリから龍の力が消え去った。

「なっ!? アルビオン? アルビオンっ!?!」

「大丈夫大丈夫。保護者ならちゃんこの『セイクリッド・ギア神 器 リムーバー』の中さ。テロリストに

こんな危険な物は必要ないからね。……じゃあ、お休み」

先程のダメージと動揺で隙だらけのヴァーリの鳩尾に拳を叩き込む。さて、これで武勲は僕の勝利だな。ジュリイが誉めてくれそうだ。……今晚も頼んじやおうかな。

昨日、ジュリイと夜中に会ったんだ、こっそりね。その時の二人だけの秘密。あの子の……と言っても僕の方が年下だけ……あの淫靡な姿には今でも興奮するよ。兎に角凄かった……。